新潟県埋蔵文化財調査報告書　第107集

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書 Ⅱ

正 尺 A 遺 跡

2 0 0 1

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書 Ⅱ

正 尺 A 遺 跡

2 0 0 1

新 潟 県 教 育 委 員 会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

日本海沿岸東北自動車道は、新潟市新潟空港インターチェンジを起点とし、秋田県鹿角郡小坂町小坂ジャンクションを経て、青森市に至る総延長340㎞の高速自動車道です。沿線地域の産業・経済・文化の交流発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

本書は、この道路建設に先立ち発掘調査を実施した「正尺Ａ遺跡」の報告書です。調査の結果、古墳時代前期の竪穴住居跡・土坑が検出され、多数の土器が出土しました。また、近世の土坑からは当時の農村部の生活の様子を物語る遺物が多数見つかっています。

今回の調査結果が、本県における地域の歴史を解明する研究資料として活用され、多少なりとも寄与するところがあれば幸いです。

最後に、この調査に対して多大なご協力とご援助を賜った豊栄市教育委員会ならびに地元住民の方々をはじめ、日本道路公団北陸支社新潟工事事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成13年６月

新潟県教育委員会

教育長　板屋越　麟　一

例　　言

1　本報告書は新潟県豊栄市葛塚字子辰高入3059番地ほかに所在する正尺Ａ遺跡の発掘調査記録である。

2　発掘調査は日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、新潟県教育委員会が日本道路公団から受託して実施したものである。

3　発掘調査は新潟県教育委員会（以下、県教委と略す）が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団と略す）に調査を依頼し、平成12年度に実施した。

4　整理及び報告書作成にかかる作業は平成12年度に実施し、埋文事業団職員がこれにあたった。

5　出土遺物と調査にかかる資料は、すべて県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の註記記号は「正尺Ａ」とし、出土地点・層位等を併記した。

6　作成した図版のうち、既成の地図を使用した場合はそれぞれにその出典を記した。

7　本書に掲載した遺物番号はすべて通し番号とし、本文、遺物観察表、図版、写真図版の番号は一致している。

8　引用文献は著者および発行年を文中に［　］で示し、註も脚注として巻末に一括して掲載した。
　第Ⅳ章　自然化学分析のみ引用文献を各節の文末に掲載した。

9　本書の記述は、尾崎　高宏（埋文事業団　調査課公団担当　調査班班長）、栗林　宣明（同　主任調査員）、相羽　重徳（同　嘱託員）が分担執筆したもので、分担は以下のとおりである。
　また、本書の編集は尾崎が行った。
　第Ⅰ章　序説（尾崎）
　第Ⅱ章　遺跡をとりまく環境（栗林）
　第Ⅲ章　遺跡の調査（１～３・４Ａ～Ｃ・５　尾崎、４Ｄ　相羽）
　第Ⅳ章　自然科学分析（１　松田、２　卜部・高浜）
　第Ⅴ章　まとめ（１　尾崎、２　相羽）

10　発掘調査から本書の作成に至るまで下記の方々から多大な御教示・助言を得た。厚く御礼申し上げる。
（敬称略、五十音順）
安藤　正美　　家田　淳一　　伊藤　啓雄　　卜部　厚志　　笹沢　正史　　高浜　信行
立木　宏明　　中野　雄二　　成瀬　晃司　　野上　建紀　　橋本　博文　　船井　向洋
宮崎　芳春　　吉沢　　貴　　渡邊　朋和

目　　次

第Ⅰ章　序　説

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査の方法と経過

A　一次調査 …… 2

B　二次調査 …… 2

3　調査体制 …… 4

4　整理・報告の体制 …… 5

第Ⅱ章　遺跡をとりまく環境

1　地理的環境 …… 6

2　周辺の遺跡 …… 7

第Ⅲ章　遺跡の調査

1　グリッドの設定 …… 9

2　層　序 …… 9

3　遺　構 …… 11

A　概　要

B　各　説

4　遺　物 …… 12

A　概　要

B　古墳時代の遺物

C　近世の遺物

D　古代・中世の遺物

第Ⅳ章　自然科学分析

1　花粉分析及びプラントオパール分析 …… 20

2　正尺A遺跡における火山灰分析 …… 29

第Ⅴ章　まとめ

1　古墳時代 …… 32

2　近　世 …… 34

要約・引用・参考文献・観察表 …… 36

挿図・表目次

第１図　日本海沿岸東北自動車道の路線図 …… 1
第２図　一次調査トレンチ配置図 …… 2
第３図　二次調査範囲図 …… 3
第４図　新潟平野の地形 …… 6
第５図　周辺の遺跡分布 …… 8
第６図　グリット配置図 …… 9
第７図　基本層序 …… 10
第８図　ＳＩ１小グリット別遺物分布 …… 11
第９図　ＳＫ２中グリット別遺物分布 …… 11
第10図　大グリッド別重量分布 …… 12
第11図　ワラスグリ模式図 …… 18
第12図　サンプリング位置 …… 20
第13図　№1プラントオパール分析結果 …… 25
第14図　№2プラントオパール分析結果 …… 25
第15図　№3プラントオパール分析結果 …… 25
第16図　№4プラントオパール分析結果 …… 26
第17図　№5プラントオパール分析結果 …… 26
第18図　プラントオパールの顕微鏡写真 …… 27
第19図　花粉・胞子の顕微鏡写真 …… 28
第20図　火山ガラスの化学組成と対比 …… 31
第21図　火山灰層の検出状況 …… 31
第22図　火山灰層に含まれる火山ガラス …… 31
第23図　高杯形土器の接合方法 …… 33
第24図　粘土充填状況 …… 33
第25図　粘土紐接合部分の刻み目 …… 33
第１表　花粉分析結果 …… 24
第２表　プラントオパール分析結果（その１） …… 24
第３表　プラントオパール分析結果（その２） …… 24
第４表　火山ガラスの化学組成 …… 31

図　版　目　次

図版１　遺跡周辺の旧地形
図版２　遺構全体図
図版３　遺構実測図（１）
図版４　遺構実測図（２）
図版５　古墳時代の土器（１）
図版６　古墳時代の土器（２）
図版７　古墳時代の土器（３）
図版８　古墳時代の土器（４）
図版９　古墳時代の土器（５）
図版10　古墳時代の土器（６）
図版11　近世の陶磁器（１）
図版12　近世の陶磁器（２）　古代中世の遺物
図版13　木製品・その他（１）
図版14　木製品・その他（２）

【写真】

図版15　遺跡周辺の航空写真
図版16
　基本層序③　東区沢の堆積状況
　火山灰検出状況
図版17
　６Ｂ・Ｃ　遺物出土状況
　５Ｂ・Ｃ　遺物検出状況
　ＳＩ１　検出　ＳＩ洞溝　ＳＩ１完掘
　Ｐ４セレクション　ＳＫ２は北側遺物出土状態。
　ＳＫ２メインベルト　内遺物出土状況
図版18
　ＳＫ２中央部遺物出土状況
　ＳＫ２完掘
　ＳＫ３遺物出土状況
　ｐｉｔ４完掘
　ＳＫ完掘
　西区完掘
　東区完掘
図版19　古墳時代の土器（１）
図版20　古墳時代の土器（２）
図版21　古墳時代の土器（３）
図版22　古墳時代の土器（４）
図版23　古墳時代の土器（５）
図版24　近世の陶磁器
図版25　近世の木製品・その他

第Ⅰ章　序　説

1　調査に至る経緯

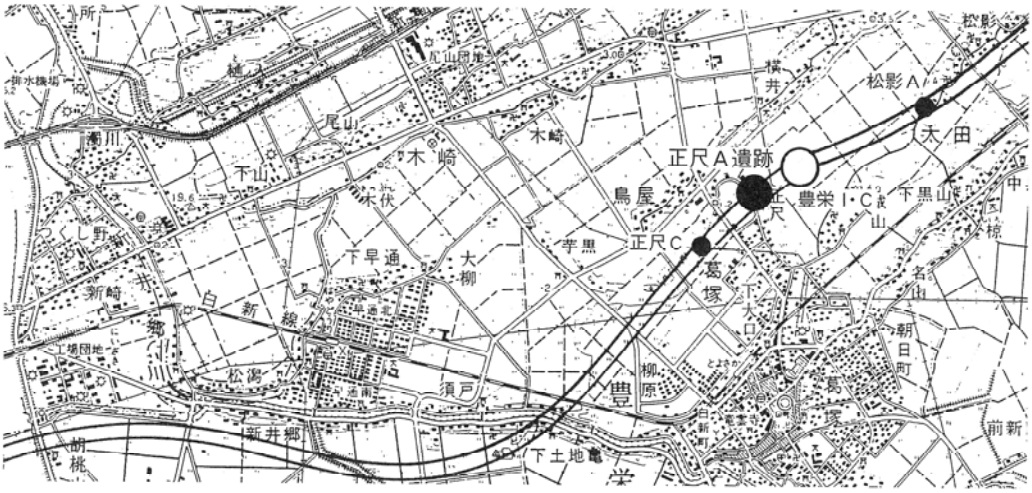
日本海沿岸東北自動車道は、新潟市から青森市に至る総延長340kmの高速自動車道である。本路線は、現在、平成14年度に中条インターチェンジまで開通させる計画で工事中である。新潟市で北陸自動車道と、秋田県鹿角郡小坂町で東北自動車道と連結することで、太平洋岸と日本海沿岸とを連結させ、産業・経済・文化の交流発展を促進させるのに大きな役割を果たすものと期待されている。

日本海沿岸東北自動車道の新潟空港インターチェンジ（新潟市）から中条インターチェンジ（北蒲原郡中条町）までの28kmは、平成元年２月に基本計画が決定された。正尺Ａ遺跡にかかる第12次施工命令区間は、平成５年11月に施行命令が出された。これを受けて、日本道路公団北陸支社（以下、道路公団と略す）と新潟県教育委員会（以下、県教委と略す）との間で、法線内の遺跡の分布調査・試掘調査等に関する協議が本格化した。

県教委は道路公団の依頼を受け、平成６年３月１日、11月28日～12月１日に第12次施行命令区間の踏査を行い、周知の遺跡２ヶ所、新発見の遺跡15ヶ所について調査が必要である旨、道路公団に通知した。その後、遺跡推定地６ヶ所を追加して、総計303,200㎡について調査が実施されることとり、県教委と道路公団で一次調査・二次調査についての協議が行われた。

県教委から依頼された財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団と略す）は、平成９～12年度に調査の必要性を通知した箇所について、遺跡の有無を確認し、今後の取り扱いの資料を得ることを目的として一次調査を実施した。その結果、第12次施工命令区間のうち、５遺跡について二次調査が必要である旨、報告した。

正尺Ａ遺跡の一次調査は、平成11年６月14～17日、平成12年４月14～21日・５月15～17日に実施した。調査の結果、5,240㎡について二次調査が必要である旨報告した。二次調査は平成12年５月22日より開始した。



第１図　日本海沿岸東北自動車道の路線図
（国土地理院「新潟」1:50,000原図 平成3年発行）

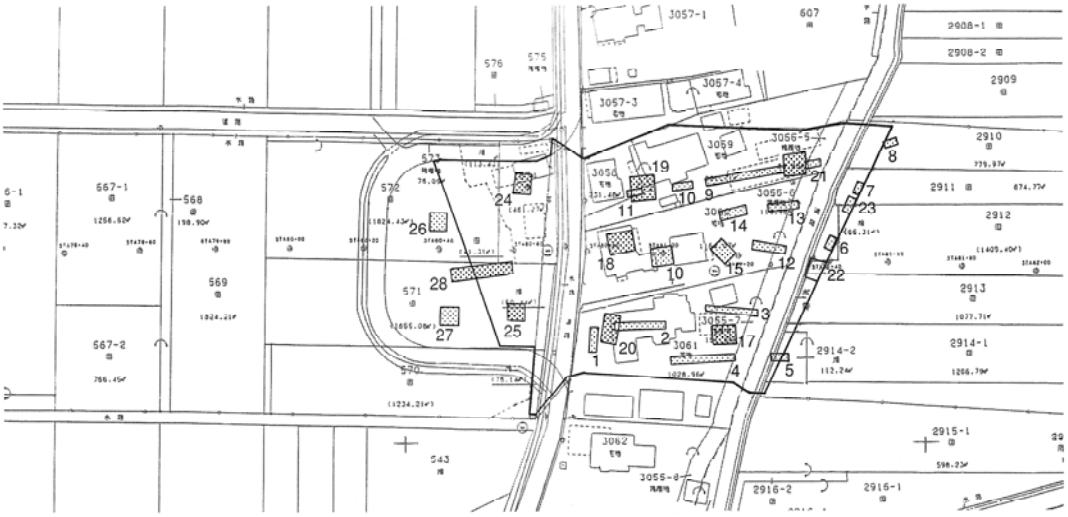
2　調査の方法と経過

A　一次調査

県教委から依頼された埋文事業団が、平成11年６月14日から17日までの期間と、道路法線内の家屋が移転した後の、平成12年４月14～22日・５月18～21日の期間に一次調査を行った。調査は対象範囲内に合計48ヶ所のトレンチを任意に設定し、重機を使用して表土から地山まで徐々に掘り下げ、人力で精査を行いながら遺構・遺物の有無、土層の堆積状況を確認した。その結果、遺構は検出されなかったが、17～21・24・25・28トレンチで古墳時代前期初頭の土器が約320点出土した。調査の結果を受けて県教委は、これらのトレンチの位置する範囲（5,240㎡）について二次調査が必要であると道路公団に通知した。

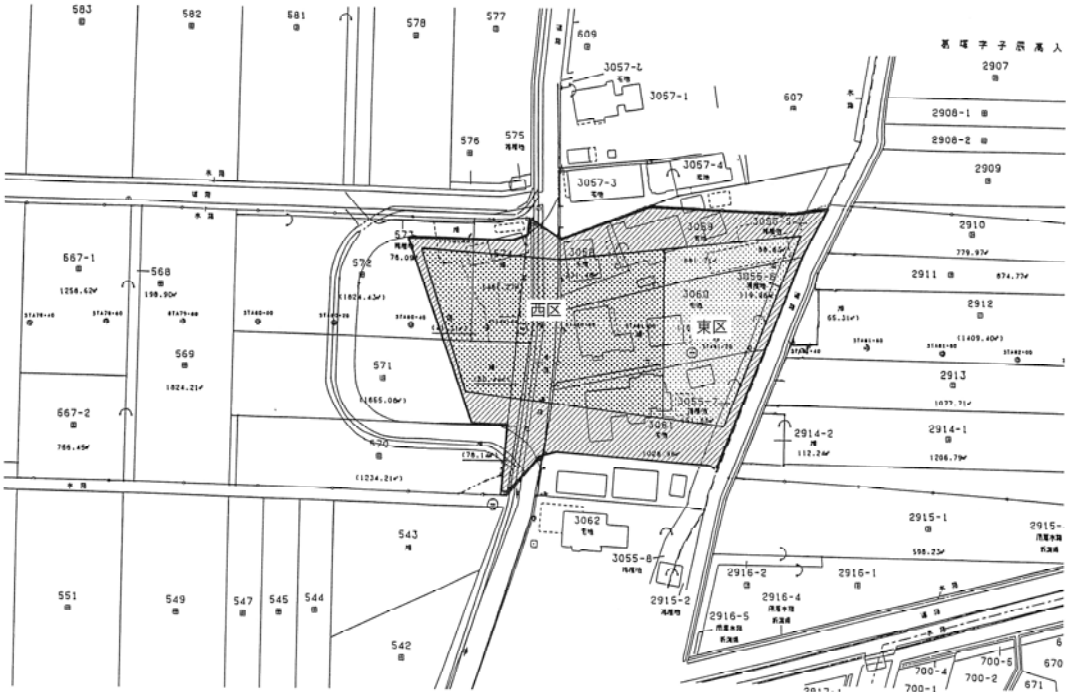
B　二次調査

二次調査は、平成12年５月22日から10月20日までの期間で実施した。調査は基本的に調査員３名、作業員45名（10月１日からは20名）の体制で行った。調査範囲は家屋跡地であったため、その造成の際、約１ｍの盛土がされており、その撤去作業を先行して５月22日から開始した。また、調査区に近接して家屋が存在していること、掘削深度が現地表から２ｍ以上に及ぶこともあり、調査区外周に鋼矢板打設・暗渠敷設作業を並行して行った。（周囲との安全距離を確保して矢板を打設したため、実質3,800㎡の範囲について調査を行った）。実質的な調査は６月５日より開始した。工事工程との関係上、８列のグリッドから西側2,200㎡を先行して引き渡す必要があったため、便宜上調査区を東・西区に分け、西区を優先して行うこととした。表土除去は重機を用い、土層観察用のセクションベルトを設定しながら７月４日まで作業を行った。作業途中、８Ｃ・８Ｄグリッド付近のⅡ層土中で平安期の遺物が数点出土した。遺構が存在する可能性も考え、周辺を人力により掘削したが、遺構は確認されず、遺物も散漫であったため、Ⅲ層（古墳時代包含層）上面まで重機掘削を継続した。表土除去に並行して、６月12日より作業員を投入し、調査員の指示のもと西側から



第２図　一次調査トレンチ配置図

包含層掘削を開始した。セクションベルトおよび大グリッドごとに設定した補助ベルトフ脇に排水を兼ねたサブトレンチを開け、層序を確認しながら掘削を行った。調査区中央北側（3～6Ｂ・Ｃ）付近を中心に多数の遺物が出土した。8月下旬に包含層掘削をほぼ終了し、竪穴住居跡1軒・廃棄土坑1基を確認した。9月4日～12日に遺構の調査・図化作業を行い、9月14日西区全体の完掘写真を撮影した。9月20日に西区の調査を終了、県教委による一部終了確認（教文第672号　平成12年9月20日）ののち、日本道路公団に引き渡しを行った。同日から東区1,800㎡の調査に着手した。補助ベルト脇のサブトレンチ掘削の結果、遺物がほとんど見られず、東側端では湿地状の落ち込みが確認されたため、1小グリッドおきの市松状試掘トレンチ掘削に切り換えた。8Ｃ・10Ａグリッドで江戸時代後期の土坑を検出した。10月17日に掘削を終了し、東区の完掘写真の撮影を行った。すべての作業は10月20日をもって終了した。県教委による終了確認は10月24日付けとなっている（教文第781号　平成12年10月27日）。



第3図　二次調査範囲図

3　調査体制

【一次調査】

調査期間　平成11年６月14日～６月17日
　　平成12年４月14日～４月21日・５月15日～５月17日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　野本憲雄）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（事務局長　須田益輝）

〈平成11年度〉

管　　理　須田　益輝　（専務理事・事務局長）
　　若槻　勝則　（総務課長）
　　本間　信昭　（調査課長）

庶　　務　椎谷　久雄　（総務課主任）

調査指導　寺崎　裕助　（調査課調査第１係長）

調査担当　鈴木　俊成　（調査課主査）

調査職員　石田　守之　（調査課　嘱託員）

〈平成12年度〉

管　　理　須田　益輝　（専務理事・事務局長）
　　長谷川司郎　（総務課長）
　　戸根与八郎　（調査課長）

庶　　務　椎谷　久雄　（総務課総務班班長）

調査指導　寺崎　裕助　（調査課公団担当課長代理）

調査担当　小田由美子　（調査課　確認班班長）

調査職員　後藤　　孝　（調査課　確認班主任調査員）
　　松井　　智　（調査課　確認班嘱託員）

【二次調査】

調査期間　平成12年５月22日～10月20日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　野本憲雄）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（事務局長　須田益輝）

管　　理　須田　益輝　（専務理事・事務局長）
　　長谷川司郎　（総務課長）
　　戸根与八郎　（調査課長）

庶　　務　椎谷　久雄　（総務課総務班班長）

調査指導　寺崎　裕助　（調査課公団担当課長代理）

調査担当　尾崎　高宏　（調査課公団担当調査班班長）

調査職員　栗林　宣明　（調査課公団担当主任調査員）
　　相羽　重徳　（調査課公団担当嘱託員）

4　整理・報告の体制

出土遺物の水洗作業は調査現場で発掘調査を並行して行い、註記・接合・復元・原稿作成は平成12年10月から平成13年３月にかけて新潟県埋蔵文化財センターにて実施した。整理体制は以下に示す通りである。

整理期間　平成12年10月23日～平成13年３月31日

主　　体　新潟県教育委員会（教育長　野本憲雄）

整　　理　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（事務局長　須田益輝）

管　　理　須田　益輝　（専務理事・事務局長）

　　長谷川司郎　（総務課長）

　　戸根与八郎　（調査課長）

庶　　務　椎谷　久雄　（総務課総務班長）

整理指導　寺崎　裕助　（調査課公団担当課長代理）

担　　当　尾崎　高宏　（調査課公団担当調査班班長）

職　　員　栗林　宣明　（調査課公団担当調査班主任調査員）

　　相羽　重徳　（調査課公団担当調査班嘱託員）

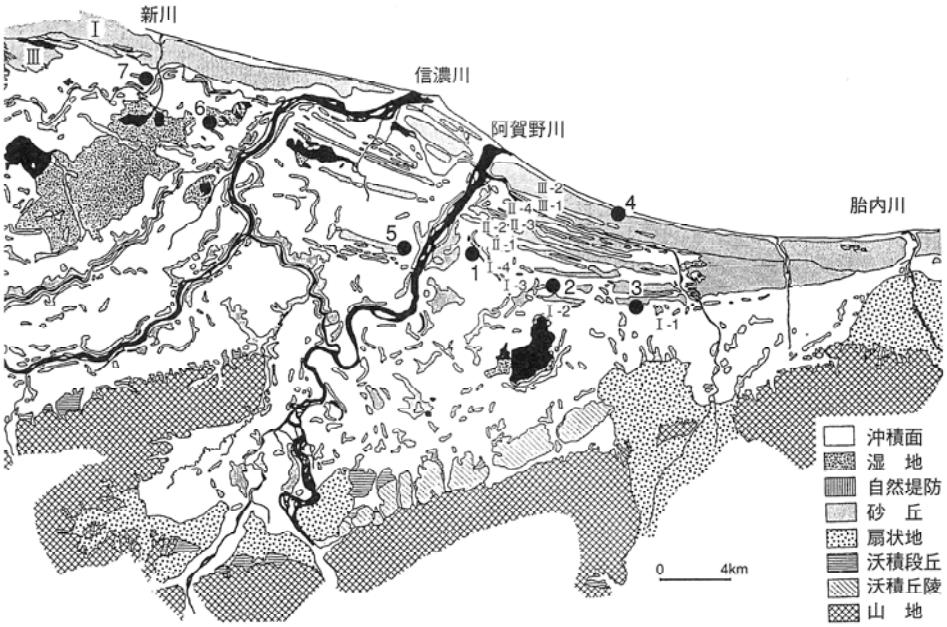
　　小熊　紀子　（調査課整理担当嘱託員）

　　小林智恵子　（調査課整理担当嘱託員）

第Ⅱ章　遺跡をとりまく環境

1　地理的環境

新潟県は、日本海に臨む南北約250㎞に及ぶ海岸線を有し、そこには日本有数河川である信濃川・阿賀野川が河口を開いている。この２大河川を中心とする、西を西山丘陵と角田・弥彦山地、北を朝日・飯豊・越後山地、東を東山丘陵・新津丘陵・笹神丘陵・五頭連峰・櫛形山脈に囲まれた、南北約100㎞、東西10～25㎞、面積2,070㎢の部分が新潟平野（越後平野）である。新潟平野は信濃川・阿賀野川の運搬する土砂で埋められてできた三角州平野を主とする氾濫原の沖積平野であり、平野の西側には海岸線に並行して砂丘列が並んでいる。この砂丘列を新潟砂丘とよぶ。砂丘は、いずれも完新世に形成されたもので、内陸から、新砂丘Ⅰ（1～4）・新砂丘Ⅱ（1～4）・新砂丘Ⅲ（1～2）に区分される。豊栄市は、新潟平野の中央北寄りに位置し、阿賀野川右岸に展開している。市域は南北12.75㎞、東西10.20㎞、面積77.05㎢である。北は新潟市と北蒲原郡聖篭町、西は阿賀野川を挟んで新潟市と中蒲原郡横越町、南は北蒲原郡水原町と京ヶ瀬村・笹神村、東は、新発田市と北蒲原郡豊浦町に接している。東部に新潟県最大の潟湖「福島潟」があり、この潟から流れ出る新井郷川は、市の中央部を西流している。おおむね平坦な沖積面から成り立っている豊栄市も、地形分類上では３つに区分することが可能である。すなわち、①砂堆・砂丘帯とその間の砂丘間低地、②河川の流路変更による自然堤防とそれに伴う後背湿地帯、③潟湖を含む低地の３つである。①は市の北部、②は阿賀野川・新井郷川などの旧河道や駒林川流域、③は福島潟湖低地や、新井郷川自然堤防外側の豊栄湿性低地にあたる。正尺Ａ遺跡は、旧大口川左岸の自然堤防上に立地し、標高約２ｍ計る。



1. 正尺Ａ　2. 松影Ａ　3. 山三賀Ⅱ　4. 出山　5. 小丸山　6. 緒立　7. 六地山

第４図　新潟平野の地形
（[田中ほか1996]より転載・一部改変）

2　周辺の遺跡

砂丘上の遺跡

新潟古砂丘グループの区分（新潟古砂丘グループ1974）に基づき、砂丘上の遺跡を概観する。

第Ⅰ群砂丘は、縄文時代前期後半～晩期・弥生時代・古墳時代、奈良末～平安期と断続的に各時代の遺跡が複合している。最も内陸側に位置する上黒山～葛塚ラインの。Ⅰ群２列目は縄文時代と古墳時代古代の複合遺跡が多い。上黒山遺跡からは縄文時代前半後期・古墳前期の土器が出土している。また、葛塚遺跡では古墳時代前期の土器がまとまって出土しており、中でも線刻画をもつ赤彩土器が注目される。山三賀Ⅱ遺跡では、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代と、大きく３時期の遺物が確認されている。主体となる奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居約90棟、掘立柱建物27棟確認されている［坂井1989］。馬見坂遺跡は新発田市の西部、新砂丘Ⅰ―２の内陸側砂丘間低地に位置し、北東から南西へ緩やかに下る標高0.5～３ｍの斜面に営まれていた。標高１ｍより低い部分に湿地が形成され、その水際に遺構・遺物が多く分布していた。土器は縄文時代前期末葉・中期初頭・晩期がある［立木2000］。③松影～城山ラインの。Ⅰ群３列目は縄文後・晩期・弥生・古墳時代のほか、城山（甲山）遺跡では奈良末～平安初期と思われる土師器・須恵器が多量に出土している。松影遺跡は５地点確認されている。Ａ遺跡は新砂丘Ⅰ－３に立地する。Ｂ・Ｃ・Ｄ遺跡は砂丘の北側、Ｅ遺跡は南側に位置する。このうち発掘調査が行われたＡ遺跡では、洪水堆積層中にから縄文時代中期初頭～晩期、弥生時代中・後期、古墳時代、平安時代、中世の遺物が出土した。注目されるのは、縄文時代後期中葉の加曽利Ｂ式土器と弥生時代中期～後期の東北系弥生土器である。天王山系に属する東北系の弥生土器は、県内でも有数の出土量である［加藤2000］。④笠柳～鳥屋ラインのⅠ群４列目には縄文晩期後半～終末期の鳥屋遺跡が存在する。総数180基の土抗が検出された。［関1980］

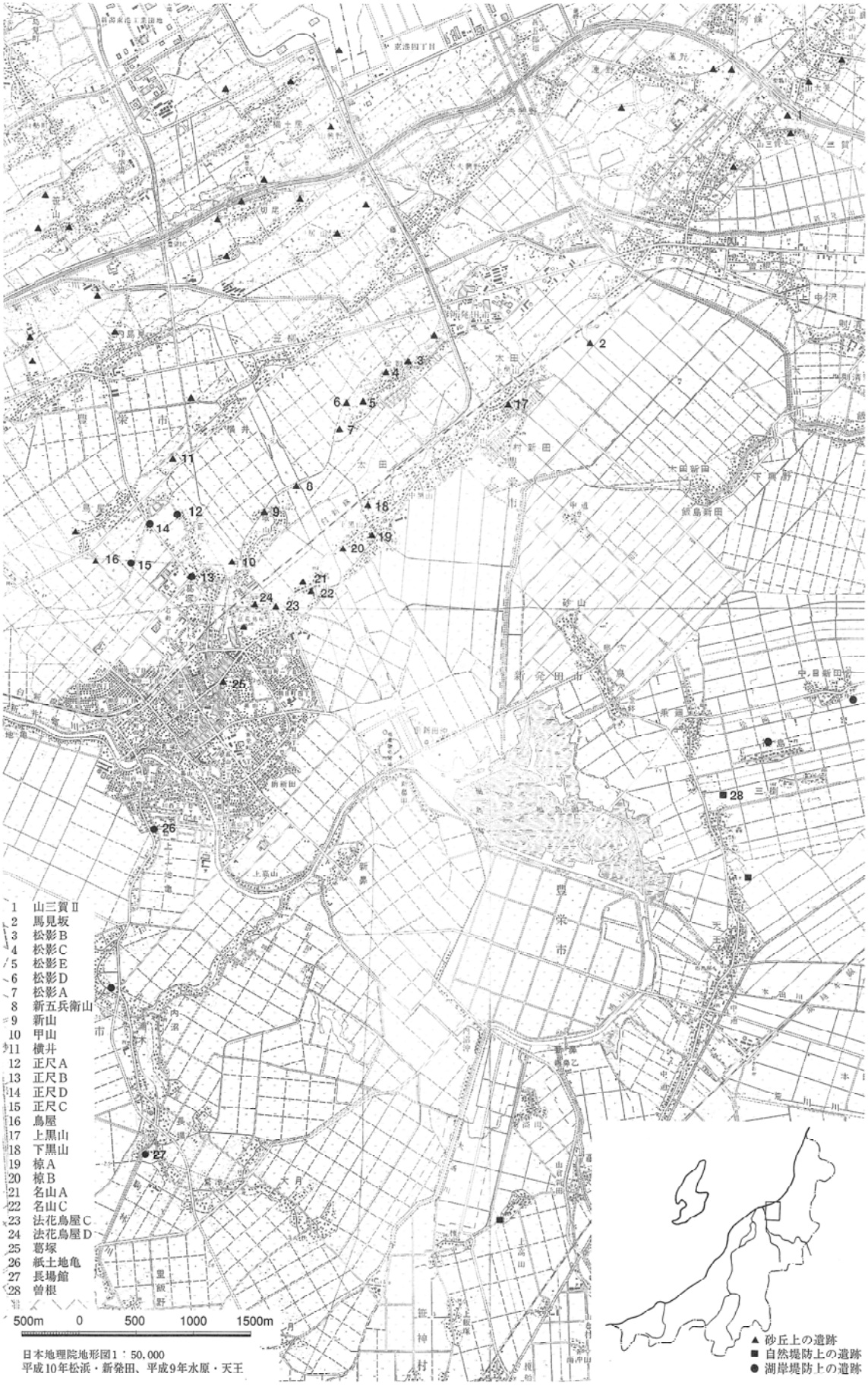
自然堤防上の遺跡

駒林川の自然堤防上と阿賀野川右岸に隣接する自然堤防等の微高地に立地する遺跡を概観する。遺物は、古墳時代前期、奈良末～平安期の土師器・須恵器を主体とする。

長場館は、長場集落の南500ｍの水田部にあり、昭和34年の開田工事で遺構の一部が確認された。水田部には内城・外城・城の腰・城ノ館・土居・下屋敷などの地名があり、中世城館跡の存在が推定できる。駒林川の屈曲部を利用したものと考えられる。

上土地亀遺跡は、旧駒林川右岸側の自然堤防上に位置し、水田部に標高1.5ｍ前後の微高地状を呈している。この自然堤防は開田・耕作整理で削平されたり、旧河道部は砂で埋め立て畑地としたため、複雑な形状をした部分もある。遺物は、９～10世紀頃を中心に、土師器（甕・坏・埦・高坏脚）・須恵器（甕・坏・蓋・壺）・土錘・鉄滓などがある［関1993］。

正尺遺跡は旧大口川左岸の自然堤防上に立地し、現況で標高１～２ｍを計る。現在までのところ、Ａ～Ｄの４遺跡が確認されている。いずれも古墳時代前期の遺物が見つかっており、当該期の遺跡密集地帯であるといえる。このうち、本報告の正尺Ａ遺跡（平成12年度）及びＣ遺跡（平成11・12年度）は、日沿道建設にともない調査が行われた。正尺Ｃ遺跡では多数の土器のほか、竪穴住居４軒、土抗53基、掘立柱建物10棟のほか、方形周溝墓１基が見つかっている。また、周溝・陸橋をもつ建物が１軒見つかっており、祭祀との関連で注目される［加藤2001］。


1　山三賀Ⅱ
2　馬見坂
3　松影B
4　松影C
5　松影E
6　松影D
7　松影A
8　新五兵衛山
9　新山
10　甲山
11　横井
12　正尺A
13　正尺B
14　正尺D
15　正尺C
16　鳥屋
17　上黒山
18　下黒山
19　椋A
20　椋B
21　名山A
22　名山C
23　法花鳥屋C
24　法花鳥屋D
25　葛塚
26　紙土地亀
27　長場館
28　曽根
500m　0　500　1000　1500m
日本地理院地形図1：50,000
平成10年松浜・新発田、平成9年水原・天王
▲ 砂丘上の遺跡
■ 自然堤防上の遺跡
● 湖岸堤防上の遺跡

第5図　周辺の遺跡分布

第Ⅲ章　遺跡の調査

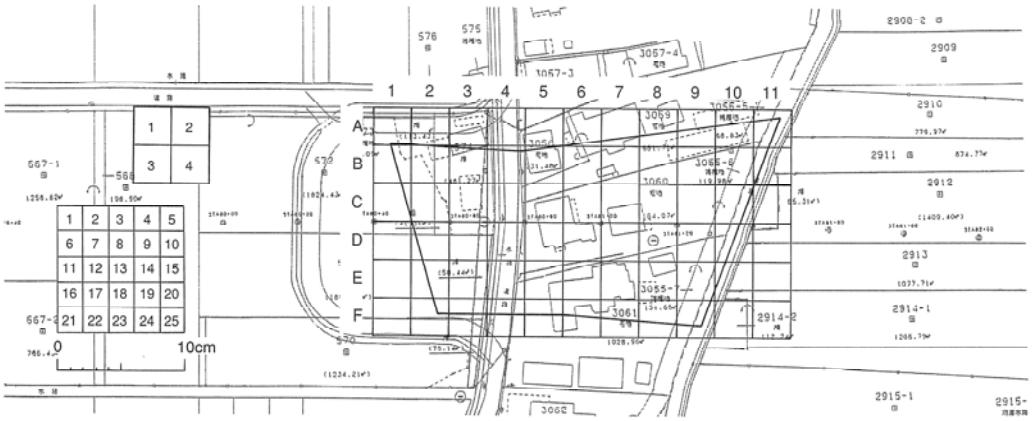
1　グリッドの設定

国家座標の軸に従いグリッドを設定した。グリッドは大・中・小の２種があり、大グリッドは10ｍ四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを２ｍ四方に25等分したもの小グリッドは中クリッドを１ｍ四方に４等分したものである。大グリッドの名称は北西隅の杭を基点として、東西方向では西から算用数字を付し、南北方向では南からアルファベットを付して「５Ｄ」のように組み合わせて表示した。中・小グリッドは南西隅の杭を基点に１～25の算用数字を用い、「５Ｆ－23－１」のように大グリッド表示のあとにつけて呼称した。５Ｄ杭の座標値は、Ｘ＝214168.591、Ｙ＝63241.116（ＳＴＡ.80＋80）である。

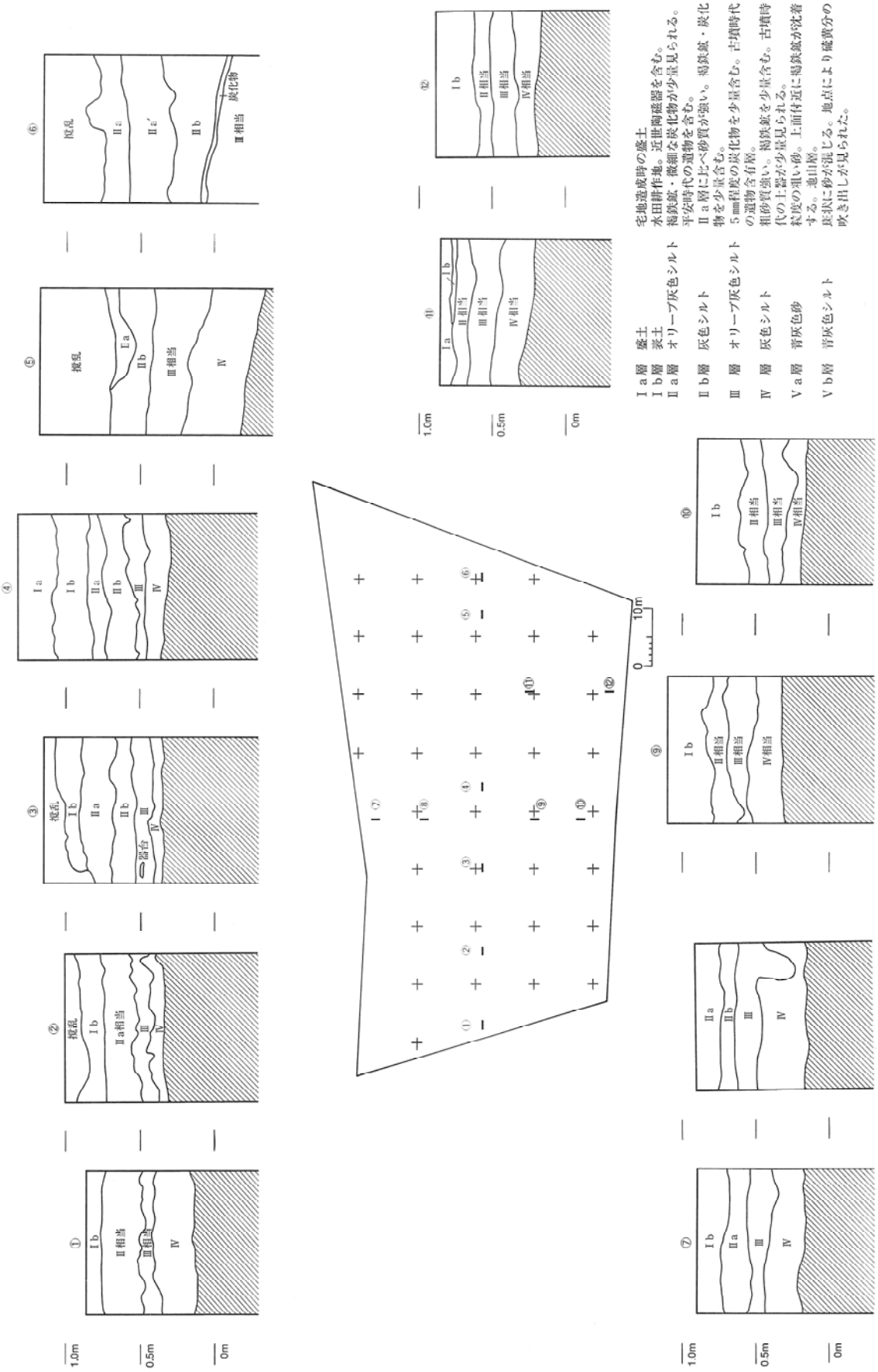
2　層　序

遺跡は旧大口川左岸の南北に走向する自然堤防上に立地する。東側に旧大口川流路跡、西側には湿地（旧島見前潟）が広がっていたと思われる。調査前の現況は宅地および荒蕪地で標高0.9～2.1ｍを測る。調査区東側８～10列で流路跡と思われる地山層の落ち込みを確認した。西側では湿地との境界が確認されておらず、調査区外まで自然堤防がのびると思われる。以下、各層の註記事項を記す。

Ⅰａ層	盛土	宅地造成時の盛土
Ⅰｂ層	表土	水田耕作土。近世陶磁器を含む。
Ⅱａ層	オリーブ灰色シルト	褐鉄鉱・微細な炭化物が少量見られる。平安時代の遺物を含む。
Ⅱｂ層	灰色シルト	Ⅱａ層に比べ砂質が強い。褐鉄鉱・炭化物を少量含む。
Ⅲ　層	オリーブ灰色シルト	５㎜程度の炭化物を少量含む。下部に火山灰を含む。古墳時代遺物包含層
Ⅳ　層	灰色シルト	粗砂質強い。褐鉄鉱を少量含む。古墳時代の土器が少量見られる。
Ⅴａ層	青灰色砂	粒度の粗い砂。上面付近に褐鉄鉱が沈着する。地山層。
Ⅴｂ層	青灰色シルト	斑状に砂が混じる。地点により硫黄分の吹き出しが見られた。



第６図　グリット配置図


Ⅰa層 盛土
Ⅰb層 表土
Ⅱa層 オリーブ灰色シルト
宅地造成時の盛土
水田耕作地。近世陶磁器を含む。
褐鉄鉱・微細な炭化物が少量見られる。
平安時代の遺物を含む。
Ⅱb層 灰色シルト
Ⅱa層に比べ砂質が強い。褐鉄鉱・炭化物を少量含む。
Ⅲ層 オリーブ灰色シルト
5mm程度の炭化物を少量含む。古墳時代の遺物含有層。
Ⅳ層 灰色シルト
粗砂質強い。褐鉄鉱を少量含む。古墳時代の土器が少量見られる。
Ⅴa層 青灰色砂
粒度の粗い砂。上面付近に褐鉄鉱が沈着する。地山層。
Ⅴb層 青灰色シルト
底状に砂が流じる。地点により鹿黄分の吹き出しが見られた。
1.0m
0.5m
0m
10m

第7図 基本層序

3　遺　構

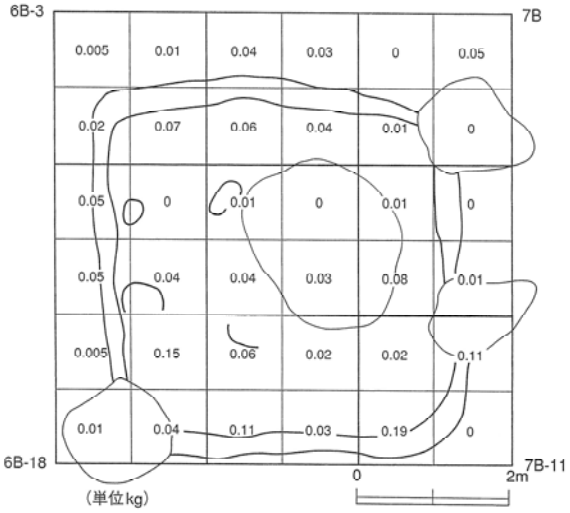
A　概　要

古墳時代の竪穴住居跡１軒と土坑１基、古代の土坑１基・ピット１基、近世の廃棄土坑が２基確認された。以下、時期ごとに詳述する。近世の遺構については次章の遺物の項で述べる。

B　各　説（図２～４）

ＳＩ１（図版３・17）

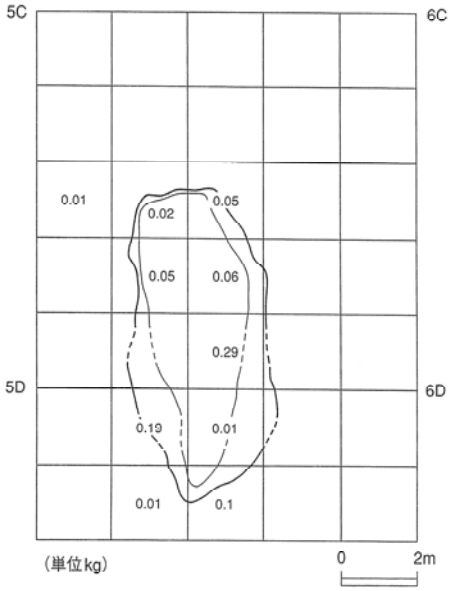
グリッド６Ｂに位置し、検出面は、Ⅳ層である。住居址プランの東壁中央、北東角、南西角および中央部は後世の攪乱を受けている。平面形は若干隅丸気味の方形で、壁ぎわに幅約0.3ｍの周溝をもつ。南北約5.0ｍ、東西約4.7ｍを測る。プラン内から４基のピット（Ｐ１～４）を確認した。Ｐ１は長軸0.3ｍ、短軸0.2ｍの楕円形で深さは約0.1ｍである。Ｐ２は長軸0.5ｍ、短軸0.4ｍの楕円形で深さは約0.1ｍである。ともにプラン西壁中央付近に位置し、周囲の床面の硬化が顕著であること、後述するＰ３・Ｐ４より小型で２基間の間隔が狭いことなどから、入口施設に関連すると考えられる。Ｐ３は長軸0.7ｍ、短軸0.3ｍの不整楕円形で深さは0.1ｍである。Ｐ４は長軸0.5ｍ、短軸0.4ｍの楕円形で深さは0.1ｍである。Ｐ３・Ｐ４はともにプラン中央で対角線上に位置していることから、主柱穴の可能性がある。対となる残りの２基は攪乱のため確認できなかった。炉跡・貯蔵穴は検出されていない。住居址内は基本的に２層の堆積である。上層（２層）は暗緑灰色シルトで少量の炭化物と火山灰を含み、硬化がみられることから床面と考えられる。下層（３層）は暗緑灰色粘性シルトで極少量の炭化物が混ざり、しまりは弱い。遺物包含層。古墳時代前期の土器が上層、下層、周溝およびプラン周辺から万遍なく出土した。本址に伴うと思われる遺物は、６Ｂ－13－２から鉢の底部が一括して出土した他は、細片である。遺物は、比較的プラン中央部に少なく、南側に集中して出土する傾向がみられた（第８図）。



第８図　ＳＩ１小グリット別遺物分布

ＳＫ２（図版４・17～18）

不整楕円形の土坑である。長さ約9.8ｍ、幅約3.8ｍ、深さ約0.5ｍを測る。検出面はⅣからⅤ層にまたがる。短辺の断面形が皿状を呈する。覆土は４層で、レンズ状堆積を



第９図　ＳＫ２中グリット別遺物分布

示す。地山層の段階で形成された自然の落ち込みと考えられ、窪地を利用して土器が廃棄された状況であると考えられる。下層部に炭化物・土器が集中して見られる。特に、遺構中央の最深部３・４層で土器が多数検出された（第９図参照）。遺構がほぼ埋没した段階で、Ⅲ層が被覆しており、Ⅲ層（包含層）より時期的に先行する。甕・高杯・器台・鉢形土器が出土している。

ＳＫ３（図版４・18）

円形の土坑である。直径　約45cm、深さ約20cmを測る。検出面はＶ層である。断面Ｕ字状を呈する。覆土は５層で、水平堆積を示す。４層は大きさ２～５mm程度の炭化物層である。４・５層から平安時代の土師器甕が出土した。

ｐｉｔ４（図版４・18）

７Ｃ－14グリッドに位置する円形のピットである。断面Ｕ字状を呈する。覆土は１層で炭化物をごく少量含む。底部の一部で直径約10cmのくぼみが見られる。遺物は出土していない。

4　遺　物

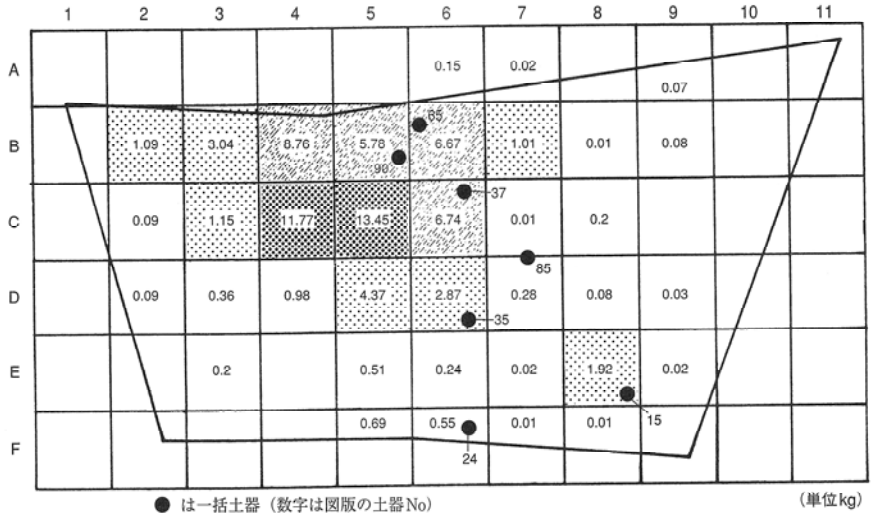
A．概　要

正尺Ａ遺跡の遺物は古墳時代の土器、古代・中世の土器、江戸時代の陶磁器・木製品など平箱で約45箱出土した。以下、時期ごとに記述する。

B．　古墳時代の遺物（図版５～10・19～23）

（１）分布状況

土器群は、土坑２出土資料と包含層出土資料とに２大別される。第10図に大グリッドごとの重量分布を示した。そのうち包含層出土土器の分布状況は、竪穴住居跡・土坑を含む４～６Ｂ・Ｃグリッド周辺では遺物の集中度が高いのに対し、それ以外の場所においては、東・西・南端に向かうほど遺物分布が散漫となる。遺跡は北側にのびていると考えられ、調査区はその南端にあたると考えられる。６Ｅ・８Ｅ等で比較的数値が高いのは、甕が一括出土しているためである。



第10図　大グリッド別重量分布

（2）土器胎土

各器種に共通して2～5㎜程度の長石の混入が特徴的である。その他、チャート・白色粒子・微細な雲母も見られる。近隣の砂・砂礫の混入は高杯・器台・小型の壺などでは少なく、甕類では多く見られる。近隣の葛塚遺跡［関1999］では胎土中に海綿骨針の混入が認められるが、本遺跡ではほとんど確認できなかった。なお、観察表では砂・礫を砂・砂礫・礫に区分し記述した。調整技法については以下の区分に基づき観察を行った。

ハ　ケ　櫛歯状に刻目の入った板状の工具で器面をナデつけるもの。

ナ　デ　指等によるナデと板状の工具によるナデの2種類がある。器面の平滑化を目的とする。

ミガキ　ヘラ状もしくは棒状の工具で擦り、光沢を持たせる。

ケズリ　成形後ある程度の乾燥を経て行われ、ヘラ状もしくは板状の工具で粘土を削りとる。

（3）土坑出土土器

土坑からは、計約8.7kgの遺物が出土した。小破片が大半を占めるが、それらに混じり、完形に近い土器が数点出土している。ここでは、図化できる11点を掲載した。

甕（1～3）

「く」の字状口縁のもののみ確認した。調整は内外面ハケである。口縁端部の形状は1は面をもち、2・3では丸い。3は口縁部が直線的に立ちあがり、途中屈曲外反する。頸部に横方向のハケメが見られる。

高杯（4・5）

4は杯部が外反し、脚部は内彎気味に広がり裾部で開くものである。脚部中半に透孔をもつ。5は杯部に稜があり、内彎気味に開く。脚部は直線的に開く。

器台（6～9）

6・7は受部が直線的に開く。受部の端部を上方につまみ上げている。7では、脚部中半に透孔を持つ。8は受部が内彎するものである。9は脚部のみで、裾部が大きく開く。脚部上半に透孔をもつ。高杯の脚部の可能性もある。

鉢（10・11）

10は円錐状を呈し、底部に孔をもつ。口縁端部に内傾する面をもつ。器面が被熱により赤化している。甑として大別できる。11は口縁部に段をもち、体部は偏球形を呈する。口縁端部の断面形が尖り気味になる。

（4）包含層出土土器

包含層中からは、総計約65kgの土器を検出した。ここでは図化できる90点を掲載した。以下、大別器種に分類し、器種ごとに記述する。

甕形土器

12～15は　、口径20㎝以上の大型の甕である。口縁部が「くの字」状に外反する。口縁端部はいずれも丸い形状を呈する。12～14は、口縁部内外面にハケが残る。15は胴部中半に最大径があり、球胴状を呈する。

16・17は、口縁部に段をもつ。擬凹線文を持たず、横ナデ調整のみである。口縁部の下端に粘土を貼り付け、肥厚させて段を作り出している。口縁端部の断面形が尖り気味になる。いずれも肩の張りは弱い。

18～38は、口縁が「くの字」状に外反するもの。口縁端部の形状で分類すると、つまみ上げるもの（18～20）、面取りするもの（21～24）、丸くおさめるもの（25～30）が見られる。20は口縁端部を上下方向へつまみあげる。肩の張りが比較的弱い。21は口縁端部を面取りし、端部下方を若干つまみあげる。23は口縁端部が尖り、かつ面を持つ。器厚は薄く、胎土も小円礫が多く含まれる。24は偏球形の胴部をもつ。被熱による器面の剥落が著しい。25は口縁部が短く外反する。胴29は、口縁端部内面に巻き上げ痕が残り、帯状に盛りあがる。内外面ともに炭化物の付着が見られる。30は口縁部にヘラナデがあり、口縁端部に指の圧痕が残る。器面の調整は外面ハケ調整で、内面はヘラナデ調整が主である。

31～37は直線的にのびる口縁部が、上部で屈曲外反するものである。31～33は口縁の外反部分に粘土を貼り付けて肥厚させ、頸部に横ナデを施して屈曲を強調している。34・35は口縁部が水平方向に外反し、端部に面取りが見られる。体部上半に最大径をもつ。いずれも目の粗い原体でハケを施している。36は37は胴部中半に最大径をもつ。

底部資料（38～44）

底部は上げ底のもの（38・39・42）、平底のものが見られる。底面はヘラナデを行っている。底径約3.5cm前後のもの（38～4）、5cmを越えるもの（42～44）がある。

壺形土器

45～48はいわゆる細頸長頸壺である。45は口縁部が外傾し、頸部に沈線状のミガキを持つ。46は口縁部が上方に直線的にのびる。47は胴部上半である。48は胴部上半が球形、下半が直線的に伸びる「そろばん玉」状を呈する49・50は球形の胴部に内彎気味に広がる短い口縁つくもの。頸部の径が45～48に比べ大きい。頸部に横方向のナデを施し、屈曲部を作り出している。

51～54は単純口縁の壺である。口径が外反気味にのびるもの（51）、「くの字」状に外反するもの（52・53）、直線的にのびる口縁が上部で屈曲外反するもの（54）が見られる。

55は東海地方に系譜を求められる口縁に粘土を張り付けて段状するもの。段下部に装飾を意識したと思われる横方向のハケメが見られる。

56～59、63・64は、いわゆる畿内系二重口縁壺である。56・57は内外面ともに二重口縁の接合部の段が明瞭である。56は口縁部が深く、頸部が筒状を呈する。頸部には縦方向のハケメが見られる。59・63は内面の段が明瞭でなく、外面への粘土の肥厚により段を強調するものである。59は口径が28.2cmと大きく、肩が張る形状を呈する。63は胴部が球状に大きく張る。内外面ともにハケを施す。

60・64は頸部が筒状にならず、「くの字」に屈曲する二重口縁である。65・66はいわゆる無頸壺である。65は器壁が薄手で内外面にミガキが見られる。66は小型品で外面はハケ調整が見られる。

鉢形土器・蓋形土器

67は、内彎しながら立ちあがる半球形の体部をもつ。口縁部は短く外反し端部が尖り気味に作り出されている。68は内彎しながら緩やかに立ちあがる。高杯の杯部の可能性がある。69は浅身で、長く外反する口縁をもつ。内外面ヘラナデ調整が見られ、体部は扁平な球形を呈する。

70～72は、口縁に段をもつものである。いずれも頸部外面に横方向のナデを行い、段を作り出している。70は、口縁部外面に擬凹線を模したと思われる横方向のハケメが見られる。71は口縁部がやや内彎し、頸部外面内面に稜が見られる。口縁端部内面のナデにより口唇部が尖り気味にのびる。72は大きく外反する口縁をもつ。73・74は、内彎気味に立ちあがる口縁をもつ。色調が灰白色に近く胎土も精良である。調整は内外面ともにヘラナデの残るミガキが見られる。74では底部を指ナデにより上げ底状に作り出している。

75・76底部有孔の鉢。甑の可能性もある。75・76ともに底部のみであるが、緩やかな鉢状に開く形態を呈している。77は、口径31.2㎝の大型の片口鉢である。頚部の横ナデにより口縁部が段状を呈する。色調は灰白色に近く、内外面ともにミガキを行っている。78～80は蓋形土器で、つまみを有し内彎気味に開くもの。かえりをもたない。口縁端部の処理に若干差異が見られる。78・79では端部を丸く収めているが、80では面取りが見られる。

高杯形土器

81～84は、杯底部の外面に稜をもち、杯部が内彎気味に立ちあがり、「八」の字状に開く脚部をもつ。82・83は赤彩されている。杯部は東海系の影響を看取できるが、脚部は在地系の「八」の字状に開くものが占める。84は杯部の成形時に粘土紐に刻み目を入れ、接着度を増している。85は在地系高杯の杯部で、広く平坦な杯底部に外傾する口縁がつく。杯底部と口縁部との屈曲部は不明瞭である。脚部との接合部分が突起状に残る。

器台形土器

86～91は、いわゆる装飾器台と呼ばれるもの。86は、装飾器台の受部で、内彎気味に開く受部に87は外反ぎみの受部をもつ。内面の端部を上方につまみ上げている。受部上半に透孔をもつ。88・89は受部に段をもつ。受部下半に透孔をもつ。深身の受部をもち、透孔を有するものもある。92は、受部が内彎するもの。脚部が外反する。93は、受部が直線的にのび、端部を面取りする。脚部は口径と底径がほぼ同一である。直径約２㎝の貫通孔を持つ。

脚部資料（94～101）

高杯・器台の脚部を一括した。貫通孔の有無により94～98を高杯、99～101を器台とした。

Ｃ．近世の遺物

（１）概　要

近世の遺物は包含層から陶磁器・土製品・木製品・金属製品などが大量に出土した。陶磁器は18世紀中頃以降の製品がまとまってみられ、18世紀後半以降になると数が増加する。

近世に属する遺構は、土坑が２基確認された。ＳＫ５はグリッド10Ａに位置し、南北約５ｍ、東西約２ｍを測る溝状土坑。北端は調査区外に伸びる。出土遺物は18世紀代の製品が大半である。大橋・期に含まれる筒型碗、広東碗や瀬戸美濃産磁器が出土していないことから、18世紀末頃に廃棄されたと考えられる。ＳＫ６はグリッド８Ｃに位置し、南北約４ｍ、東西約５ｍを測る楕円形の大型土坑。覆土は堆積状況から大きく上・下層に分けられ、上層はレンズ状に黒色・黄色・褐色有機土が互層に堆積し、遺物が多く出土した。下層は地山である粘質土に黒色粘土がマーブル状に混じり、遺物の出土量は極めて少ない。底に近い位置で平安時代の土錘が出土した。土坑の底は地山粘土がその下位の層（砂層）に変わる直後で止まっていることから、粘土採掘坑と考えられる。すなわち、壁土などの粘土を採るために掘られ、採掘後、不要な土を坑に戻した（下層の形成）。その後の窪地をゴミ坑として使用した（上層の形成）と考えられる。したがって、下層はⅢ層及びⅣ層が混入している可能性がある。同様な「粘土採掘坑」の報告例に金沢市安江町遺跡［増山1997］、金沢市本町一丁目遺跡［増山1995］がある。本土坑は瀬戸美濃系染付端反碗、瀬戸美濃系蛇ノ目凹型高台陶胎染付皿が出土し、明治期の資料を含まないことから19世紀前半に廃棄されたと考えられる[1)]。

（2）陶磁器

ＳＫ５（図版11・24）

磁器（102～108）

染付　総て肥前系である。102は半球型小碗。外面に雪持竹文をもつ。器壁が比較的薄く、呉須の発色も良好。103は波佐見の碗。外面に二重網目文、内面に一重網目文をもち、見込み中央に菊花文を配する。同タイプの碗が他に１点共伴しており、組物としての利用も考えられる。104は小丸碗。外面に草花文をもつ。102と同様、器壁が比較的薄く、呉須の発色も良好。105は水滴。上面の菊花文は型押しで陽刻される。右方側面は無釉。底部には布目が顕著にみられる。上面中央と左下隅に孔が表面から内部に向かって穿たれている。穿孔後の内面は無調整。内部、及び無釉部には墨が残る。上面の施文部には陽刻後呉須が塗られているが、発色が不良で黒緑色を呈す。106は小瓶。呉須で「御神前」と書かれる。銘が入る器面は傾斜がなだらかである。おそらく、銘を描く際に描きやすくするためか、あるいは、消費者が読みやすくするための工夫であろう。口縁部欠損。鶴首あるいはラッキョウ型になると思われる。107と108は波佐見の皿。ともに、内面を蛇ノ目状に釉剥ぎし、二重斜格子文をもつ。法量がほぼ同じで、規格性がある。図示していないが、この他に同規格の皿が４個体出土しており、組物としての利用が想定できる。内面に二重斜格子文をもつタイプは1690年代から1770年代まで焼成されるが、文様の崩れ具合から1750年代から1770年代のものと思われる。107は口縁端部を打ち欠いた後、割れ口に漆を塗布している。一部を欠損後、意図的に打ち欠き、高さを揃えて再利用したものと考えられる[2)]。

小片のため図示しなかったが、その他に瓶２点（同一個体）、碗15点（外面二重網目文９点、梅樹文１点、底部２点、タイプ不明３点）、皿11点（二重斜格子文４点、蛇ノ目釉剥ぎ底部２点、タイプ不明５点）、器種不明10点が出土した。

青磁（109）

本遺構では１点のみの出土である。

109は波佐見の仏花瓶。肩部に鳳凰を対に配する。このタイプは18世紀後半以降、波佐見諸窯で生産される。完形。

陶器（110～118）

110は京・信楽の灰釉半球碗。残存部は無文。111は京・信楽の色絵の半球碗。灰釉の上から赤と緑で松を連続して絵付ける。112は越中瀬戸の短頸広口壺。内外面に錆釉。底部回転糸切り。内面にススが付着している。113は越中瀬戸の茶入れ。内外面に鉄釉を薄く掛け、光沢のある淡茶褐色を呈す。114は会津本郷系の片口。内面及び外面上半にやや紫味を帯びた黒色の鉄釉がかかる。外面胴部下半の露胎部は淡橙色に発色する。轆轤成形で、ケズリの痕跡が明瞭である。口縁上端面は拭き取られ、無釉である。見込みに４つのトチンの目跡があり、外面胴部中位に環状に重ね焼の痕跡がみられる。削り出し高台。福島県三春城跡で類品の出土例［平田1995，2000］がある。115は肥前系の半磁胎香炉、もしくは火入。内面、及び外面胴部下半無釉。釉は青味を帯びた透明釉で、ガラス質化し、淡緑色を呈す。釉際に釉だれがみられる。口縁部付近には細かい貫入が多数みられる。外面は呉須による施文。発色は不良で深緑色を呈す。口縁付近に圏線が２条、胴部下半に１条巡り、胴部中央に山水文を描く。削り出し高台。116は肥前系の瓶。口縁から頸部上半と頸部下半部から底部の２片から復元した。外面にオリーブ色を呈する灰釉を施した後、白化粧土を刷毛塗りする。底部は刳り底風の削り出し高台。117は肥前系の擂鉢。内外面鉄釉。畳付及び高台内に砂が付着する。櫛目は21条１単位で上端部はナデ揃える。胴部中ほどに１単位のみ横方向に、縦

方向のうえから重ねている。内面見込みに重ね焼の痕跡が輪状にみられる。全体として非常によく焼締まり、焼成良好。118は在地の灯明受皿。灯明皿をその上に乗せ、垂れた油を受ける皿。油皿ともいう。環状の仕切の一部に細い開油溝を設ける。その周囲は開油溝に向かって傾斜する。内面と外面開油溝を中心にススが付着する。口縁端部は意図的に打ち欠いてあり、一部破損後、高さを揃え、灯明皿として再利用された可能性がある。胴部外面はナデ調整。底部は糸切り。

その他に、図示していないが、会津本郷系鉢類底部１点、肥前系瓶２点（同一個体）、産地不明の器種不明製品（内外面鉄釉）１点、肥前系擂鉢23点（４個体以上）が出土した。

土器（119）１点のみ出土。

119は焙烙。胴部中位に直径1.2㎝を測る、吊すための穴が開いている。その他、用途不明の貫通していない穴が内面口縁近くから外面胴部境に向かって穿たれている。外面はススの付着が顕著であり、底部は二次焼成が著しい。轆轤成形で、内外面はナデ調整、底部は不明。底部境の指頭押圧痕はみられない。

ＳＫ６（図版12・24）

磁器（120・121）

120は肥前系の白磁紅皿。型押し成形。法量から、ミニチュアである可能性もある。121は肥前系の染付小皿。内面に松を描く。

その他に、図示していないが、肥前系染付碗３点、波佐見梅樹文碗１点、波佐見外面二重網目文碗（内面無文）１点が出土した。

陶器（122～125）

122は瀬戸美濃の陶胎染付皿。黄白色の粗い胎土に白色化粧土を塗り、呉須で草花文を描く。底部は高台内に段を持つ蛇ノ目凹型高台。123は産地不明の碗。内・外面に黄緑色気味の白釉を厚く掛け、その上から青釉の流し掛けを施すタイプ。全面に貫入が多くみられる。同様の手法による製品は、相馬、会津本郷などの東北諸窯や笠間、松代、信楽などで多くみられ、産地は特定しがたい。幕末頃の所産であろう。124は肥前系の鉢。残存部は内面全面に鉄釉後蛇ノ目状に白化粧土を刷毛塗り。外面は残存部まで無釉。外面胴部下半は回転ケズリ調整を施し、ケズリ痕が明瞭である。高台は削り出し。高台端部は意図的に打ち欠いている。高さを調整したのであろうか。125は肥前系の擂鉢。内外面に鉄釉（鉄泥）を施すが、焼きが甘く、光沢の無い暗赤褐色を呈す。畳付けは釉剥ぎしない。胴部下半は回転ヘラケズリ調整を施し、ケズリ痕が明瞭である。高台は底部をヘラケズリで成形後、貼り付ける。見込みに重ね焼の輪状痕。櫛目は13条１単位。胎土に礫を含み、全体に粗雑なつくり。その他に、図示していないが、肥前系擂鉢１点、産地不明鉢２点、産地不明碗１点が出土した。

土器（126）

126は焜炉。内面上半にススの付着がみられる。残存していないが、三足になるものとおもわれる。内面はナデ調整。外面に化粧土を施す。口縁端部には敲打痕がみられる。キセルによるものか。江戸遺跡周辺では、敲打痕は江戸時代後期の火鉢にみられ、焜炉には認められないという（小林　1991）。火鉢として利用されたものと考えられる。

包含層（図版12・24）

127は陶器の蔵骨器[3]。６Ｂ10-４出土。素焼き。「日□」と墨書。燕市焼屋敷遺跡近世墳墓の出土品に類例をみることができる。

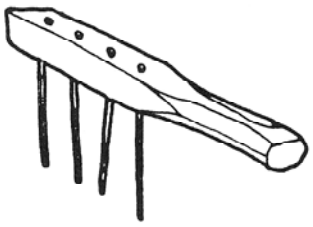
（2）木製品

ＳＫ５（図版13・25）

140は、鋤。柄の根本は折損。端部が丸みを帯びて摩耗していることから、再利用したものと思われる。141は椀。内面に赤漆、外面に黒漆を塗布する。外面胴部には「丸に蔦」紋が三箇所に施される。142は棒状木製品。両端欠損。鍬の柄であろうか。枝打ち、および削りによる器面の調整を行う。143は箸。断面六角形に面取りする。144は簪。断面六角形に面取りし、一端がカーブする。全面に黒漆を塗布する。145は柄杓。柄杓の身部。丸太状の材木から中を刳り抜いて製作されたものと思われる。146と147は鍬。風呂鍬刃床部。中央には長方形の柄入れが開けられることから、柄を楔で取り付けるタイプである。柄の取り付け角度は146が73°、147が68°[4]。148は下駄。一材から刳り出して製作し、両歯を有する、いわゆる「蓮歯下駄」である。上面形が曲線的で、横緒穴は後歯の前方に位置する。部分的に黒漆が遺存しており、全面あるいは歯の接地面を除いて塗布されたものと思われる。

ＳＫ６（図版14）

150～152は椀。150は高台の高い椀。内外面に赤漆を塗布。無文。151は薄手で、高台から大きく外に開くタイプ。高台部欠損。見込み中央に直径1.0cm程の円形の孔が穿たれる。内外面に黒漆を塗布。外面には赤漆で「丸に細九枚笹」紋が三箇所に施される。152は内面全体に赤漆を塗布。外面は全面に黒漆を塗布後、草花文を施す。153は蓋。食篭の蓋か。内外面に同心円状の沈線がみられる。装飾的なものであろうか。内外面には部分的に黒漆および赤漆が遺存する。154は有孔円板状木製品。裏面全体に黒漆を塗布する。表面は全体に黒漆を塗布後、更に赤漆を重ねて塗布する。中央部には直径約1.5cm程度の円形孔が穿たれる。蓋か。155は桶・樽底板。半円形に折損する。表面円周に若干の面取りを行う。156は印篭。携帯用蓋物の蓋で煙草入れか。上面形は楕円形。左右の穴に紐状のものを通し、緒締めで絞り止める。二つ重・三つ重など数段をもつもので、本製品は最上部である。157は箸。断面六角形に面取り。全面に黒漆を塗布する。158はワラスグリ。藁を細工する前に根本に付いているハカマを取り除く道具。手に持ってすくタイプ。ワラスグリを右手に持ち、左手に藁の穂先を持って、根本をワラスグリの歯ですくとハカマをとることが出来る（神奈川大学　1988）。本製品は両端が欠損し、全容は不明である。歯を取り付ける孔は貫通せず、歯はすべて欠落している。159～161は下駄。159、161は差歯下駄（構造下駄）に属するタイプで、ホゾに嵌め込まれた歯が台部を貫通しない、いわゆる「陰卯下駄」である。ともに歯は欠落している。上面形は159が長方形、161が楕円形を呈す。ともに、台裏の中央最厚部から四辺に向かって斜めに削り落とされ、横緒穴は後歯の後方に位置する。台裏には鼻緒の結び目を保護するために刳り出された四角形の穴が、159には前緒穴周辺に、161には横緒穴周辺にみられる。161は小型であることから、小児用か。160は、一木から刳り出され、両歯が独立していない、いわゆる「刳り下駄」である。上面形は楕円形を呈す。後歯は擦り減り、後ろ下がりに傾斜する。前緒孔周辺には鼻緒の結び目を保護するために刳り出された円形の穴がみられる。



第11図　ワラスグリ模式図

（3）石製品

ＳＫ５（図版13・25）

149は砥石。台形断面を呈し、四面ともに擦痕がみられる。

D．古代・中世の遺物（図版12・23）

古代・中世の遺物は少なく、散発的に見られるのみである。調査区内に該期の遺跡本体があったとは考えにくい。14点を図化・報告する。古代（平安時代）の遺物は、土師器　甕２点・鍋１点・椀１点、須恵器　甕２点・横瓶１点・杯３点、土錘１点がある。中世の遺物は珠洲焼　甕（壺）１点・片口鉢１点がある。

須恵器

130～132は無台杯で、底部外面は回転ヘラ切りの後ナデ調整が行われている。134は横瓶である。閉塞円板の痕跡が見られる。外面はタタキおよびカキメ調整である内面はナデ調整が見られる。

土師器

135は椀で、表面の摩滅が著しく、ロクロの単位は不明である。不明瞭であるが底部は回転糸切り痕が見られる。128・136は甕である。136ではロクロナデのあと横方向のカキメを施している。137は鍋で口縁部径34.6cmを測る。

土錘（129）

ＳＫ６で出土した。近世陶磁器類と共伴しているが、形状等から古代の混入と考えた。太型で、両端がすぼまる管状を呈する。棒状の工具を芯として粘土を巻き付けて製作されたものであると思われる。摩滅のため調整等は不明である。

珠洲焼（138・139）

138は胴部片で甕か壺かは不明。外面には細い平行打圧痕、内面は円形無文の押圧痕をもつ。色調は灰色で焼き上がりは硬質。139は片口鉢で、卸目が３条見られるが、単位は不明。色調は灰色で焼き上がりは硬質である。

第Ⅳ章　自然科学分析

1　花粉分析及びプラントオパール分析

株式会社　古環境研究所

A　はじめに

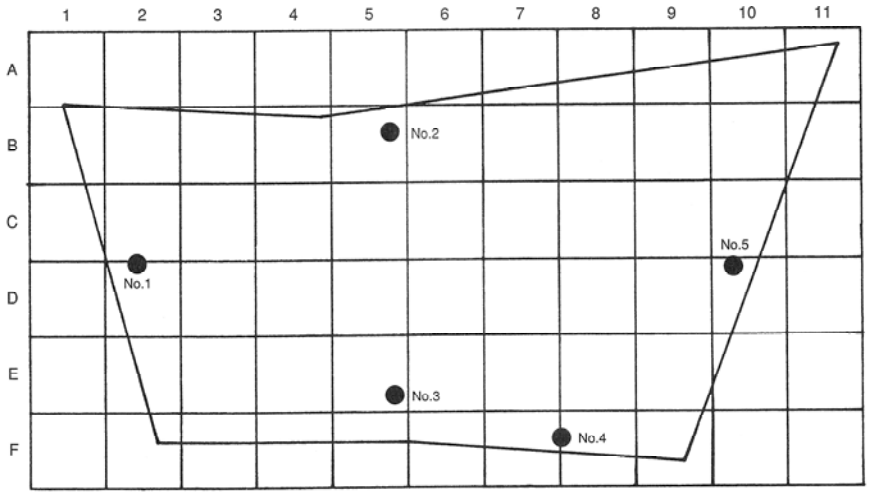
花粉分析は、一般に低湿地堆積物を対象として比較的広域な地域の植生や古環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解されて残存しないこともある。一方、植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸（ＳｉＯ２）が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出し、その組成や量を明らかにする方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

ここでは、花粉分析とプラント・オパール分析から、正尺Ａ遺跡における稲作跡の可能性と植生および堆積環境について検討した。

B　試　料

調査地点は、２Ｄグリッド東西ベルト北壁面（№.１地点）、５Ｂグリッド南北ベルト東壁面（№.２地点）、５Ｅグリッド南北ベルト東壁面（№.３地点）、７Ｆグリッド南北ベルト東壁面（№.４地点）、10Ｃグリッド東西ベルト北壁面（№.５地点）の５地点である。

分析試料は、№.１地点では上位より。Ⅰａ層（試料30）、Ⅱ層相当層（試料31、32）、Ⅲ層相当層（試料33）、Ⅳ層（試料34）、Ⅴ層（試料35）の６点、№.２地点では上位より、Ⅰｂ層（試料36）、Ⅱａ層（試料37）、Ⅲ層（試料38）、Ⅳ層（試料39）、Ⅴ層（試料40）の５点№.３地点では上位より、Ⅰｂ層（試料41）、Ⅱ層相当層（試



第12図　サンプリング位置

料42)、Ⅲ層相当層（試料43)、Ⅳ層相当層（試料44)、Ⅴａ層（試料45）の５点、№.４地点では上位よりⅡ層相当層（試料46)、Ⅲ層（試料47)、Ⅳ層（試料48)、Ⅴ層（試料49）の４点、№.５地点では上位より旧耕土（試料50)、Ⅱａ層（試料51、52)、Ⅱａ'層（試料53)、Ⅱｂ層（試料54)、Ⅲ層（試料55)、Ⅳ層（試料56）の６点である。なお、花粉分析は№.２地点と№.３地点について、プラント・オパール分析はすべての地点について分析を行った。

C　分析法

（１）花粉分析

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

１）５％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

２）水洗した後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

３）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

４）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。

５）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500ｒｐｍ、２分間）の後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とする。

（２）プラント・オパール分析

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976)」をもとに、次の手順で行った。

１）試料土の絶乾（105℃・24時間）

２）試料土約１ｇを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μｍ、約0.02g）

※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量

３）電気炉灰化法による脱有機物処理

４）超音波による分散（300W・42ＫＨｚ・10分間）

５）沈底法による微粒子（20μｍ以下）除去、乾燥

６）封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成

７）検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）

を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10－5g）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキ、タケ亜科については数種の平均値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03）、8.40、6.31、1.24、0.48である（杉山・藤原、1987）。

D　分析結果

（1）花粉分析

1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉5、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉4、シダ植物胞子2形態の計12である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、サワグルミ、ハンノキ属、クリ、エノキ属－ムクノキ

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、アブラナ科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

2）花粉群集の特徴

・No.2地点

試料37、39では花粉が検出されなかった。試料36では、ハンノキ属、サワグルミ、試料38では、イネ科、アブラナ科、試料40では、ハンノキ属、クワ科－イラクサ科が極めて少量検出される。

・No.3地点

試料41では、ハンノキ属、イネ科、カヤツリグサ科、試料42では、マツ属複維管束亜属、ハンノキ属、エノキ属－ムクノキ、カヤツリグサ科、ヨモギ属、試料43ではハンノキ属、イネ科、試料44ではクリ、試料45ではハンノキ属が少量検出される。

（2）プラント・オパール分析

検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属型）、タケ亜科（ネザサ節型、クマザサ属型、その他）および未分類である。また、海綿骨針もいくつかの試料でみられた。これらの分類群について定量を行い、その結果を表2、3、図1～5に示した。おもな分類群については顕微鏡写真を示した。

E　考　察

イネのプラント・オパールが検出されたのは、№1地点のⅠa層と№5地点の旧耕土の2試料のみである。こうしたことから、本調査区において稲作が開始されたのは比較的新しい時代になってからと考えられる。イネ以外の分類群では、各層ともクマザサ属型が優勢である。クマザサ属は乾いた環境に生育する植物である。なお、湿地的環境に生育するヨシ属の出現量は低いことから、各層とも調査区付近は比較的乾いた堆積環境であり、調査地点あるいは近傍にはクマザサ属等が生育していたと推定される。Ⅴ層、Ⅳ層、Ⅲ層、Ⅰb層およびⅠa層からは少量であるがヨシ属が検出されていることから、周辺に湿地的なところもみられたようである。また、各試料から海綿骨針が検出されることから、海岸線が近かったことが推察される。なお、№2地点と3地点で花粉分析を行ったが、いずれの試料も花粉密度が非常に低く、花粉が少量検出されるかもしくは検出されなかった。こうしたことから、花粉などの有機質体が分解される乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境であったと推定される。

F　まとめ

正尺A遺跡において花粉分析とプラント・オパール分析を行い、稲作跡の可能性および植生・堆積環境について検討した。その結果、本調査区では比較的最近になって稲作が開始されたと判断され、それ以前はおおむね乾いた環境か乾湿を繰り返す環境であり、近傍にはクマザサ属が生育していたと推定された。また、海岸線に近かったことが推察された。

引用文献

中村　純　1973　『花粉分析』古今書院

金原正明　1993　「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法』角川書店

島倉巳三郎　1973　「日本植物の花粉形態。『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集、60p.

中村　純　1980　「日本産花粉の標」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集、91p.

中村　純　1974　「イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として」『第四紀研究、』13

中村　純　1977　「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号、p。21－30。

杉山真二・藤原宏志　1987　「川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析」『赤山－古環境編－』　川口市遺跡調査会報告、10、281－298

藤原宏志　1976　「プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』9：15－29。

藤原宏志・杉山真二　1984　「プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－」『考古学と自然科学』17：73－85。

表１　正尺Ａ遺跡における花粉分析結果

分類群		No.2					No.3				
学名	和名	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45
Arboreal pollen	樹木花粉										
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属							2			
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ	1									
Alnus	ハンノキ属	3				1	1	2	1		1
Castanea crenata	クリ									1	
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ							1			
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉										
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科					1					
Nonarboreal pollen	草本花粉										
Gramineae	イネ科			1			1		1		
Cyperaceae	カヤツリグサ科						1	3			
Cruciferae	アブラナ科			1							
Artemisia	ヨモギ属							2			
Fern spore	シダ植物胞子										
Monolate type spore	単条溝胞子	9				1	1	12	3	4	
Trilate type spore	三条溝胞子						1			1	
Arboreal pollen	樹木花粉	4	0	0	0	1	1	4	1	1	1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	0	2	0	0	2	5	1	0	0
Total pollen	花粉総数	4	0	2	0	2	3	9	2	1	1
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	9	0	0	0	1	2	12	3	5	0
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

表２　新潟県、正尺Ａ遺跡のプラント・オパール分析結果（その１）

検出密度（単位：×100個/g）

分類群（和名・学名）	土層	No.1北壁 Ia	II-1	II-2	III	IV	V	No.2北壁 Ib	IIa	III	IV	V	No.3東壁 Ib	II	III	IV	Va
イネ科	Gramineae (Grasses)																
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	80															
ヨシ属	*Phragmites*	7					17	14		15							6
ススキ属型	*Miscanthus* type	7				7		7					7				
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)																
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa* type	44	13	7		7	8	7			7		14	14	7		
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*) type	51	262	176	297	141	102	119	149	94	40	12	81	120	98	112	50
その他	Others	15	54	29	15	7	8	21	30	7	7		27	14	7	13	
海綿骨針	Sponge		7	7	15			28	7	15			34	7			
未分類等	Unknown	197	196	183	156	149	161	211	141	145	67	42	177	184	63	159	62
プラント・オパール総数		402	530	403	483	312	297	408	327	276	121	53	339	340	175	284	118

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	2.36															
ヨシ属	*Phragmites*	0.46					1.07	0.89		0.92							0.39
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.09				0.09		0.09					0.08				
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa* type	0.21	0.06	0.04		0.04	0.04	0.03			0.03		0.07	0.07	0.03		
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*) type	0.38	1.96	1.32	2.23	1.06	0.76	0.90	1.11	0.71	0.30	0.09	0.61	0.90	0.74	0.84	0.37

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

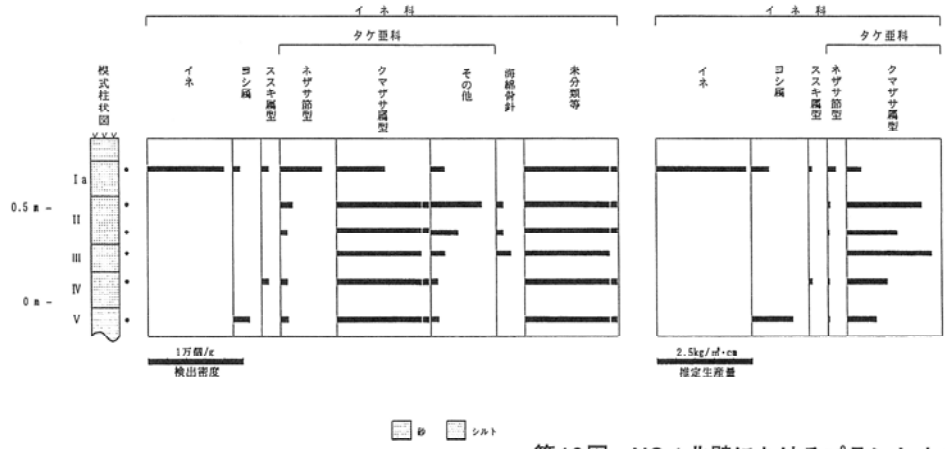
表３　新潟県、正尺Ａ遺跡のプラント・オパール分析結果（その２）

検出密度（単位：×100個/g）

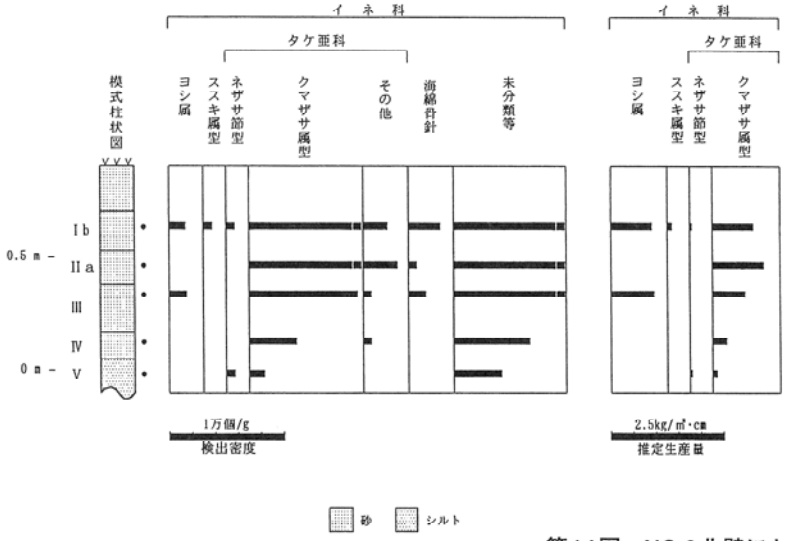
分類群（和名・学名）	土層	No.4東壁 II	III	IV	Va	No.5北壁 旧耕土	II-a-1	II-a-2	II-a'	II-b	III
イネ科	Gramineae (Grasses)										
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)					11					
ヨシ属	*Phragmites*		6	6	15	42	18	5		6	5
ススキ属型	*Miscanthus* type					11					
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)										
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa* type				8						
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*) type	60	80	63	46	26	6	24	5	19	21
その他	Others			6		11				6	
海綿骨針	Sponge		6	6	15			20	5	13	
未分類等	Unknown	66	68	56	54	95	98	49	45	95	47
プラント・オパール総数		126	161	138	138	195	122	98	55	140	73

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

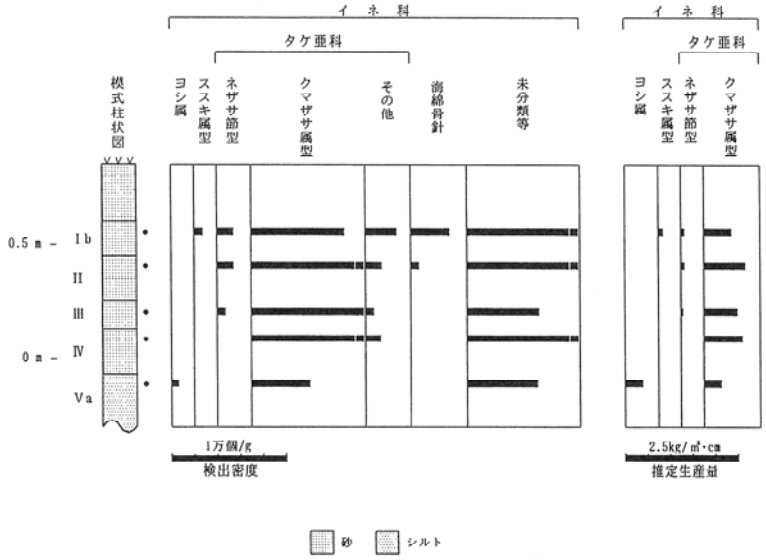
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)					0.31					
ヨシ属	*Phragmites*		0.39	0.39	0.97	2.66	1.15	0.31		0.40	0.33
ススキ属型	*Miscanthus* type					0.13					
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa* type				0.04						
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*) type	0.45	0.60	0.47	0.34	0.20	0.05	0.18	0.04	0.14	0.16



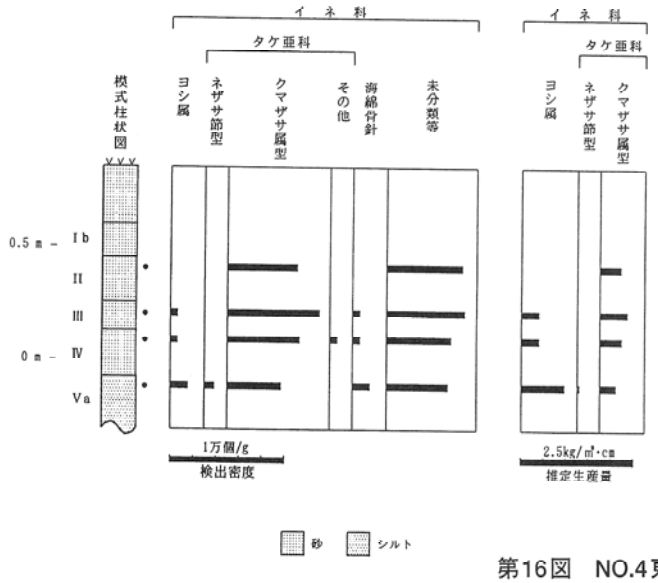
第13図　NO.1北壁におけるプラントオパール 分析結果



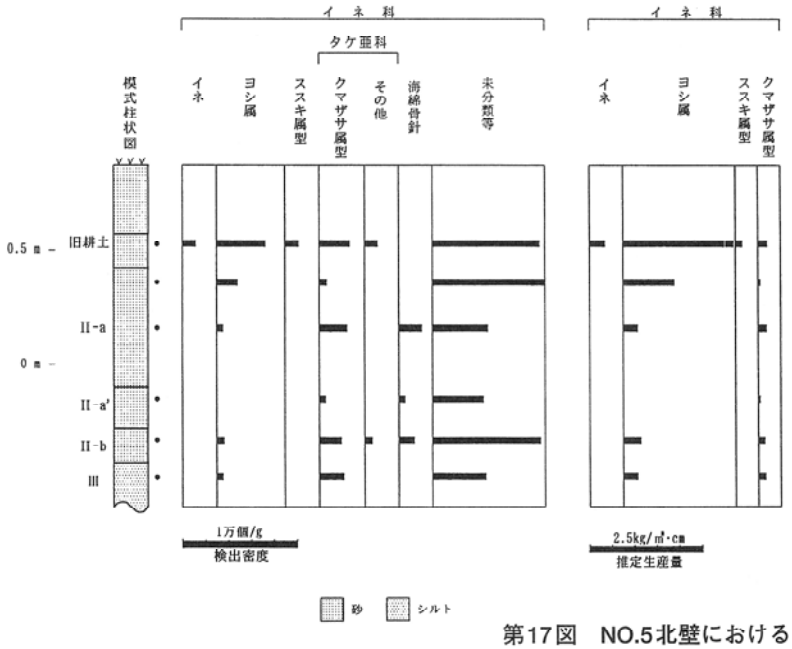
第14図　NO.2北壁におけるプラントオパール 分析結果



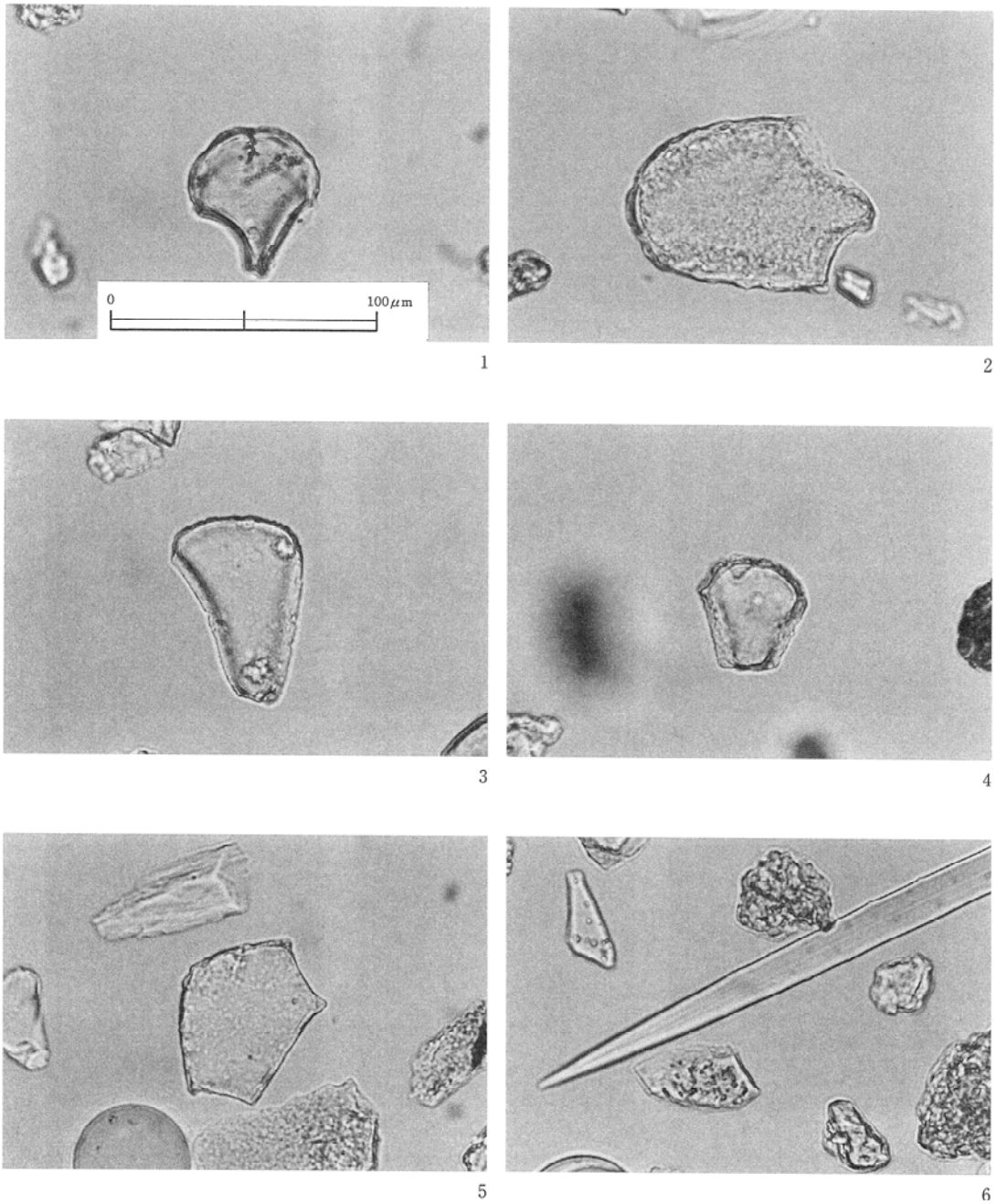
第15図　NO.3東壁におけるプラントオパール 分析結果



第16図　NO.4東壁におけるプラントオパール 分析結果

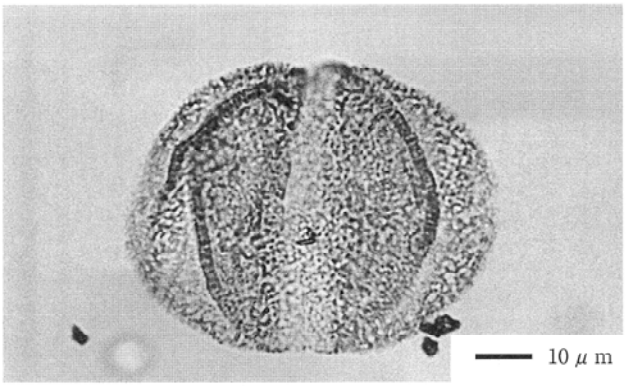


第17図　NO.5北壁におけるプラントオパール 分析結果

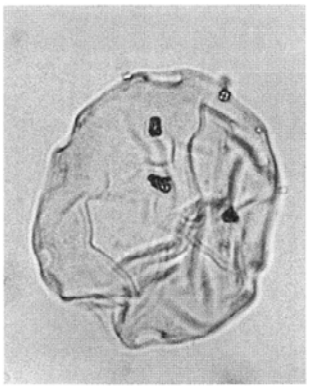


No.	分類群	地点	試料名
1	イネ	No.1	Ⅰa層
2	ヨシ属	No.2	Ⅲ層
3	ウシクサ族（ススキ属）	No.1	Ⅰa層
4	タケ亜科（ネザサ節型）	No.1	Ⅰa層
5	タケ亜科（クマザサ属型）	No.1	Ⅲ層
6	海綿骨針	No.2	Ⅰb層

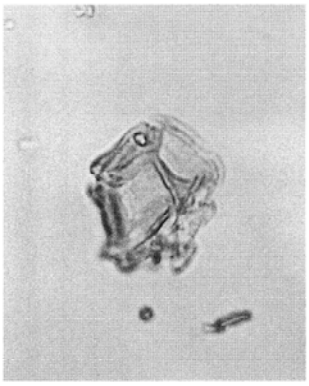
第18図　プラント・オパール（植物珪酸体）の顕微鏡写真



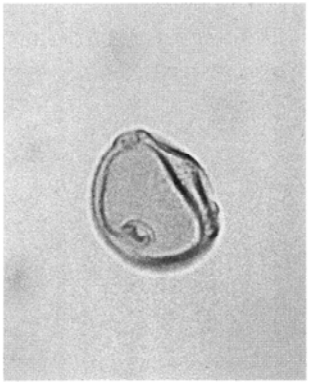
1　マツ属複維管束亜属



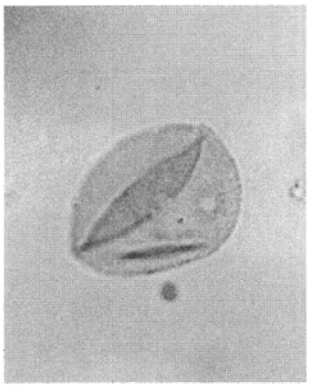
2　サワグルミ



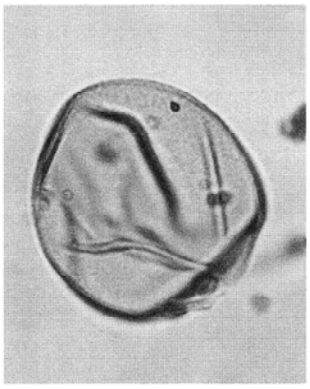
3　ハンノキ属



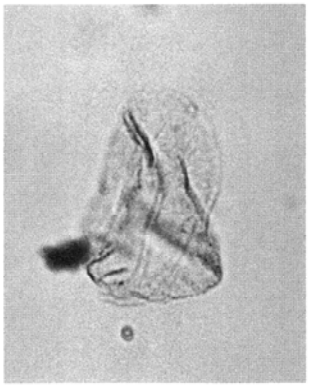
4　クワ科－イラクサ科



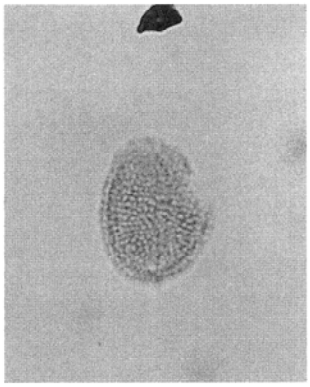
5　イネ科



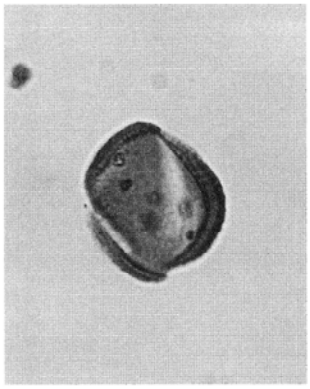
6　イネ科



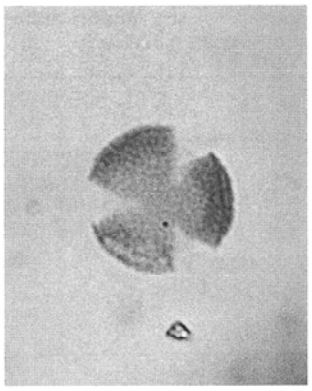
7　カヤツリグサ科



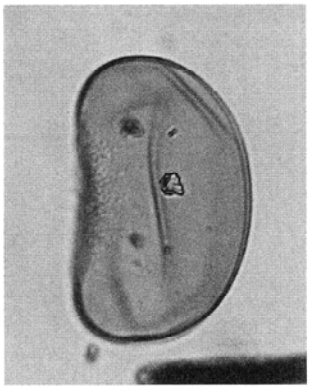
8　アブラナ科



9　ヨモギ属



10　ヨモギ属



11　シダ植物単条溝胞子

第19図　花粉・胞子の顕微鏡写真

2．正尺A遺跡における火山灰分析

新潟大学積雪地域災害研究センター　卜部厚志　高浜信行

A　はじめに

本報告は、新潟県豊栄市に位置する正尺A遺跡から発見された火山灰層について、構成鉱物の記載や構成鉱物の化学組成分析を行い対比について検討するとともに、新潟地域の完新統の火山灰層序について資料化をはかることを目的とする。

B　火山灰分析

遺跡地内から火山灰層が確認されため、この火山灰層の同定と対比を目的として、構成鉱物の記載と構成鉱物のうち特に火山ガラスの化学組成の分析を行った。

（1）産出層位と産状

産出層位は4B－16グリットで、塊状（断面形態ではレンズ状）に産出した（写真1）。火山灰層の粒度は粘土～シルト粒であり灰白色～灰色を呈する。やや粘土化している。

（2）分析方法

試料は、60、120、250メッシュの篩を用いて水洗し、粒度ごとに乾燥させた。このうち250メッシュの篩分試料を用いて鉱物薄片を作成し、偏光顕微鏡下で構成鉱物を同定した。また、沖積層や年代の若い火山灰の同定では火山ガラスが特徴となるため、120メッシュと250メッシュの篩分試料を用いて、火山ガラスの形態を検討した。火山ガラスの形態は吉川（1976）による区分を用いた。

火山ガラスの化学組成は、火山ガラスをハンドピックして封入し研磨した後、新潟大学のX線マイクロアナライザーを用いて主要元素量を測定した。測定条件は、加速電圧15KV、試料電流1.2×10－8A、ビーム径15μmである。測定には広域火山灰の姶良Tn火山灰層（町田・新井、1976）の火山ガラスを標準試料としてキャリブレーションし、かつ、未知試料と比較試料を同時分析した。

（3）分析結果

構成鉱物は軽石片＞火山ガラス＞斜長石＞重鉱物である。軽石片がやや多く含まれる。重鉱物は、緑色の角閃石と黒雲母を比較的多く含む特徴がある。火山ガラスの形態は中間型（Cb型）、扁平型（Hb型）が多く、中間型（Ca型）、多孔質型（Tb型）を含む。このうち、中間型（Cb型）はやや大きな気泡を内包する。また、扁平型（Hb型）はやや厚手である（写真2）。

火山ガラスの化学組成を第1図と第1表に示す。

（4）対比

正尺A遺跡は、遺物から古墳時代（4世紀）の年代を示している。火山灰層は、産状から降下火山灰であり、古墳時代に降灰したものであると考えられる。これまで新潟地域において、古墳時代（4世紀）の

年代を示す火山活動やそれに伴う火山灰層は知られていない。この火山灰層の広域的な対比については今後の検討課題であるが、正尺A遺跡と同年度に発掘され同様に古墳時代（4世紀）を示す正尺C遺跡の竪穴住居覆土内からも火山灰層が発見されている。両者の遺跡は近隣ではあり、発見された火山灰層は同一のものである可能性があるため比較検討を行った。この結果、本遺跡の火山灰層と正尺C遺跡の火山灰層（検出位置：11C、遺構：SI77、層位：①）は、重鉱物組成（角閃石、黒雲母を多く含む）や火山ガラスの形態（中間型（Cb型）、扁平型（Hb型）が多い）が類似し、火山ガラスの化学組成に関しても各元素ともに化学組成領域が一致することから（第1図）、両者は同一のものとして対比できる。

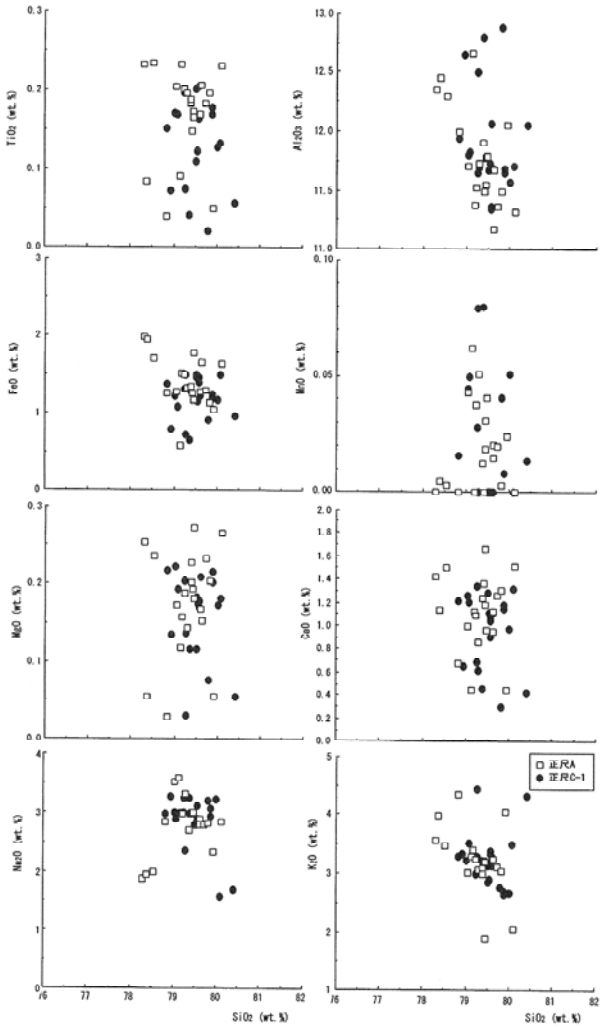
C　今後の課題

これまで新潟地域では、完新統の火山灰層序について検討が行われていなかった。しかし、最近、新潟南部の丘陵部のローム層と平野の沖積層中から同一の火山灰層が見いだされ同一の時間面指標が明らかにされるとともに、沖積層中に挟在する複数の火山灰層の発見から完新統の火山灰層序の解明がすすめられている（卜部ほか、2000）。

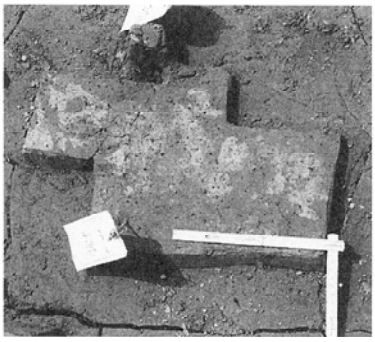
本遺跡での4世紀の年代を示す火山灰層の発見と対比は、完新統の火山灰層序の中でもはじめての成果であり、古墳時代の年代指標となる貴重な結果である。なお、新潟近隣地域において、4世紀の年代を示す火山灰層として、群馬県浅間火山起源の浅間C火山灰層が知られている（町田・新井、1992）。しかし、これについては、火山ガラスの化学組成を含めて比較検討を行っているが一致をみていない。本火山灰層の広域的な対比と供給源（供給火山）については、今後の検討課題である。

引用文献

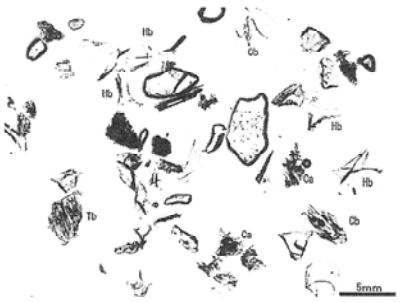
町田　洋・新井房夫　1976　広域に分布する火山灰一姶良Tn火山灰の発見とその意義一．科学、46、339－347。
町田　洋・新井房夫　1992　火山灰アトラス．276p、東大出版。
卜部厚志・高濱信行・塚野明美・渡辺秀男・東野外志男・信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ　2000　新潟地域における完新世の火山灰層序と対比．日本第四紀学会講演要旨集、30、96－97
吉川周作　1976　大阪層群の火山灰層について．地質学雑誌、82、497－515。



第20図　正尺Ａ遺跡で産出した火山灰層に含まれる火山ガラスの化学組成と対比



第21図　火山灰層の検出状況



第22図　火山灰層に含まれる火山ガラス
火山ガラスの形態は吉川（1976）
の区分による

第４表　正尺Ａ遺跡の火山灰層に含まれる火山ガラスの化学組成

																	重量%
SiO_2	73.62	74.58	79.02	76.19	77.27	74.38	73.03	78.33	73.68	76.73	75.60	76.75	78.56	79.29	76.16	72.99	79.30
TiO_2	0.08	0.19	0.15	0.19	0.22	0.04	0.22	0.19	0.22	0.20	0.19	0.18	0.09	0.17	0.17	0.22	0.18
Al_2O_3	11.70	11.05	11.49	11.28	10.92	11.32	11.53	11.28	10.59	10.77	11.01	11.52	12.58	11.76	11.29	11.43	11.31
FeO	1.84	1.20	1.25	1.27	1.59	1.18	1.85	1.12	1.42	1.00	1.43	1.25	0.59	1.17	1.70	1.59	1.29
MnO	0.01	0.04	0.03	0.05	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.02	0.04	0.01	0.06	0.04	0.02	0.00	0.02
MgO	0.05	0.16	0.19	0.14	0.26	0.03	0.24	0.20	0.15	0.15	0.18	0.20	0.12	0.18	0.26	0.22	0.23
CaO	1.07	0.94	1.18	0.83	1.47	0.64	1.33	1.29	1.05	1.09	1.04	1.20	0.45	0.97	1.59	1.40	1.25
Na_2O	1.83	3.33	2.90	3.20	2.74	2.07	1.70	2.75	2.00	2.09	2.05	2.62	3.57	2.99	2.86	1.86	2.78
K_2O	3.75	2.86	3.22	2.94	1.99	4.10	3.33	2.98	3.17	3.12	3.10	2.98	3.26	3.21	1.81	3.25	3.11
Total	93.94	94.36	99.49	96.09	96.46	94.36	93.28	98.15	93.06	95.36	95.42	96.69	99.29	99.78	95.86	92.95	99.47
																	100%換算
SiO_2	78.37	79.04	79.43	79.29	80.11	78.83	78.29	79.81	79.17	79.63	79.23	79.38	79.13	79.46	79.44	78.52	79.73
TiO_2	0.08	0.20	0.15	0.20	0.23	0.04	0.23	0.20	0.23	0.21	0.20	0.18	0.09	0.17	0.17	0.23	0.18
Al_2O_3	12.45	11.71	11.55	11.74	11.33	12.00	12.36	11.49	11.38	11.18	11.53	11.91	12.67	11.79	11.78	12.30	11.37
FeO	1.95	1.27	1.26	1.33	1.64	1.25	1.99	1.14	1.52	1.66	1.50	1.29	0.60	1.17	1.77	1.71	1.29
MnO	0.01	0.04	0.03	0.05	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.02	0.04	0.01	0.06	0.04	0.02	0.00	0.02
MgO	0.06	0.17	0.19	0.14	0.27	0.03	0.25	0.20	0.16	0.15	0.19	0.20	0.12	0.18	0.27	0.24	0.23
CaO	1.14	1.00	1.18	0.87	1.52	0.68	1.43	1.32	1.13	1.13	1.09	1.24	0.45	0.97	1.66	1.51	1.26
Na_2O	1.95	3.53	2.97	3.33	2.84	2.83	1.88	2.80	3.00	2.79	2.98	2.71	3.60	3.00	2.99	2.00	2.79
K_2O	3.99	3.03	3.24	3.06	2.06	4.35	3.57	3.04	3.40	3.24	3.25	3.08	3.29	3.22	1.89	3.49	3.12
Total	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00

第Ⅴ章　まとめ

1　古墳時代

A　土器の分布状況

前章中でも述べたが、竪穴住居跡・土坑の存在する自然堤防の中央部分（調査区北側）では小破片が多く、土器の集中的分布が確認された。これに対して、集中区周辺の遺物の散漫な区域では、一括土器が点々と確認された。これら散在する土器群の特徴としては、①出土位置に規則性が見らない②摩滅が見られない③器種は精製品が見られず甕類が多いこと④出土地点周辺で炭化物や焼土などの痕跡が認められないこと、等々が挙げられる。また、土器周辺土層の堆積状況からは洪水等による流れ込みの痕跡は確認されなかった。

遺跡周辺は自然科学分析の結果から調査区周辺はクマザサ類などの生育する比較的乾燥した環境下にあったと推測されている。調査では湿地や溝・旧河川流路等の痕跡が確認されなかったが、水に関する祭祀（水場や水路等の水口）に伴う供献土器の可能性も考えられる。今後の類似した調査例の増加に期待したい。

B　出土土器の編年的位置付け

ここでは、土坑一括資料、包含層出土土器群について既存の編年案との対応を検討する。土坑一括の資料については、高杯では杯部有稜外反するもの（4）、器台では、受部が直線的にのびるもの（7）や、脚裾部が大きく開くもの（9）、段を持ち偏球形の胴部をもつ鉢（11）が見られることなどから漆町編年の6～7群［田嶋1986］、新潟シンポ編年［坂井・川村1993］の6～7期、に併行するものと考えられる。甕類についてもおおむねその時期に収まるものと考えられる。

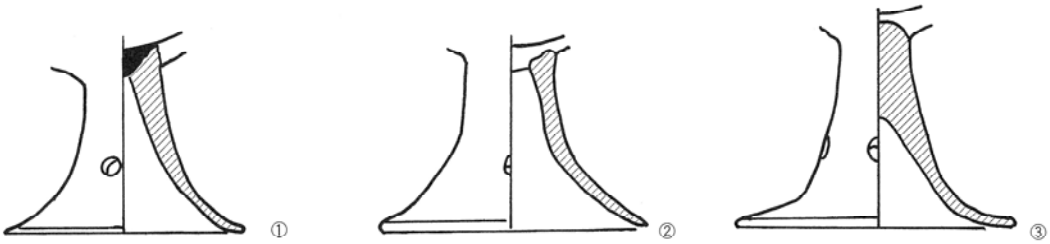
包含層出土遺物は一部前後する時期のものを含むが、ある程度の時期幅に収まると考えられる。口縁部にハケメの残る大型甕（12～14）は時期的に②杯部形態が東海系の系譜を引く高杯（81～84）が見られること③大型で受部に透孔をもつ器台（90）が存在すること④脚部裾が大きく開く高杯が存在すること⑤畿内系の影響を受けた二重口縁壺の形態等から、新潟シンポ7期、漆町7群に併行するものと考えられる。畿内系小型精製3器種（小型器台・坩・小型有段鉢）や屈折脚を持つ高杯の定着（新潟シンポ8～9期、漆町8～9群）が見られないことなどから見て時期的に古相を呈する。

大型の甕（15）は胴部の形態から見ると漆町編年の10・11群に位置づけられる。甕（37）は胴部の最大径が中半付近にあり球胴状を呈する。9群に位置付けられる。鉢（10）は在地系の有段口縁鉢の系譜を引くもので擬凹線を模倣したハケメが見られ、6群に位置づけられる。器台（93）は県内での類例は少ない。西山町高塩B遺跡出土土器に類似し、7～8群に位置づけられる。

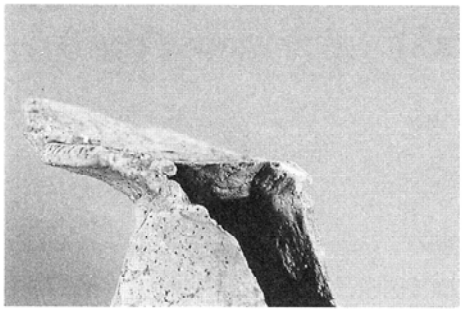
本遺跡と同一の自然堤防上にはほぼ並行する時期の正尺C遺跡がある［加藤2001］。竪穴住居跡のほか方形周溝墓、方形周溝墓、周溝を持つ掘立柱建物跡、土坑が確認されており、遺構内からは5～7群の良好な一括資料が出土している。器種の組成を概観すると器台類が卓越しており、本遺跡と様相を異にする。今後、正尺C遺跡の詳細な検討を待って、本遺跡の成果を含め多角的に再検証する必要がある。また、包含層内検出の火山灰は広域的な年代指標となる可能性があり、その分布や供給源の解明が待たれる。

C　高杯形土器製作（成・整形）技法について

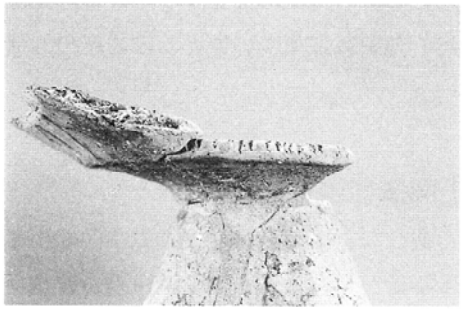
ここでは、本遺跡出土高杯形土器の破損部位の観察によって確認された製作技法について述べる。高杯形土器の製作技法については奈良県六条山遺跡ならびに矢部遺跡の土器形式分類［寺沢1980・1986］や畿内布留式精製器種について検討した次山淳氏の論考［次山1993］等で言及されている。六条山・矢部遺跡の分類では①脚部に粘土を埋め込むことによって杯底を形成するもの（充填法）②完成した杯部をすでに一定時間を経た完成脚台に載せるように接合したもの（接合法）③完成され、一定時間を経た脚台部に杯部を付加する形で成形したもので、脚頂が杯部底に接近したもの（挿入付加法）と、杯部と脚部の接合方法の観点で３類型（第23図）を設定し、畿内Ⅴ様式における①から③への変遷を捉えている。正尺Ａ出土高杯の製作工程は大きく４つの段階に分けることができる。まず、第１段階として脚部の成・整形を行い一定の休止（乾燥）をする。第２段階として杯部方向から円錐（円盤）状の粘土を充填する（第24図）。粘土の充填の際、脚内面方向からヘラナデ・指ナデを行って中実状に完全閉塞するものと、指でナデつける程度で内面方向の調整を行わないものの２種が存在する。第３段階として一定時間の休止のあと、脚上端に粘土紐を積み上げ、杯底部を成形する。その際、粘土紐の端部に列点状に刻み目を入れる（第25図）。第４段階として再び一定の休止のあと、杯部の積み上げ・成形を行い、乾燥後ヘラミガキを施す。以上が、製作技法の流れであるが、正尺Ａ遺跡の高杯形土器は矢部遺跡分類の充填法を用いていて製作されている。そして第３段階で粘土紐端に刻み目を入れることを特徴とする。刻み目は、接合部分の接着度を増す意味があると考えられる。二重口縁壺等、休止を挟んで、付加的な成・整形をおこなう器種においても行われている可能性が考えられる。次山氏の論考では挿入付加法の高杯・器台の中に脚頂部に放射状の刻み目を入れる事例を挙げ、吉備南部との技法要素の共通点を指摘し、畿内への技法伝播を想定している。本遺跡出土資料のみでは、刻み目を含めた技法の時期的な差異や変遷について捉えるには至らなかった。前後する時期での長期的な変遷や地域的な特徴等については今後の検討課題とする。



第23図　高杯形土器の接合方法



第24図　粘土充填状況



第25図　粘土紐接合部分の刻み目

2 近 世

A 文献からみた正尺集落の成立

正尺集落の立地を研究した論考に松井智氏の論考［松井2001］がある。ここでは、松井氏の論考に沿って、史料にみる正尺集落の成立を概観したい。

豊栄市の東端に位置する福島潟はかつて、北の島見前潟とつながり「越の湖」と呼ばれ、現在の豊栄市域の大部分を占めるほどの大きさであった。享保十五（1730）年、現在の北蒲原郡に位置する紫雲寺潟の干拓に伴い、阿賀野川松ヶ崎放水路が開削されると、阿賀野川の水が一気に日本海に流れ込み、福島潟の水位は低下した。以後、福島潟周辺の干拓は一挙に促進されることとなった。正尺の集落は、新発田藩による大河湖沼開発の一環として、享保十九（1734）年に葛塚新田として成立、元文二（1737）年に新発田藩により、葛塚・正尺・樋ノ内の３つの字をもつ「下興野新田」と改村名を受け、ここに「正尺」名を持つ集落が誕生する。しかしながら、この頃は自作農民（本百姓）ではなく、小作である。また、「覚」史料によると、葛塚周辺では、享保七（1722）年以前から家小屋などを作り、享保十五（1730）年からは草などが生えているところを僅かながら開発しており、近所から通って営んでいた。元文三（1738）年頃になると、家数が70軒ほど存在するようになり、他に作場小屋を所々に造っていたという。松井氏は、松ヶ崎の掘割がなされる以前の土地利用の在り方を、「河川氾濫によってその都度水の浸る様な土地には積極的に住まうことはせず、比較的高い場所に生活し、何らかの用事を果たす場所としてしか利用価値はなかった」、「切添え的な開発が進められていたが、微々たるもの」と指摘している。確かに、17世紀中頃の正保国絵図をみると、葛塚周辺には村・集落の記載はなく、成立していないか、あるいは、きわめて小規模であったと考えられる。宝暦四（1754）年、庄屋遠藤七郎左衛門は、水原代官の援助を受けて新発田藩に600両を支払い、村民の所持となる。この頃より、正尺における、新田開発は本格化したと考えられる。つづく、宝暦六（1756）年には「正尺浦」の検地がなされる。同検地帳には、遠藤七郎左衛門が築いたと云われる「中大川土居」が記されている。中大川土居は旧大口川・旧新井郷川や旧大川等の葛塚周辺を流れていた河川からの水害を防ぐため、正尺・葛塚を囲むように築かれた耕地周辺の囲堤のことを指す。従って、18世紀中頃には正尺集落は「集落」として認知されていたことがわかる。以降、新田開発が促進されるにつれ、人・物の交流が盛んとなり、大口・正尺の微高地から舟運のある新井郷川岸へと家並みは移り変わっていった。宝暦十一（1761）年10月８日、現在の葛塚に開市が許され驍ニ、町場は大きく発展し、以後、葛塚は豊栄の新田開発地域の中心地として栄え、現在に至る。

また、松井氏は集落の入口に道切りの意味で祀られる、「地蔵」に注目し、文献上の正尺集落の範囲を現集落範囲とほぼ同位置に位置づけている。正尺Ａ遺跡はその範囲内に所在する。このことは、史料における「正尺」の記載事項が近世における正尺Ａ遺跡の背景として適用できる可能性を強く示唆するものである。

B 出土陶磁器の様相

調査区を通じて、出土した近世陶磁器の様相を概観する。

ａ．磁器：染付が多い。青磁染付と白磁が散見される。総て国産品である。17世紀代の製品は１点も出土していない。18世紀代の前半の製品は数点みられるにすぎないが、中頃から後半になるとコンニャク印判

手や、梅樹文碗、二重網目文碗、斜格子文皿に代表される波佐見窯のくらわんか手が大量に出土し始める。19世紀代も大量に出土し続ける。新たに瀬戸美濃系磁器が入ってくると、既存の肥前系磁器とシェアを分ける。産地不明製品も僅かながら見られる。

ｂ．陶器：近世を通じ、肥前系が主体を占める。17世紀代の製品は肥前系の甕が２点と擂鉢が１点みられるのみである。呉器手碗及び、内野山系の銅緑釉製品はみられない。18世紀代になると、甕、壺、鉢、擂鉢などの肥前系製品がみられるようになり、越中瀬戸、瀬戸・美濃系、京・信楽系、会津本郷系などが加わる。19世紀代には、引き続き肥前系が主体を占めるものの、産地不明の製品も多くみられるようになる。

器種は、甕、壺、鉢、擂鉢類が多く、碗、皿類は殆どみることが出来ない。その他、徳利、灯明具（灯明受け皿、秉燭）、土瓶、火入れ、灰吹、植木鉢などが出土した。

ｃ．土器：焙烙、土人形、泥メンコ、鳩笛、焜炉、火鉢などが出土した。近世土師皿は出土していない。

２．その他

木製品には農業に関係したものがみられる。農村部の生活の一端を示す資料として注目される。金属製品では釘、寛永通宝、包丁などが出土した。

C　発掘調査の成果

出土陶磁器は17世紀代、18世紀前半の陶磁器も若干量出土するものの、18世紀中頃から後半に至るとその数は急増する。また、18世紀末頃に廃棄された土坑（ＳＫ５）からは、比較的遺存率がよく、器種にバリエーションのある陶磁器、木製品等がまとまって出土していることから、調査区においては、遅くとも18世紀後半にはすでに生活が営まれていたといえよう。さらに、農耕具の出土は、この地の新田開発との関連も窺わせる資料である。このことは文献研究の成果を裏付ける資料を提示し得たのではないだろうか。特に、ＳＫ５は遺物の製作年代に若干のばらつきがあるものの、概ね18世紀後半の当地に於ける生活を復元し得る、良好な一括資料といえる。

調査区内では総じて、当時の大量生産品であった波佐見窯のくらわんか手が大量に消費され、大皿などの高級品や、近世土師皿がみられない点は城下町における上級武家屋敷の出土品群と様相を異にする。生活様式の違いを示しているのであろう。また、出土陶磁器は肥前系が主体を為す。この現象は、日本海沿岸に共通するもので、当地域が北前船に代表される日本海を利用した交易圏に組み込まれていることを示している。注目すべきは、ＳＫ５から出土した会津本郷産片口である。越後と会津は阿賀野川を通じて結ばれており、このルートによる越後－会津の流通[5]を考える上で興味深い資料である。

要　約

1　正尺Ａ遺跡は、豊栄市葛塚字子辰高入3059番地ほかに所在する。遺跡は旧大口川左岸の自然堤防上に立地し、現況は宅地および荒蕪地であった。標高は現況で約２ｍを測る。

2　発掘調査は、日本海沿岸東北自動車道が建設にともない平成13年５月22日から10月20日にかけて実施した。調査面積は3,800㎡である。

3　調査の結果、古墳時代前期の竪穴住居１軒・土坑１基、平安時代の土坑１基、江戸時代後期の土坑２基を検出した。遺物は古墳時代前期の土器のほか、平安時代の土器、江戸時代の陶磁器・木製品などが整理箱に45箱出土した。

4　古墳前期の土器群は大きく土坑出土土器と包含層出土土器に分けることができ、該期における良好な一括資料であるといえる。

5　包含層出土土器は自然堤防中央部の遺構周辺で集中的に見られ、その周辺では散漫に分布し、かつ一括土器が点在する状況が見られた。

6　包含層中から検出された火山灰は現在までの所、未確認のものである。供給源等については不明だが広域的な古墳時代前期の時期的指標となる可能性がある。今後の解明が待たれる。

7　近世の土坑２基からは、肥前系陶磁器のほか木製の農具、漆器、下駄など良好な一括資料が得られた。遺跡が農村部に立地している点から当時の農村の生活様式を知る上で貴重な資料であるといえる。

註

1）　なお、遺物の年代観は大橋康二1993、関西近世考古学研究会・考古フォーラムくらもと1999、九州近世陶磁学会2000、長佐古真也1996、成瀬晃司1996、堀内秀樹1996、水本和美1998を参考にした。

2）　東京都新宿区三栄町遺跡からも、碗・皿・徳利などの高台や、仏花瓶の口縁部を打ち欠いた資料が出土し、扇浦正義氏は報文で、前者を「高台部分１箇所が欠損し不安定となったため、他の部分を故意に打ち欠くことで座りをよくした」、後者を「１箇所を欠損したため、他の部分を同じ高さまで打ち欠いた」と推定している。東京都新宿区教育委員会『三栄町遺跡』1985

3）　図版12－127は焼屋敷遺跡出土品（報告書21頁　第12図－１）を再実測の後、正尺Ａ遺跡出土陶片の実測図を合成して作成した。

4）　平野部では組立式のものが多く、柄の取り付け角度は65°～80°くらいで平地の場合は角度が緩やかになるという。（日本民具学会　1997）

5）　福島から越後を結ぶルートには阿賀野川の船運と阿賀野川沿いの「越後街道」を併用したルートがあり、会津から主に大坂への米廻送に使われた。18世紀前半にはかなり盛んであった。江戸後期には度重なる飢饉で廻米が減少し、藩公用主体から商人中心へと移った。［福島県立博物館　1985］『江戸時代の流通路』

引用・参考文献

関　雅之　1999　『葛塚遺跡』新潟県豊栄市葛塚遺跡発掘調査報告　豊栄市教育委員会・豊栄市博物館

五百川清　1995　『にいがた歴史紀行四　豊栄・北蒲原郡』新潟日報事業社

伊藤秀和ほか　2000　『丸潟遺跡・新通遺跡』加茂市文化財調査報告（10）　加茂市教育委員会・山武考古学研究所

大橋康二　1993　『肥前陶磁』　考古学ライブラリー55　ニュー・サイエンス社

広井　造　1996　「越後の前方後円墳」『東北・関東における前方後円墳の編年と画期』第１回東北・関東前方後円墳研究会発表要旨資料

神奈川大学日本常民文化研究所　1988　『民具実測図の方法－農具』　神奈川大学日本常民文化研究所調査報告第13集　平凡社

川村浩司　1993　「北陸北東部における古墳出現前後の土器組成」『環日本海地域比較史研究』第２号　環日本海地域比較史研究会

川村浩司　2000　「上越市の古墳時代土器様相－関川右岸下流域を中心に－」『上越市史研究』第５号　上越市史専門委員会

関西近世考古学研究会・考古フォーラムくらもと　1999　『京焼　―消費地出土の様相―』

九州陶磁学会　2000　『九州陶磁の編年』

小林謙一　1991　「江戸における近世瓦質・土師質焜炉について」『江戸在地系土器の研究』江戸在地系土器研究会

坂井秀弥・川村浩司　1993　「古墳出現前後における越後の土器様相」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』「磐越地方における古墳文化形成過程の研究」研究者グループ

鈴木俊成ほか　1994　『一之口遺跡　東地区』新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

千鹿野茂　1993　『日本家紋総鑑』角川書店

次山　淳　1993　「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』第40巻第２号　考古学研究会

寺沢　薫　ほか　1986　『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊　奈良県立橿原考古学研究所

寺沢　薫　ほか　1980　『六条山遺跡』奈良県文化財調査報告書第34集　奈良県立橿原考古学研究所

東京都新宿区教育委員会　1985　『三栄町遺跡』

豊栄市　1990　『豊栄市史』資料編２　近世編

長佐古真也　1996　「“江戸”遺跡に流通する量産陶器碗の編年（Ｖｅｌ．2.1）」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』江戸陶磁土器研究グループ

成瀬晃司　1996　「江戸遺跡出土磁器碗・皿の変遷－文様、銘款を中心に－」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』江戸陶磁土器研究グループ

本間信昭他　1976　『焼屋敷遺跡　杉之森遺跡』　新潟県埋蔵文化財調査報告書第８集　新潟県教育委員会

日本民具学会　1997　『日本民具辞典』

平田禎文　1995　『近世追手門前通遺跡群Ｂ地点発掘調査報告書』三春町文化財調査報告書第22集　三春町教育委員会

平田禎文　2000　『三春城跡第３次調査　近世追手門前通遺跡群Ｄ地点』三春町文化財調査報告書第26集　三春町教育委員会

福島県立博物館　1985　『江戸時代の流通路』

堀内秀樹　1996　「東京大学本郷構内の遺跡出土陶磁器の編年的考察」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』江戸陶磁土器研究グループ

増山仁ほか　1995　『本町一丁目遺跡』金沢市文化財紀要117　金沢市・金沢市教育委員会

増山仁ほか　1997　『安江町遺跡』金沢市文化財紀要130　金沢市教育委員会

松井　智　2001　「豊栄市正尺の立地－正尺集落と正尺遺跡から－」『研究紀要』　第３号　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

水本和美　1998　「陶磁器・土器　分類・計数基準」『伝中・上富士前』別冊豊島区教育委員会

山口賢俊他　1970　『福島潟－1970－』福島潟干拓地域民俗緊急調査報告書　新潟県教育委員会

和田　聡ほか　1994　「宮ノ北遺跡（第２次）」『阿賀川地区遺跡発掘調査報告書』　会津坂下町教育委員会

古墳時代土器観察表（1）

No.	出土地点	層位	分類	口径	底径	器高	口縁残存率	胎土	色調 外	色調 内	調整 外	調整 内	備考
1	5C-23 SX		甕	16.2			15／16	砂礫多く、礫（大・中）少量	黒褐	にぶい黄橙～灰黄褐	ハケ	ハケ	外面に炭化物付着
2	SX	Ⅲ下	甕	19.2			2／16	礫（中）少量	にぶい黄燈	にぶい橙～にぶい黄橙	ハケ	ハケ	
3	5D-2 SX		甕	16.0			14／16	砂・砂礫少量、白色粒多	にぶい黄燈	にぶい黄橙	ハケ	ハケ・ナデ	
4	5C-23-3 SX	4	高杯	22.4	13.9	13.4	5／16	砂・砂礫少量、礫（中）多	にぶい黄燈	にぶい黄橙～灰黄褐	ミガキ・ナデ	ミガキ	杯部外反、脚部下半透孔、 焼成時黒斑
5	5C-22-2 SX		高杯	19.3	12.5	12.5	6／16	砂礫多、礫（中）少量	赤	にぶい橙～浅黄橙	不明	ハケ	摩滅により赤彩および調整が不明瞭
6	5C-18-3 SX	4	器台受部	10.2			16／16	円礫（中）多	赤褐～橙	赤～浅黄	ミガキ	ミガキ	赤彩、ミガキ単位不明瞭
7	5C-23-1 SX	Ⅲ	器台	10.3	7.5	11.2	2／16	礫（中）・赤色粒少量	赤	赤	ヘラミガキ	ケズリ	外面赤彩、脚部中半付近に透孔3か所
8	5C-22-4 SX	4	器台	10.6	13.0	8.7	1／16	礫（大・中）多	橙～黄橙	橙～黄橙	ミガキ	ハケ	脚部透孔なし、二次焼成による被熱痕
9	5D-3-3 SX	4	器台脚部					砂・砂礫多	赤	にぶい黄橙～橙	ミガキ	ケズリ残るナデ	赤彩、脚部上半に透孔4か所
10	5C-22-4 SX	4	有孔鉢	13.8	2.9	12.7	16／16	砂・砂礫・礫（大・中）多	にぶい黄燈	にぶい黄橙	ハケ	ハケ	
11	5D-3-1 SX	4	有段鉢	14.8			3／16	砂・砂礫少量	にぶい橙	浅黄橙	ミガキ	ミガキ	
12	6B-8-4	Ⅳ	大型甕	31.8			2／16	砂礫多、礫（中）・赤色粒少量	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ハケ	ハケ	
13	6C-5・7C	Ⅲ	大型甕	24.6			3／16	砂礫多、礫（中）少量	橙	黒褐～にぶい橙	ハケ	粗ハケ・ケズリ	
14	5C-17	Ⅲ下	大型甕	31.0			3／16	砂・砂礫多、礫（大）少量	橙～褐灰	にぶい黄橙	ハケ	ハケ・ケズリ	
15	8E－25	Ⅲ上	甕	22.2			9／16	砂・砂礫多、礫（大・中）少量	浅黄橙	黒褐	ハケ	ハケ	外面に炭化物付着
16	5D-7-3	Ⅲ	有段口縁甕	14.0			1／16	砂礫多、 礫（中）少量	にぶい黄橙	にぶい黄橙	調整不明		
17	3C-22	Ⅲ	有段口縁甕	24.3			3／16	砂礫多、礫（中）少量	にぶい黄橙	にぶい黄橙～黒褐	ハケ残るナデ	ハケ	内面に指による圧痕
18	6C-20-4	Ⅲ下	甕	16.4			1／16	砂・砂礫多、礫（中）少量	灰黄～黒褐	にぶい黄橙	ハケ	ハケ	外面に炭化物付着
19	5D-9-2	Ⅲ	甕	16.8			4／16	砂・砂礫多	橙	橙	調整不明	調整不明	摩滅により、調整不明
20	7D-14-3	Ⅲ下	甕	20.0			2／16	砂礫多、礫（大・中）少量	にぶい黄褐～黒褐	褐灰～黒褐	ハケ	粗ハケ	外面に炭化物付着
21	5C-23	Ⅲ	甕	18.0			12／16	砂礫多、礫（中）少量	にぶい黄褐	黒褐	ハケ	ケズリ	外面に炭化物付着
22	5C-18-1	Ⅲ下	甕	19.6			2／16	砂・砂礫多、礫（中）・赤色粒少量	にぶい黄橙	にぶい橙	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	
23	5C-18-4	Ⅲ下	甕	16.0				砂礫多、礫（中）少量	浅黄橙	浅黄橙～灰黄褐	ハケ	ハケ	
24	6F-9-1	Ⅳ	甕	16.2			6／16	砂多、礫（中）多	黒褐	にぶい黄橙～灰黄褐	ハケ	ハケ	外面に炭化物付着、被熱
25	4C-17	Ⅲ	甕	17.4			1／16	砂・砂礫多、礫（中）少量	にぶい橙	にぶい黄橙～黒褐	ハケ	ハケ残るナデ	薄手
26	5C-13-3	Ⅲ	甕	19.8			1／16	砂礫を少量、礫（中）少量	にぶい褐～黒褐	橙～にぶい黄橙	ハケ	ハケ	外面に炭化物付着
27	4B-13-4	Ⅲ上	甕	19.2			1／16	砂・砂礫少量	橙?にぶい黄橙	黒褐	ハケ	ハケ	
28	5C-5-1	Ⅲ下	甕	17.0			2／16	砂礫多、礫（大・中）少量	にぶい黄橙	橙～にぶい黄橙	ナデ・ハケ	ハケ	外面に炭化物付着
29	6C-3-2	Ⅲ	甕	15.8	2.4		7／16	砂・砂礫多	にぶい黄橙	褐灰～灰黄褐	ハケ	ハケ	外面に炭化物付着
30	5D-2	Ⅲ	甕	18.0			3／16	砂礫多、礫（大・中）少量	橙～にぶい黄褐	橙～黄褐	ハケ	ハケ・ケズリ	大粒の長石・石英が見られる。
31	5C-13-2	Ⅲ	甕	17.8			1／16	砂礫多、礫（中）少量	黒褐	にぶい黄橙?灰黄褐	ハケ	ハケ	
32	6C-2-3	Ⅲ下	甕	19.0			4／16	砂礫多、礫（大）・赤色粒少量	にぶい黄橙	橙～黄燈	ハケ	ハケ	
33	5C-18-1	Ⅲ下	甕	16.6			14／16	砂礫多、礫（中）少量	黒褐	灰黄褐	ハケ	ハケ	摩滅により、調整不明瞭
34	5D-8-2	Ⅲ	甕	15.0			1／16	砂・砂礫・礫（中）少量	黒褐	にぶい黄橙	ハケ	ハケ	
35	6D-20-3	Ⅳ	甕	18.6			13／16	砂礫・礫（中）少量	黒褐	にぶい黄橙	ハケ	ハケ	外面に炭化物付着
36	5C-12-4	Ⅲ下	甕	17.8			1／16	砂礫多・礫（大）少量	にぶい橙	にぶい黄橙	ハケ	ハケ	外面に炭化物付着
37	6C-4	Ⅲ	甕					砂礫多、礫（大・中）・赤色粒少量	にぶい橙	浅黄橙～灰白	ハケ	ハケ	体部外面中半に炭化物が帯状に付着
38	5C-22-4 SX	5	甕底部		3.5			砂・砂礫少量、礫（中）多	にぶい黄橙～褐	にぶい黄橙	ハケ	ハケ	底部を棒状の工具で窪ませている。
39	5C-13-3	Ⅲ下	甕底部		3.8			砂・砂礫多。礫（大・中）少量。	にぶい黄橙	黒褐	ハケ	ケズリ	
40	5C-18-3 SX3	Ⅲ下	甕底部		3.6			砂・砂礫・礫（中）多	明褐～黒褐	にぶい黄褐	ハケ	ナデ	内面に指による圧痕
41	5D-3-3 SX	5	甕底部		3.4			砂・砂礫・礫（中）多	黒褐	にぶい黄橙～灰黄褐	ハケ	ハケ	
42	4C-12	Ⅲ	甕底部		6.4			砂礫多、礫（大・中）少量	橙～明赤褐	橙～にぶい黄橙	ハケ	ハケ残るナデ	
43	5D-4	Ⅲ	甕底部		5.0			砂・砂礫・礫（中）少量	黒褐	黄橙～灰黄褐	ハケ	ハケ	
44	5C-1-3	Ⅲ上	甕底部		7.8			砂礫少量、礫（中）ごく少量	にぶい黄橙	黄橙～灰黄褐	ハケ	ハケ	

古墳時代土器観察表（2）

No.	出土地点	層位	分類	口径	底径	器高	口縁残存率	胎土	色調 外	色調 内	調整 外	調整 内	備考
45	7B-1-4	Ⅳ	壺口縁	10.2			3／16	礫（中）ごく少量	にぶい黄橙	橙～にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	
46	4C-6-1	Ⅱ下	有段口縁壺	6.6			1／16	砂・砂礫少量	灰白～浅黄橙	浅黄橙～褐灰	ミガキ	ケズリ・ハケ	
47	6C-15-2	Ⅱ下	壺					砂礫多	にぶい黄橙～橙	灰白～褐灰	ハケ	ナデ	
48	4C-6-1	Ⅱ下	小型壺		3.4			砂礫・礫（中）ごく少量	灰白～浅黄橙	灰白	ハケ・ケズリ	ハケ残るナデ	
49	3B-19-4	Ⅱ下	小型鉢	9.8			7／16	砂礫・礫（中）ごく少量	灰白	灰白	ハケ	ハケ	
50	5C-1-3	Ⅱ下	小型壺	10.0	1.8	12.3	2／16	砂礫・礫(中)少量	橙	褐灰	ハケ	ハケ	
51	5C-18-2	Ⅱ下	壺	13.5			12／16	礫(大・中)少量	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ハケ	ハケ	胎土精良
52	5C-18-1	Ⅱ下	壺	13.5			16／16	砂・砂礫・礫(大・中)多	明赤褐	明赤褐	ミガキ	ミガキ	赤彩、ミガキの単位不明瞭
53	4C-6		大型壺	14.0			6／16	砂礫・礫(大・中)多	にぶい橙	にぶい黄橙	ハケ	ケズリ残るナデ	
54	4C-6	Ⅱ	壺	15.8			11／16	砂・砂礫多。礫(大・中)少量	橙	橙～黒褐	ハケ	不明	口頸部に横方向のハケ
55	4B-11	Ⅲ	有段口縁壺	19.2			1／16	砂多、礫(中)少量	にぶい黄橙～黄褐	にぶい黄橙	ハケ残るナデ	ハケ残るナデ	
56	4B-9-2	Ⅲ	二重口縁壺					礫(中)多	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ハケ残るナデ	ハケ	頸部外面縦方向のハケ
57	4C-11-1・3	Ⅲ	二重口縁壺	16.0			7／16	砂・砂礫・礫(中)少量	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	赤彩、受部透孔
58	3B-10	Ⅲ	二重口縁壺	6.9			1／16	砂・砂礫多、礫(中)少量	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ハケ	ハケ	外面黒斑
59	5C-17-3	Ⅲ下	二重口縁壺	28.2			8／16	砂・砂礫少量、礫(中)多	浅黄橙	にぶい黄橙	ハケ	ハケ	内外面に焼成時の黒斑あり
60	5C-25-4	Ⅲ	壺底部		5.0			礫(中)ごく少量	灰白	灰白	ケズリ	ケズリ	胎土精良、底部時計回りのケズリ
61	5D-5-3	Ⅲ	壺底部		6.8			砂・砂礫・礫(中)少量混じる	にぶい黄橙	灰黄褐	ハケ・ミガキ	ハケ残るナデ	底部を棒状の工具で窪ませている。
62	5C-11-4	Ⅲ下	壺底部		7.4			砂・砂礫多、礫(中)少量	にぶい黄橙	灰黄褐	ヘラナデ	ハケ	
63	4C-6-2	Ⅳ	二重口縁壺	12.6			15／16	円礫(中)多	浅黄橙	にぶい黄橙～褐灰	ハケ	ハケ	外面に焼成時の黒斑あり
64	6C-3-2	Ⅲ	壺		7.2			砂・砂礫多、礫(大・中)・赤色粒を少量含む	にぶい黄橙～橙	にぶい黄橙～橙	ハケ残るナデ	ミガキ・ナデ	外面に焼成時の黒斑あり
65	6B-13-2	Ⅲ	大型鉢		5.5			礫(中)ごく少量	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	
66	5C-13-3	Ⅲ下	小型鉢		1.2			砂・砂礫多、礫(中)少量	橙～にぶい黄橙	橙	ハケ・ケズリ	ナデ	
67	5C-17-2	Ⅲ下	鉢	18.2			7／16	砂・砂礫を少量	にぶい黄橙	明黄褐	ハケ	ハケ	胎土精良
68	5C-13-3	Ⅲ下	鉢（高杯）	8.8			4／16	礫(中)多	黄橙～明黄褐	にぶい褐	不明	不明	表面の摩滅により調整不明
69	6B-13-4	Ⅲ上	鉢	16.8	4.0	8.5	1／16	砂・砂礫ごく少量	灰褐～にぶい黄橙	灰黄褐	ケズリ	ケズリ	
70	24T	ⅣB	有段鉢	10.4		8.4	4／16	砂・砂礫多、礫(中)少量	にぶい黄橙	にぶい黄橙?明黄褐	ハケ	ハケ	胎土精良
71	4B-20-3	Ⅲ上	鉢	9.8			2／16	砂礫ごく少量	灰白～にぶい黄橙	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	摩滅により調整の単位不明瞭
72	4C-1-1	Ⅲ下	有段鉢	13.8			0／16	砂・礫(中)が少量混じる	灰黄褐	にぶい黄橙	ハケ	ケズリ・ハケ	
73	5C-22-3 SX	4	有段鉢	10.4			2／16	砂・砂礫を少量含む	灰白～にぶい黄橙	にぶい黄橙	ミガキ	ハケ残るミガキ	
74	6D-1	Ⅲ	小型鉢	10.0	2.4	9.0	1／16	砂礫ごく少量	灰白	灰白	ミガキ、ケズリ	ハケ残るミガキ	胎土精良
75	5C-13-3	Ⅲ下	有孔鉢		2.8			砂・砂礫多、礫(中)少量	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ハケ	ハケ	甑の底部
76	5C-17-2	Ⅲ下	有孔鉢					砂・礫(中)少量	にぶい黄橙～褐灰	にぶい黄橙	ハケ	ハケ	甑の底部
77	5C-17-4 SX	4	鉢（片口）	31.2			0／16	砂・砂礫少量	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ハケ	ハケ	外面黒斑
78	5E－19	Ⅱ	蓋	12.8		4.4	2／16	砂・砂礫多	にぶい黄橙	橙～浅黄橙	不明	ケズリ残るナデ	外面黒斑
79	7B-21-3	Ⅲ下	蓋	16.2				砂・砂礫多、礫(中)少量	浅黄橙	浅黄橙～灰黄褐	ナデ	ハケ・ナデ	外面黒斑
80	4D-4-1	Ⅲ	蓋	18.0			1／16	砂礫多	浅黄橙	にぶい黄橙	ケズリ・ナデ	ハケ	
81	6B-14-4	Ⅲ下	高杯杯部	22.2			3／16	砂・砂礫多、礫(中)少量	褐灰～黒褐	にぶい黄橙～褐灰	ミガキ	ミガキ	
82	5C-18-1	Ⅲ下	高杯					砂礫多、礫(大)少量	赤	赤褐～灰黄褐	ミガキ	ハケ・ナデ	赤彩、透孔
83	5C-17-2		大型高杯杯部	26.2			10／16	砂・砂礫少量	赤	赤	ハケ残るミガキ	ミガキ	赤彩
84	5C-13-3	Ⅲ下	高杯	24.4	13.3	14.8	4／16	砂・砂礫・礫(中)少量。	浅黄橙	にぶい橙	ミガキ	ミガキ・ハケ	脚部に透孔4か所
85	7D-5-2	Ⅳ	高杯杯部	15.3			16／16	円砂礫多。赤色粒少量	浅黄	浅黄～にぶい黄橙	ミガキ	ケズリ残るナデ	
86	4C-14-3	Ⅲ	装飾器台					砂礫多	灰黄褐～にぶい橙	にぶい黄橙	ミガキ	ケズリ残るナデ	器面の摩滅により調整不明瞭
87	4B-6	Ⅲ	装飾器台受部	9.8			3／16	砂礫多	赤	赤	ミガキ	ミガキ	赤彩
88	5B-9-2	Ⅲ下	装飾器台受部	18.2			3／16	砂・砂礫少量	赤	赤	ミガキ	ミガキ	赤彩、受部透孔

古墳時代土器観察表（3）

No	出土地点	層位	分類	口径	底径	器高	口縁残存率	胎土	色調 外	色調 内	調整 外	調整 内	備考
89	4B-14-3	Ⅲ	装飾器台受部	18.6			2／16	砂礫少量	にぶい橙	にぶい橙	ハケ残るミガキ	ケズリ残るミガキ	受部透孔
90	5B-19-3	Ⅲ下	装飾器台	20.8			13／16	砂・砂礫少量	黄橙	黄橙	不明	不明	受部透孔
91	5D-3-3 SX	4	装飾器台				14／16	砂・砂礫・礫(中)少量	赤	赤・にぶい黄橙	ミガキ	粗ハケ	赤彩、透孔3か所
92	5B-11-1	Ⅲ	器台	9.5	11.8	8.5	1／16	円砂礫多	橙～にぶい黄橙	にぶい黄橙	不明	不明	摩滅により調整不明
93	4D-4-1	Ⅲ	器台	14.6	14.0	8.9	13／16	砂・砂礫・礫(中)少量	にぶい黄橙	にぶい黄橙～褐灰	ミガキ	ハケ残るミガキ	
94	6C-9-2	Ⅲ上	高杯脚部					砂・砂礫少量	明黄褐～橙	褐灰	ミガキ	ハケ	透孔３か所
95	3C-24	Ⅲ	高杯脚部					砂礫少量	にぶい黄橙	にぶい黄橙	不明	ハケ・ナデ	
96	5C-17-4 SX	4	高杯脚部					砂礫多	にぶい黄橙	黄褐	ミガキ	ケズリ	
97	5B-13-2	Ⅲ	高杯脚部					砂礫多、礫(大・中)少量	橙	にぶい黄橙	ミガキ	ハケ	
98	5B-24-3	Ⅲ下	高杯脚部					砂・砂礫少量、礫(中)少量	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ミガキ	ハケ	脚部中半付近に透孔４か所透孔は、内外両方
99	4C-18	Ⅲ	器台脚部					砂・砂礫少量、白色粒多	赤	にぶい黄橙	ミガキ	ハケ	赤彩、脚部上半に透孔
100	6B-25-2	Ⅲ上	器台脚部					砂・砂礫少量	赤	浅黄橙	ミガキ	ハケ	透孔3か所
101	5C-4-3	Ⅲ上	器台脚部					砂・砂礫・礫(中)多	赤～暗赤	明赤褐	ミガキ	ケズリ	

近世陶磁器観察表

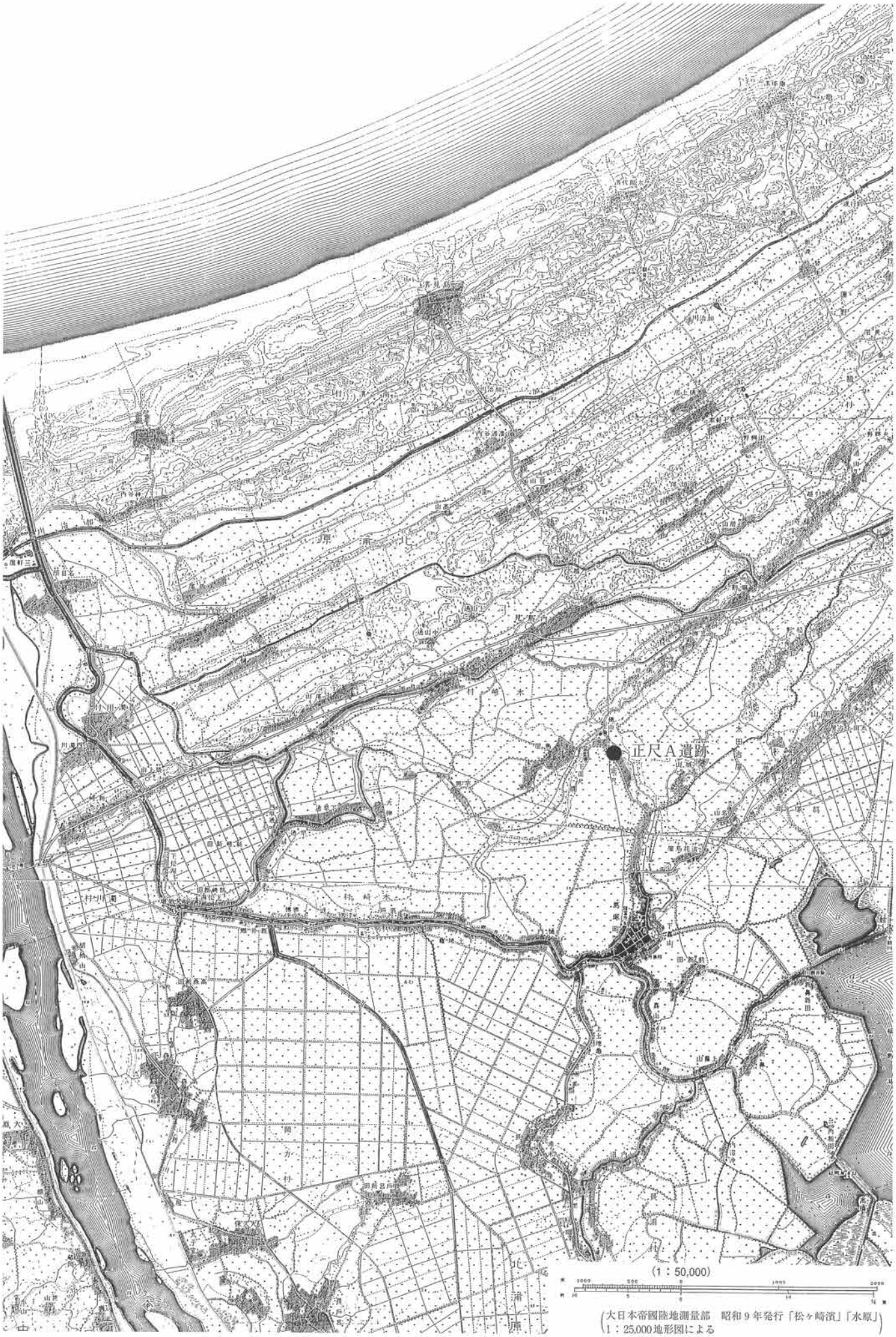
NO	出土地点	種　類	器　種	給付・釉薬	口 径	底 径	器 高	胎　　土	成形・調整（内／外）	産地／製作年代	備　　考
103	ＳＫ５	磁器	碗	染付	10.2	3.8	5.5	灰白色、黒色微粒	轆轤	波佐見／18世紀中頃	二重網目、畳付に砂粒熔着
102	ＳＫ５	磁器	半球碗	染付	9.2	4.0	5.0	白色、黒色微粒	轆轤	肥前系／1770年代～1810年代	
104	ＳＫ５	磁器	碗	染付	11.0			灰白色、黒色微粒		肥前系／1700年代～1750年代	
108	ＳＫ５	磁器	皿	染付	12.8	4.8	3.9	白色	轆轤、蛇ノ目釉剥ぎ	波佐見／1750年代～1770年代	くらわんか手、二重斜格子文
107	ＳＫ５	磁器	皿	染付		4.4		灰白色、黒色微粒	轆轤、蛇ノ目釉剥ぎ	波佐見／1750年代～1770年代	くらわんか手、口縁端部打ち欠き、二重斜格子文
106	ＳＫ５	磁器	瓶	染付		5.0		白色、黒色微粒	轆轤	肥前系／18世紀中頃～後半	「御神前」
105	ＳＫ５	磁器	水滴	染付				白色、黒色微粒	型押	肥前系	底部に布目
109	ＳＫ５	磁器	仏花瓶	青磁	9.0	5.9	15.4	灰白色、黒色微粒	轆轤	波佐見／18世紀中頃～後半	鳳凰双耳
110	ＳＫ５	陶器	半球碗	灰釉	9.0	5.0	3.0	灰白色、0.1㎜程の黒色微粒、光沢あり堅緻	轆轤、削り出し高台	京・信楽／18世紀代	細かな貫入
111	ＳＫ５	陶器	半球碗	色絵	9.9	3.2	5.8	淡黄白色	轆轤	京・信楽／18世紀代	細かな貫入
115	ＳＫ５	陶器	火入or香炉	陶胎染付	10.2	5.7	7.0	灰白色（半磁胎）、空隙多い	轆轤、削り出し高台	肥前系／18世紀中頃～後半	
112	ＳＫ５	陶器	広口壺	錆釉		9.0		淡黄白色、粗、2㎜程の白色礫・赤褐色粒多	轆轤	越中瀬戸／17世紀～18世紀代？	底部回転糸切り、内面にスス
113	ＳＫ５	陶器	茶入れ	鉄釉	10.3			淡黄白色、粗、0.4㎜程の白色粒多	轆轤	越中瀬戸／17世紀～18世紀代？	鉄釉（淡茶褐色・光沢有り）
117	ＳＫ５	陶器	擂鉢	鉄釉（黒褐色）	36.3	12.6	12.8	赤褐色、0.2㎜程の白色粒少量	轆轤	肥前系／1750年代～1860年代	畳付に砂熔着。21条１単位
116	ＳＫ５	陶器	瓶	灰釉＋刷毛目	4.8	6.4	(22.7)	1㎜程の白色粒。	轆轤、削り出し高台（刳り底風）	肥前系／17世紀末～18世紀前半	頸部は明赤褐色でやや焼が甘い。胴部は灰褐色で堅く焼締まる。
114	ＳＫ５	陶器	片口	鉄釉	17.6	9.5	10.1	淡黄白色、0.2㎜程の黒・白・赤色粒多、やや粗	轆轤、削り出し高台	会津本郷系／18世紀中頃～後半	口縁上面釉拭き取り。鉄釉（外面胴部上半・内面）
118	ＳＫ５	陶器	灯明受皿	外面施釉？		5.4		淡黄褐色。	轆轤、ナデ／ナデ	在地	油痕。開油溝。口縁端部打ち欠き。
119	ＳＫ５	土器	焙烙		28.4			明黄褐色、やや粗、1.0㎜程の赤色粒 2.0㎜程の白色粒少量、雲母･石英ごく少量	轆轤、ナデ／ナデ、底部不明	在地	外面にスス。底部二次焼成。
121	ＳＫ６	磁器	小皿	染付	6.6	3.8	1.4	白色、黒色微粒僅か	轆轤	肥前系／1780年代～1860年代	
120	ＳＫ６	磁器	紅入	白磁	2.2	0.8	1.1	白色	型押し	肥前系／1780年代～1860年代	ミニチュアか？
123	ＳＫ６	陶器	碗	白釉＋青釉流し掛け	8.4			淡黄白色、0.2㎜程の黒色粒多く混じる、粗い	轆轤	産地不明／幕末頃	
122	ＳＫ６	陶器	皿	陶胎染付	13.0	6.6	4.0	黄白色、粗、空隙が多い	轆轤、凹形高台	瀬戸美濃／1820年代～1830年代	
125	ＳＫ６	陶器	擂鉢	鉄釉		14.8		明赤橙褐色、白色粒多 1.0㎜の礫等混入物多く粗い	外面胴部下半にケズリ痕明瞭付け高台、畳付を釉剥ぎしない	肥前系？／1780年代～1860年代	13条１単位、鉄釉（光沢がなく暗赤褐色、鉄泥）
124	ＳＫ６	陶器	鉢	刷毛目		7.8		赤褐色、0.8㎜程の黒色粒僅か、堅緻	轆轤、外面胴部下半にケズリ削り出し高台	肥前系／1780年代～1860年代	
126	ＳＫ６	土器	焜炉	化粧土（外面）	25.6	11.8	20.6	浅黄色、雲母・酸化鉄粒・礫多い	ナデ／不明	在地	内面口縁部付近にスス
127	包含層	土器	骨臓器？甕	無釉	(16.5)	(13.8)	(21.6)	橙色、0.1㎜程の白色粒少量	轆轤、ナデ／ナデ	在地？	墨書「日□」

古代・中世遺物観察表

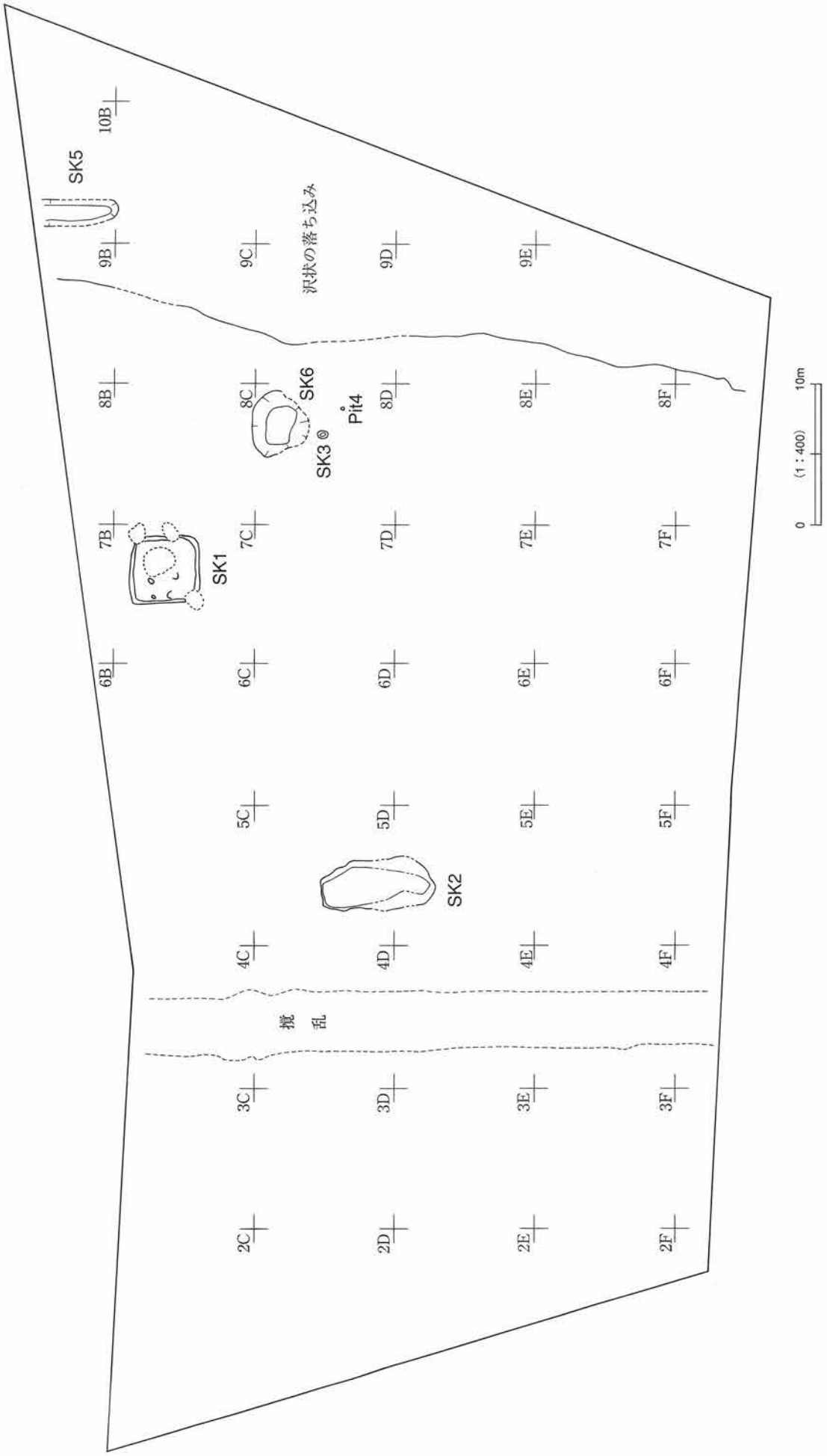
No	出土地点	層位	種別	分類	口径	底径	器高	残存部位	色調　外	色調　内	調	整	備　　考
128	SK4	4	土師器	甕	13.2			口　縁　部	浅黄橙	にぶい黄橙	外：ナデ	内：ナデ	外面にスス付着
129	SK8		土錘										長さ8.1cm 径3.6cm孔径1.2cm
130	8C-21	Ⅱ	須恵器	無台杯	12.8	8.2	3.1	口縁～底部	灰白	褐灰	外：ロクロナデ	内：ロクロナデ	口縁端部に重ね焼痕 底部ヘラ切り
131	8D-3	Ⅱ	須恵器	無台杯	12.6			口　縁　部	褐灰	灰白	外：ロクロナデ	内：ロクロナデ	底部ヘラ切り
132	8D-3	Ⅱ	須恵器	無台杯		7.3		底　　部	灰白	灰白	外：ロクロナデ	内：ロクロナデ	底部ヘラ切り
133	SK7		須恵器	甕				胴　　部	褐灰	灰白	外：平行打圧痕・カキメ	内：同心円文当て具痕	
134	10A	Ⅱ	須恵器	横瓶				胴　　部	褐灰	灰白	外：カキメ・平行打圧痕	内：ナデ	閉塞部分の剥落痕が見られる。
135	10B-12-2	Ⅱ	土師器	椀		4.8		底　　部	黄橙	黄橙	外：ナデ	内：ナデ	底部糸切り
136	15T		土師器	甕	20.4			口　縁　部	浅黄橙	浅黄橙	外：ナデ・カキメ	内：ナデ・カキメ	
137	SK7		土師器	鍋	34.6			口　縁　部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	外：ロクロナデ	内：ロクロナデ	
138	SK7		珠洲焼	片口鉢				胴　　部	褐灰	褐灰	外：ロクロナデ	内：ロクロナデ	卸目３本、単位不明
139	SK8		珠洲焼	甕				胴　　部	褐灰	褐灰	外：平行打圧痕	内：円形押圧痕？	

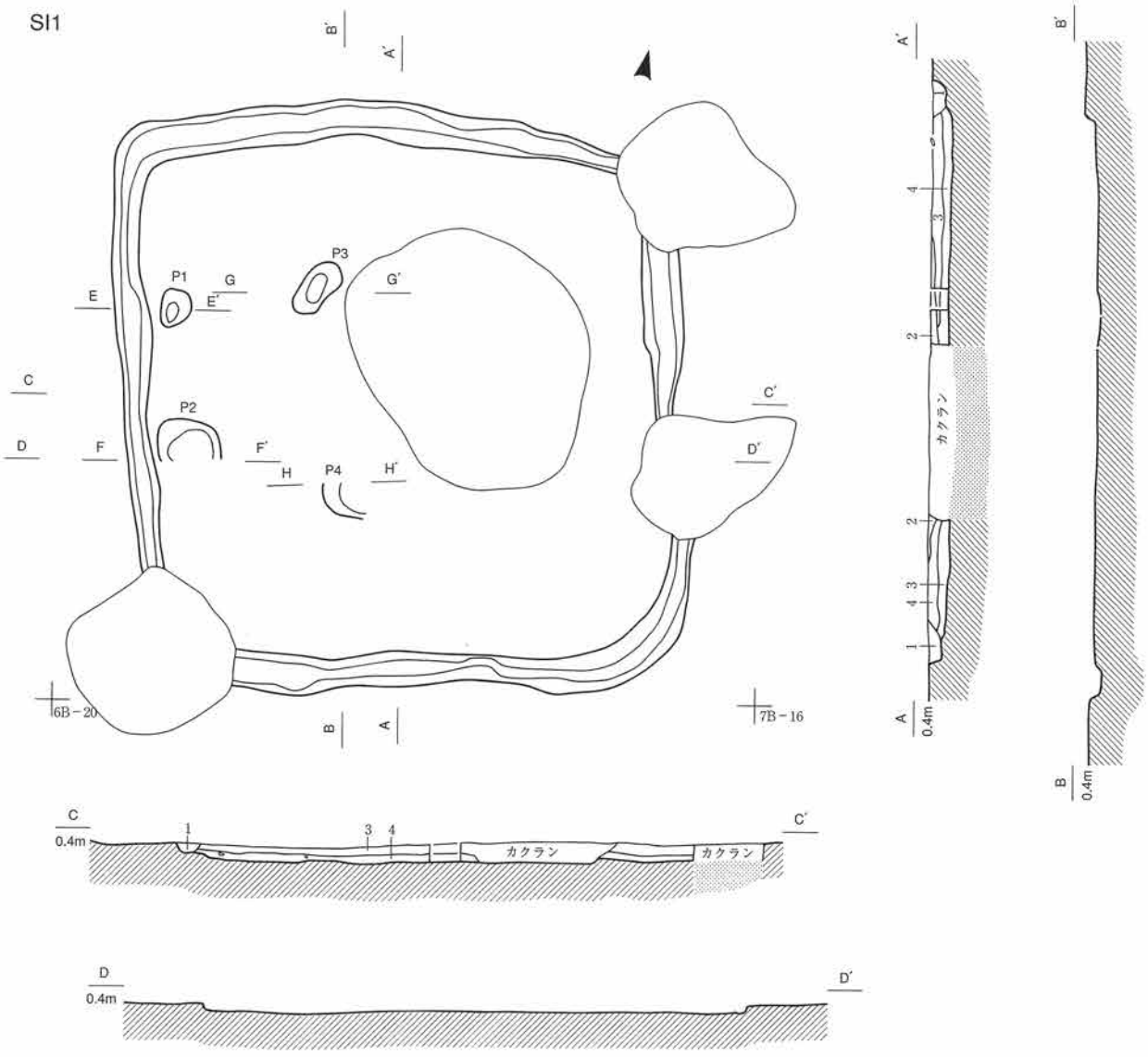
近世木製品観察表

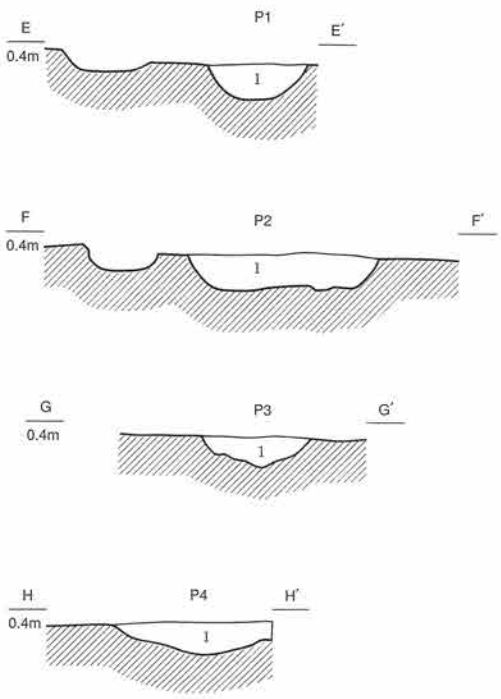
No	出土地点	種　別	長さ・口径	幅・底径	厚さ・器高	板　取	表　面　装　飾（内／外）	備　　考
140	ＳＫ5	鋤	78.3	10.8	3.3	板　目		刃床部（長さ26.5cm、幅10.8cm）
142	ＳＫ5	棒状	69.2	3.7	3.8	丸　木		柄か
143	ＳＫ5	箸	21.5	0.6	0.6	柾　目	白木	断面六角形に面取り
144	ＳＫ5	簪	22.9	0.5	0.4	－	黒漆	断面六角形に面取り
141	ＳＫ5	椀		5.4		横 木 取	赤漆／黒漆に「丸に蔦」紋	施紋三箇所
145	ＳＫ5	柄杓	10.7	9.6	7.9	縦 木 取		
146	ＳＫ5	鍬	30.6		2.2	柾　目		風呂鍬刃床部
147	ＳＫ5	鍬	31.0	11.6	2.6	柾　目		風呂鍬刃床部
148	ＳＫ5	下駄	21.7	8.3	2.9	柾　目		指圧痕、蓮歯下駄
152	ＳＫ6	椀		5.2		横 木 取	赤漆／黒漆に草花文	
150	ＳＫ6	椀		5.8		横 木 取	赤漆	
151	ＳＫ6	椀？		2.6		横 木 取	赤漆／黒漆＋赤漆施紋（「丸に細九枚笹」）	施紋三箇所、見込み中央に直径１cm程の穿孔
153	ＳＫ6	蓋	18.0	16.4		板　目	部分的に黒漆・赤漆が遺存	内外面に同心円状沈線
154	ＳＫ6	有孔円板状	13.0	12.7	0.8	柾　目	黒漆／黒漆の上に赤漆	中央部穿孔、蓋か
155	ＳＫ6	桶・樽底板	19.5		1.3	板　目		
156	ＳＫ6	印籠	4.4	11.1	3.0	縦 木 取	白木	蓋
157	ＳＫ6	箸	22.4	0.6	0.5	－	黒漆	断面六角形に面取り
158	ＳＫ6	ワラスグリ	3.7	13.3	2.4	柾　目		
159	ＳＫ6	下駄	19.0	7.9	4.2	板　目		指圧痕、除卯下駄
160	ＳＫ6	下駄	23.1	9.3	3.7	板　目		指圧痕、裏面後部の擦り減りが顕著、刳り下駄
161	ＳＫ6	下駄	16.4	5.4	4.3	板　目		指圧痕、子供用か、除卯下駄



(大日本帝國陸地測量部　昭和9年発行「松ヶ崎濱」「水原」
1：25,000地形図による)


10B
SK5
9B
9C
沢状の落ち込み
9D
9E
8B
8C
SK6
Pit4
8D
8E
8F
SK3
7B
SK1
7C
7D
7E
7F
6B
6C
6D
6E
6F
5C
5D
5E
5F
SK2
4C
4D
4E
4F
攪乱
3C
3D
3E
3F
2C
2D
2E
2F
0
(1：400)
10m





SI 1　土層説明

1　暗オリーブ灰色粘性シルト　SI 1の周溝。直径1.0mm程度の炭化物を多く含む炭層が斑状に多く混じる。しまりやや強い。粘性強い。

2　暗緑灰色シルト　古墳時代土師器を含む。直径0.2mm程度の炭化物が少量と火山灰が混じる。しまりやや強い。粘性弱い。

3　暗緑灰色粘性シルト　古墳時代土師器を含む。直径0.2mm程度の炭化物がごく少量混じる。しまりやや弱い。粘性強い。

4　暗オリーブ灰色シルト　1層に類似する。直径1.0cm程度の炭化物を少量含む。しまりやや強く粘性弱い。

P 1　土層説明

1　暗オリーブ灰色粘性細砂質シルト　住居址内2層に比べシルト質としまりが強いが、粘性弱い。直径3.0mm以下の炭化物がごく少量、黄褐色砂質土がブロック状にごく少量混じる。P 2、P 3、P 4に比べ混入物は極めて少なく、単層的。しまりやや強い。粘性弱い。

P 2　土層説明

1　暗オリーブ灰色粘性細砂質シルト　住居址内2層に比べシルト質としまりが強いが、粘性弱い。直径1.0mm以下の炭化物がごく少量、黄褐色砂質土がブロック状に多量に混じる。しまりやや強い。粘性弱い。

P 3　土層説明

1　暗オリーブ灰色粘性細砂質シルト　住居址内2層に比べシルト質が強く、しまりが強い。直径5.0mm以下の炭化層塊がブロック・斑状にごく少量、黄褐色砂質土がブロック状に少量混じる。P 1、P 2、P 4に比べ粘性が強い。しまりやや強い。粘性強い。

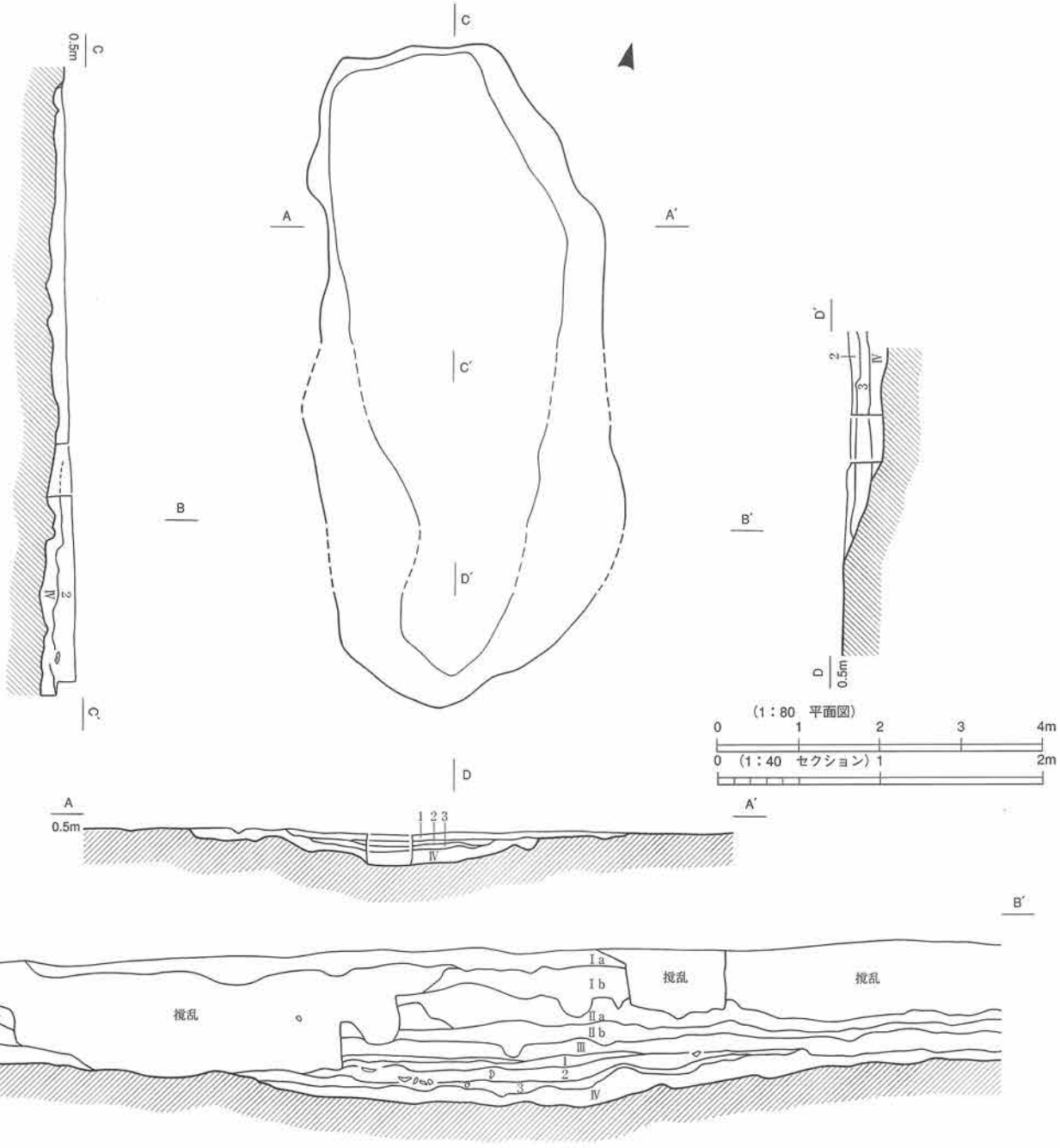
P 4　土層説明

1　暗オリーブ灰色粘性細砂質シルト　住居址内2層に比べシルト質としまりが強いが、粘性は弱い。直径1.0mm以下の炭化物がごく少量、黄褐色砂質土がレンズ状に混じる。しまりやや強い。粘性弱い。

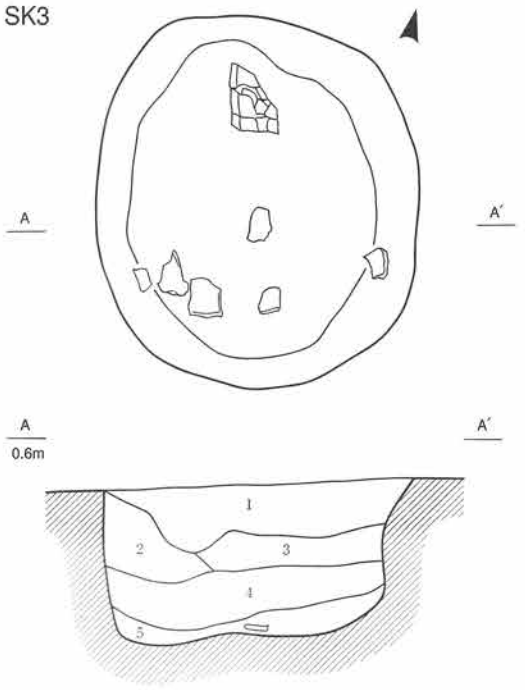
0　(1：60)　2m

0　(1：20)　1m

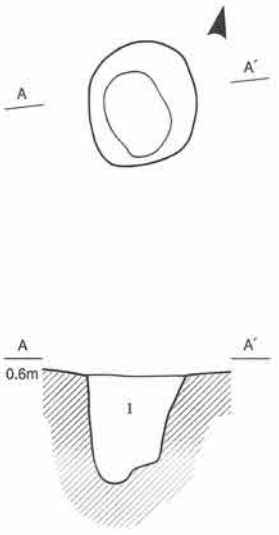
SK2



SK3



Pit4



SK 2　土層説明

1　オリーブ灰色シルト　褐鉄鉱の沈着が少量見られる。直径2.0～5.0mmの炭化物が少量混じる。しまりやや弱く。粘性弱い。
　2層と同質。

2　青灰色シルト　褐鉄鉱の沈着がごく少量見られる。古墳時代土師器を含む。直径2.0～5.0mmの炭化物が少量混じる。しまりやや弱く。粘性弱い。

3　青灰色細砂　褐鉄鉱の沈着が少量見られる。古墳時代土師器を含む。微細な炭化物がごく少量混じる。しまり弱い。粘性なし。

SK 3　土層説明

1　オリーブ灰色シルト　暗オリーブ砂質土を多く含む。5～10mm程度の炭化物を含む。

2　オリーブ灰色シルト　褐鉄鉱を多く含む。

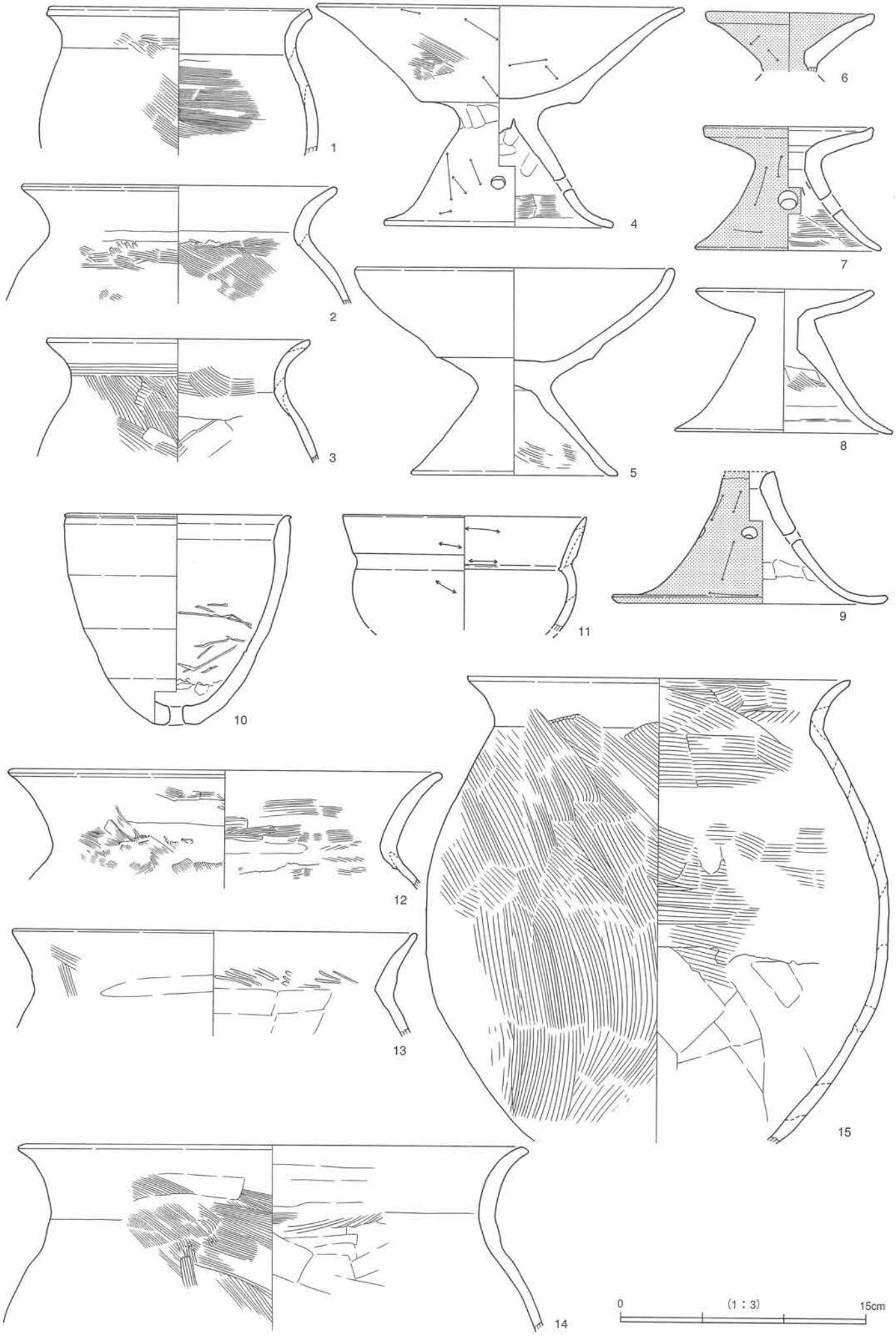
3　緑灰色砂質土　遺物含む。

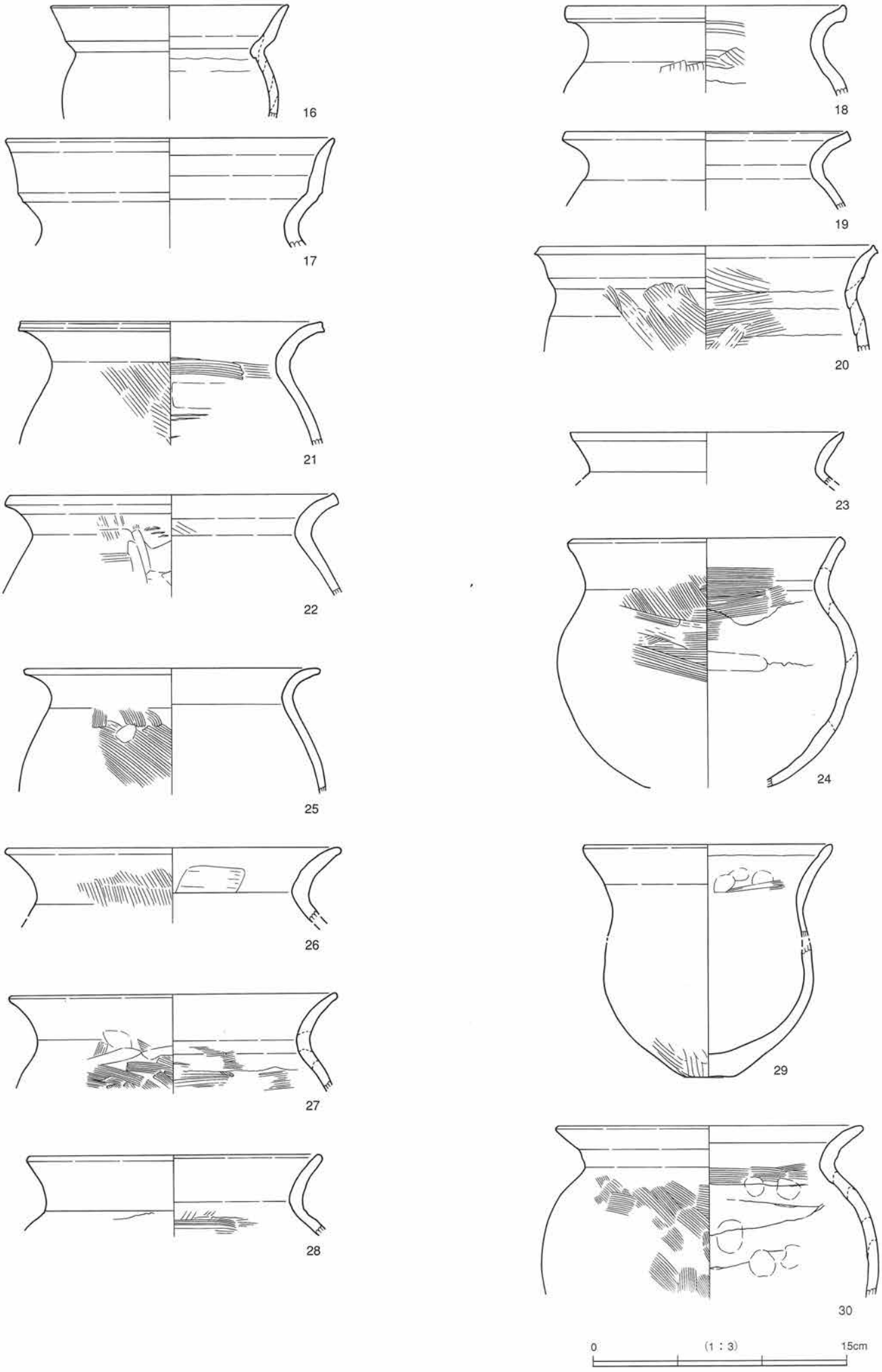
4　暗オリーブ灰色シルト　5～10mm程の炭化物を多く含む。遺物含む。

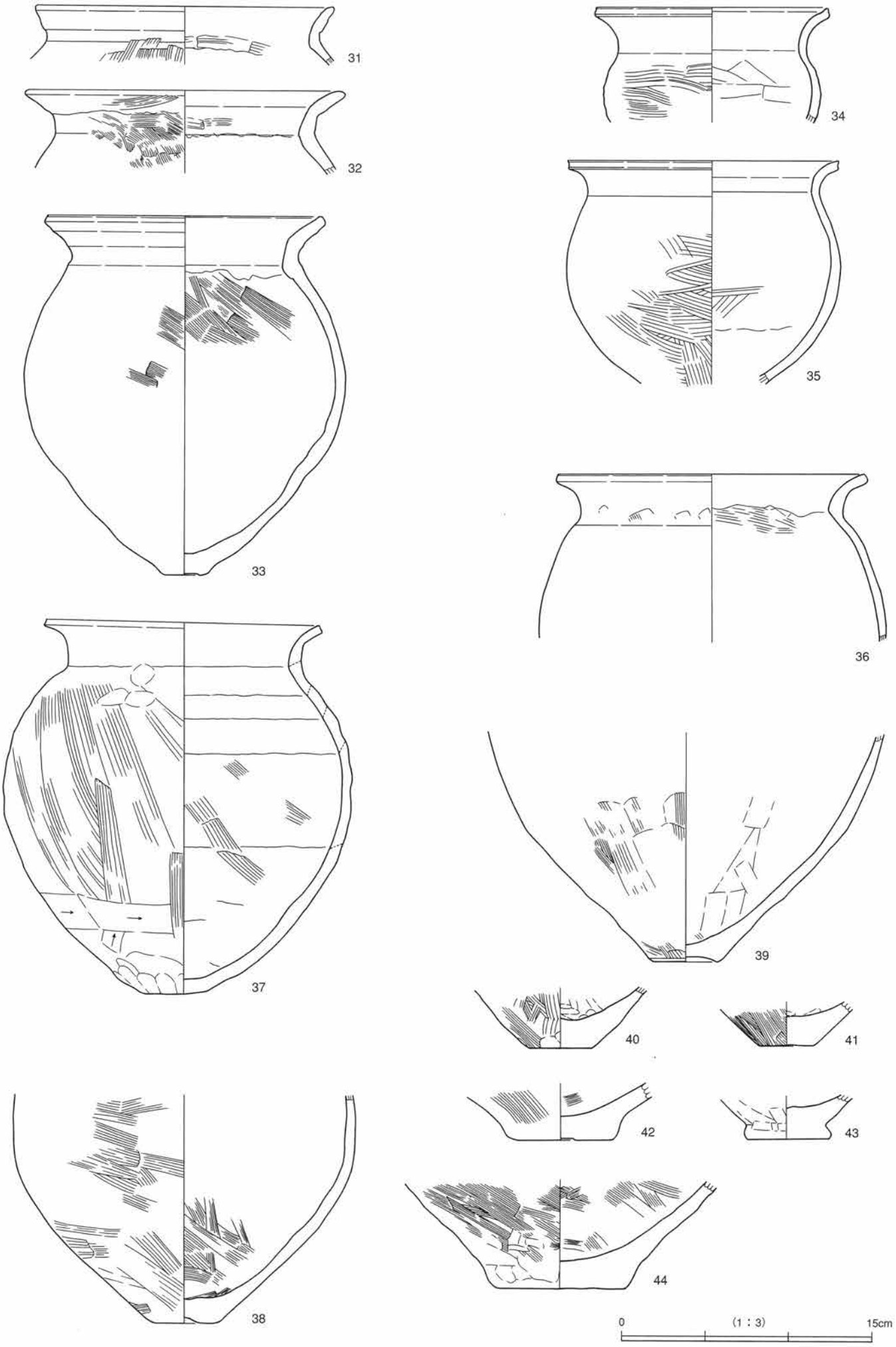
5　緑灰細砂シルト　2～5 mm大の炭化物を多く含む。遺物含む。

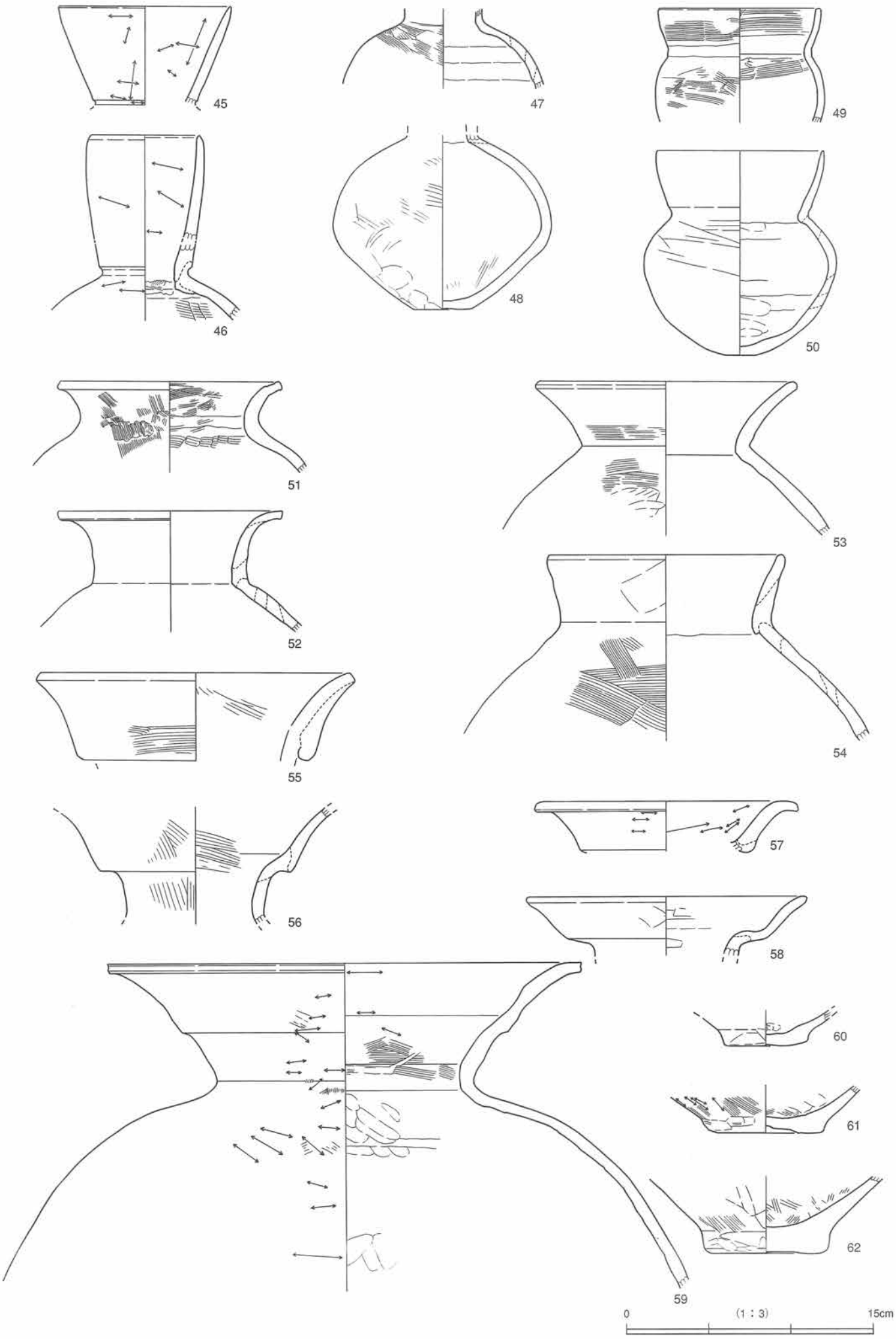
Pit 4　土層説明

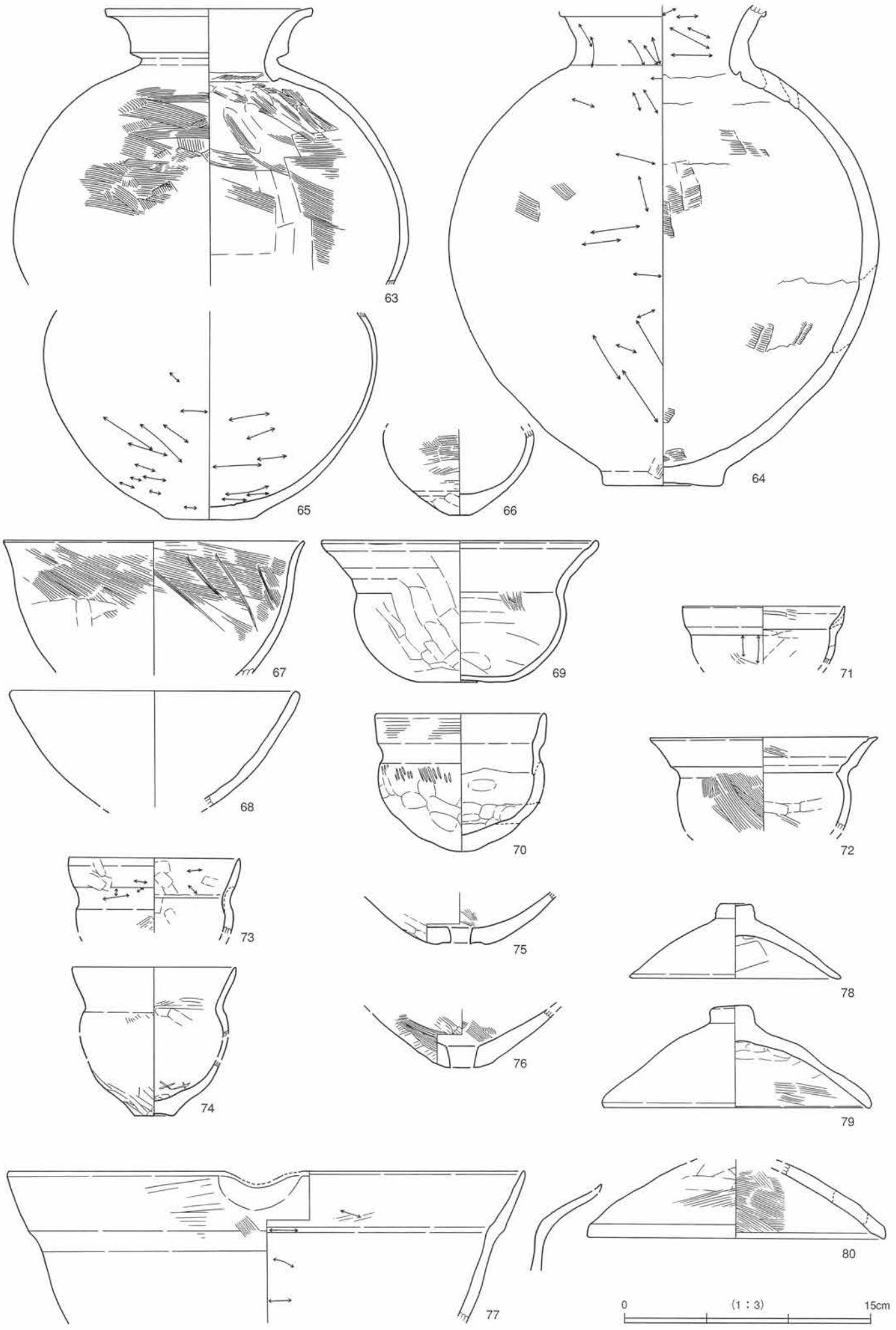
1　オリーブ灰色シルト　褐鉄鉱を多く含む。5～10mmの炭化物を多く含む。

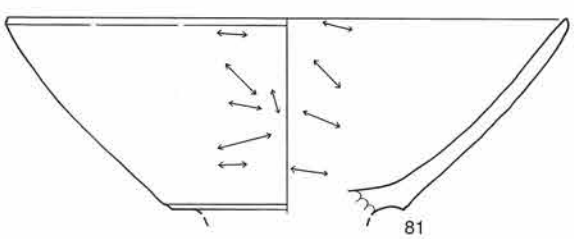

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
0
(1：3)
15cm

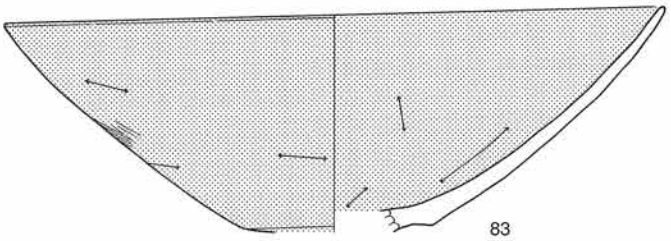

16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
0
(1：3)
15cm

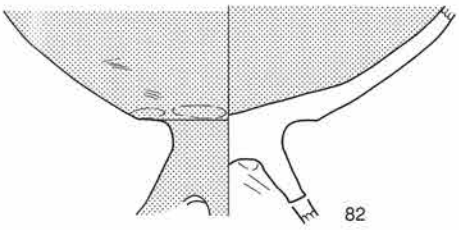

31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
0
(1：3)
15cm

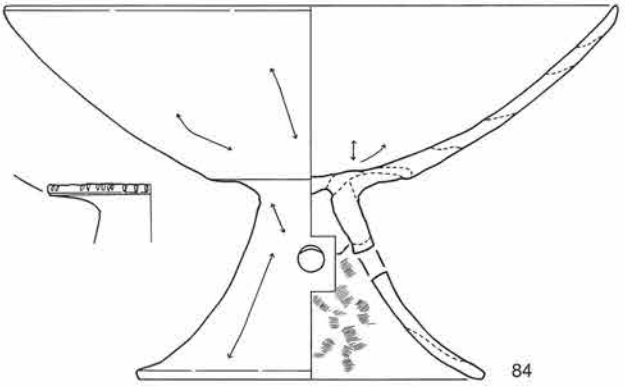

45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
0
(1：3)
15cm

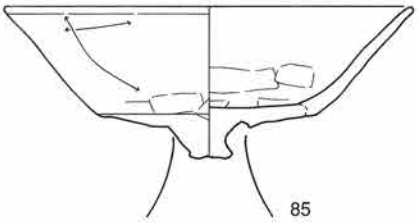

63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
0
(1：3)
15cm

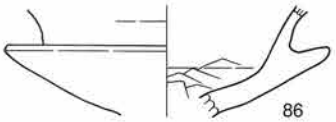


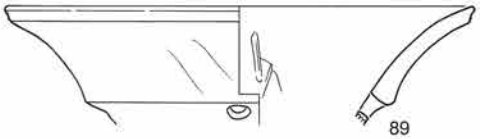


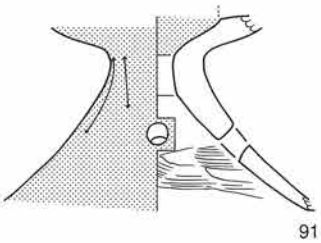


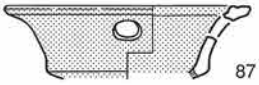


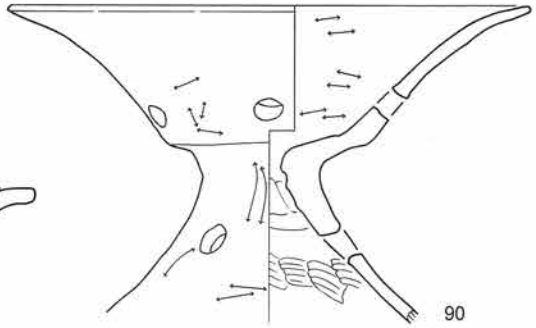


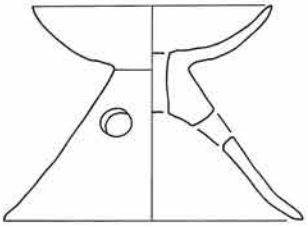


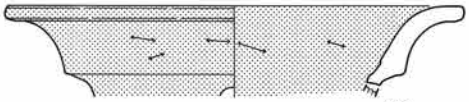


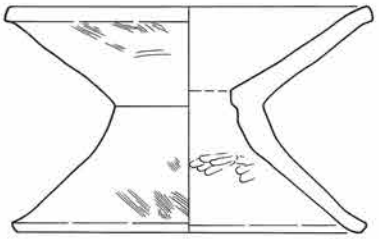


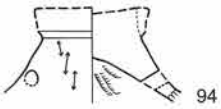


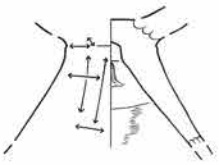


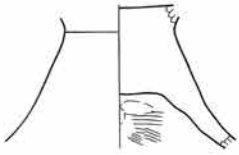


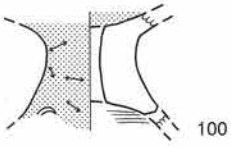


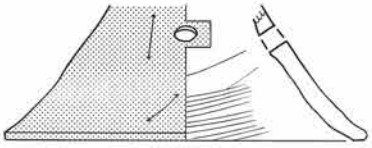


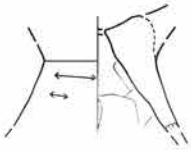






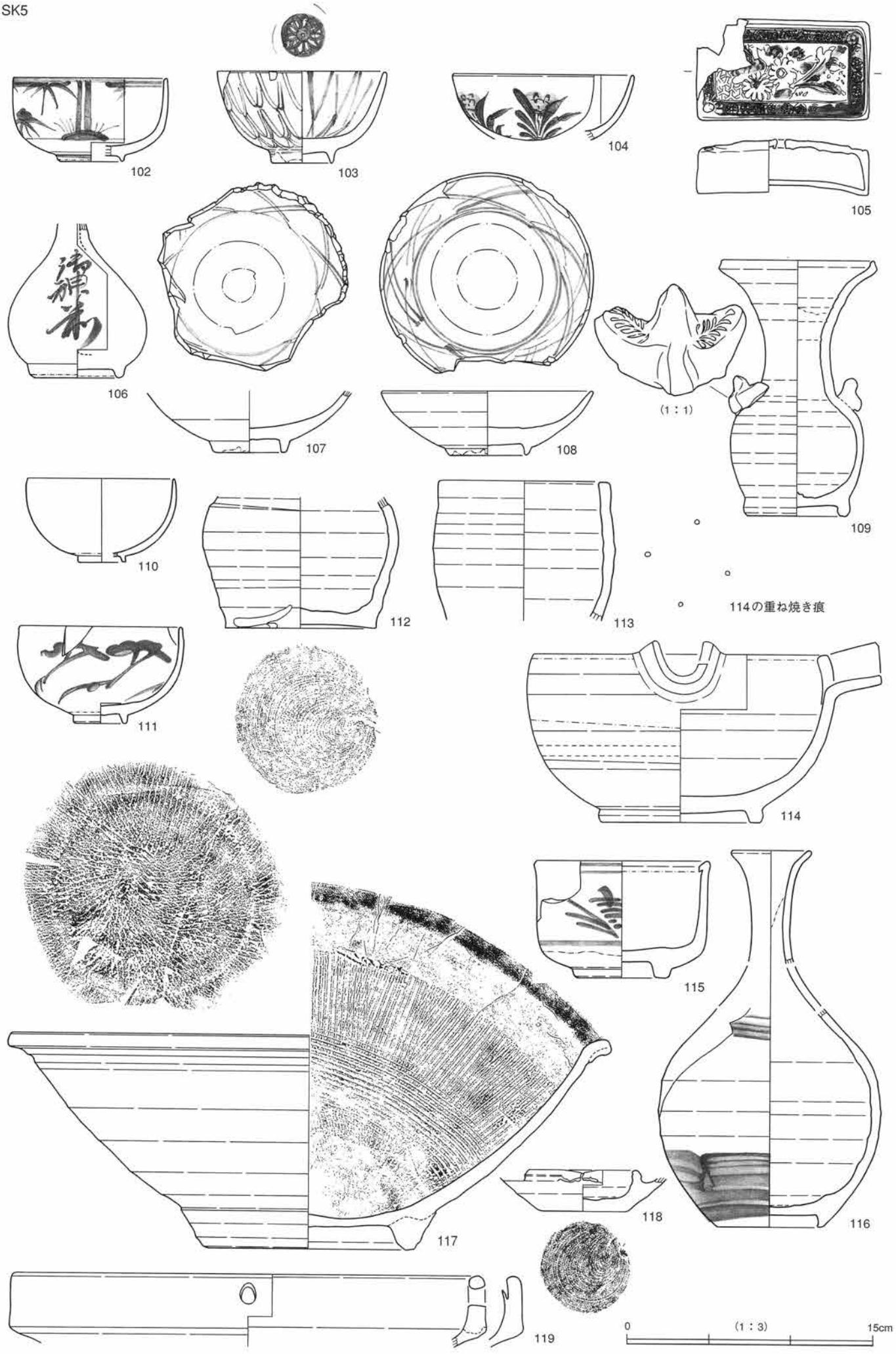


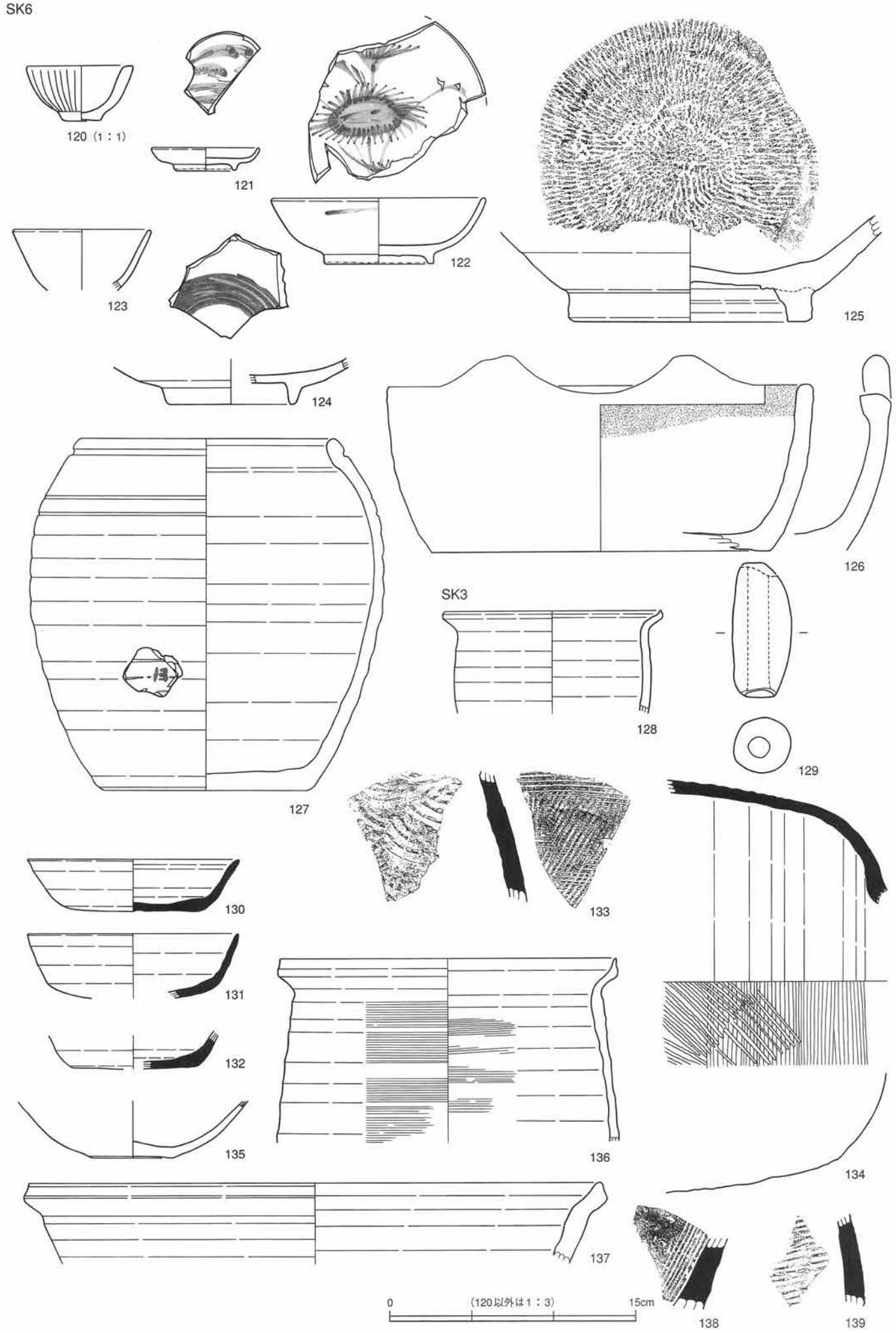




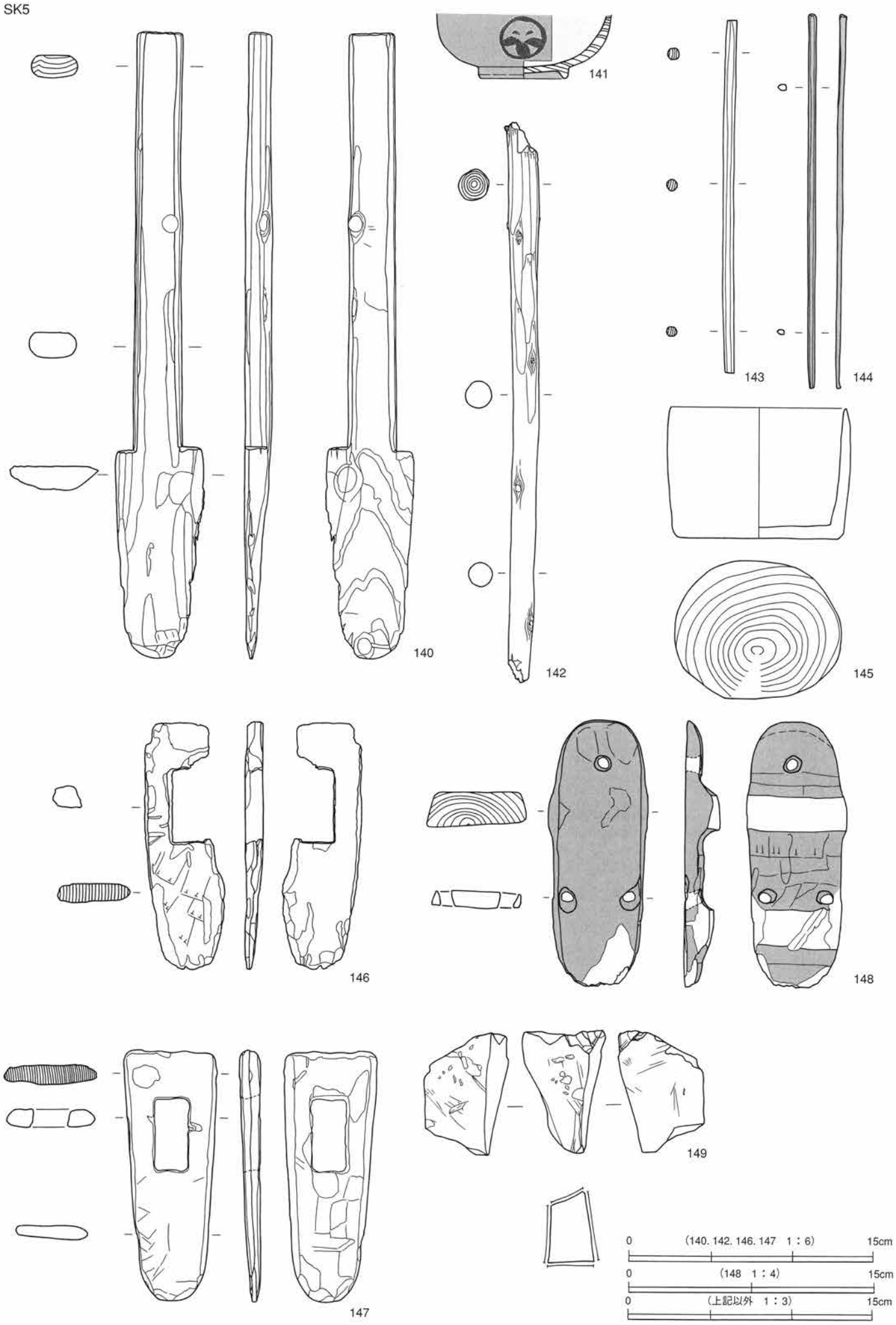
0 (1：3) 15cm

SK5

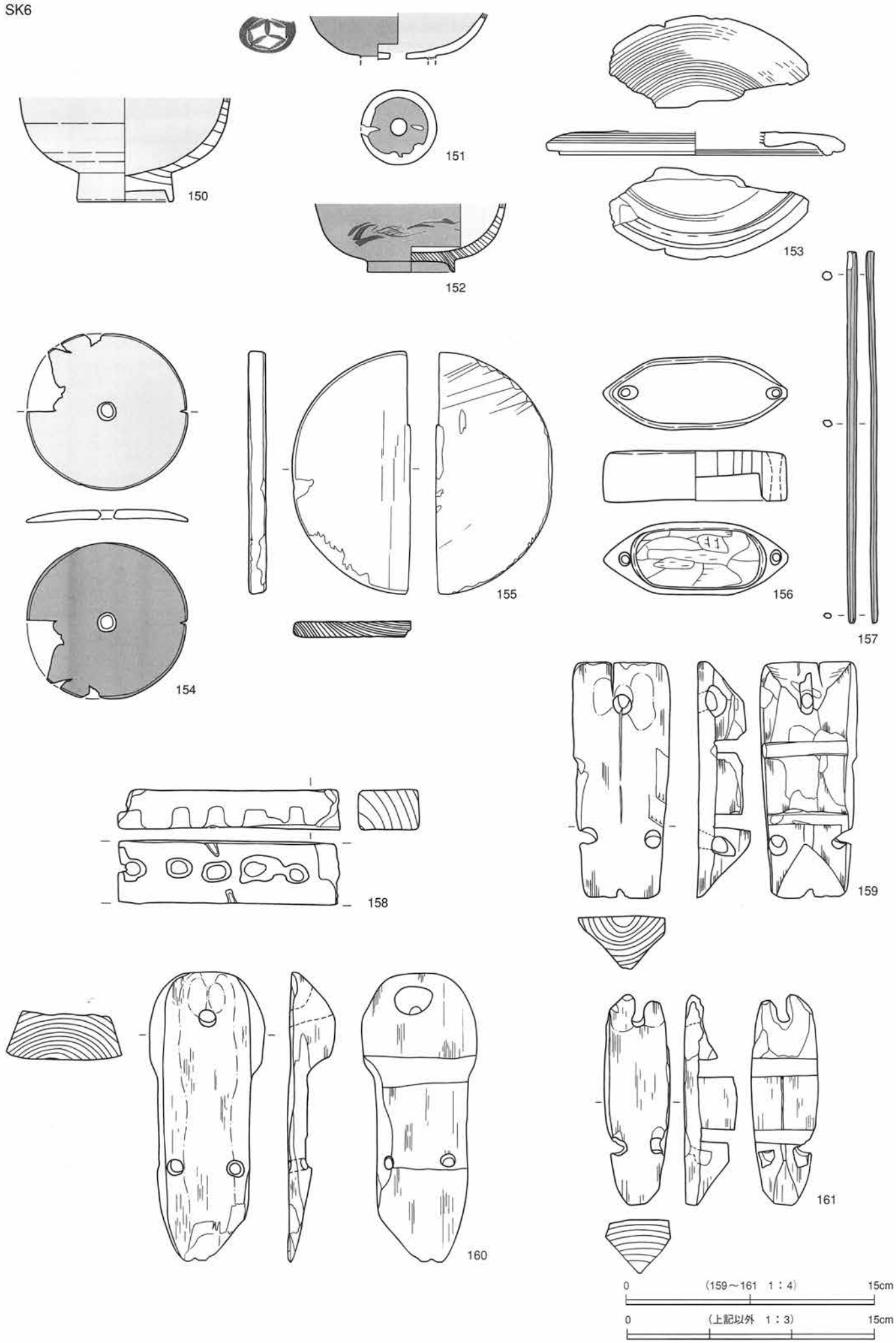

102
103
104
105
106
107
108
109
(1：1)
110
111
112
113
114の重ね焼き痕
114
115
116
117
118
119
0
(1：3)
15cm

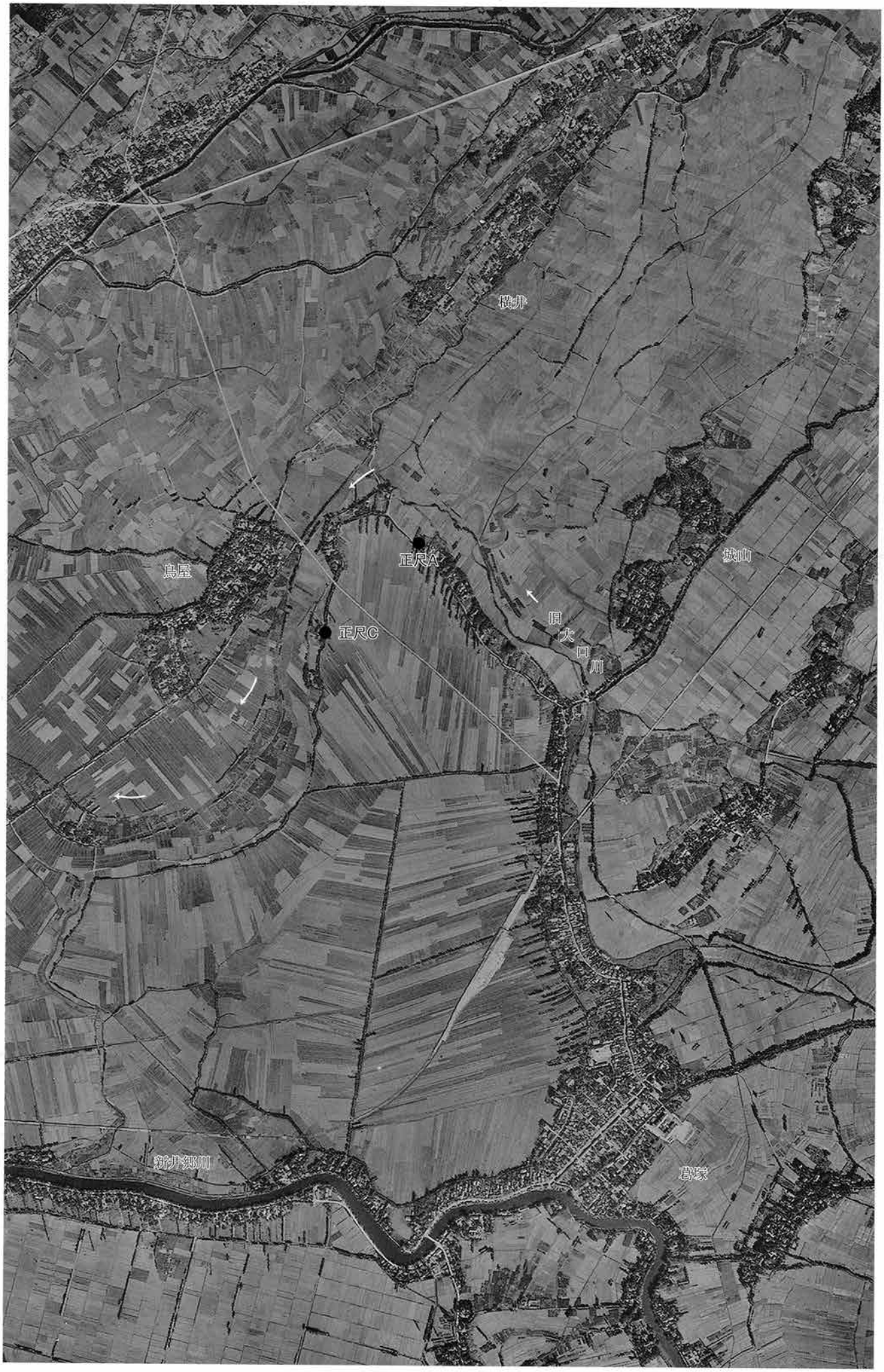

SK6
120（1：1）
121
122
123
124
125
126
127
SK3
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
0
（120以外は1：3）
15cm

SK5


141
140
142
143
144
145
146
148
147
149
0 (140. 142. 146. 147 1：6) 15cm
0 (148 1：4) 15cm
0 (上記以外 1：3) 15cm

SK6


150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
0　（159～161　1：4）　15cm
0　（上記以外　1：3）　15cm



（1947年10月7日 米軍撮影）

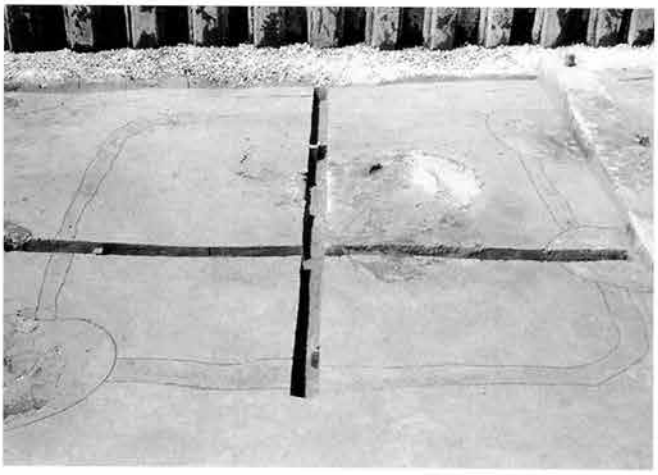
基本層序③

東区沢の堆積状況

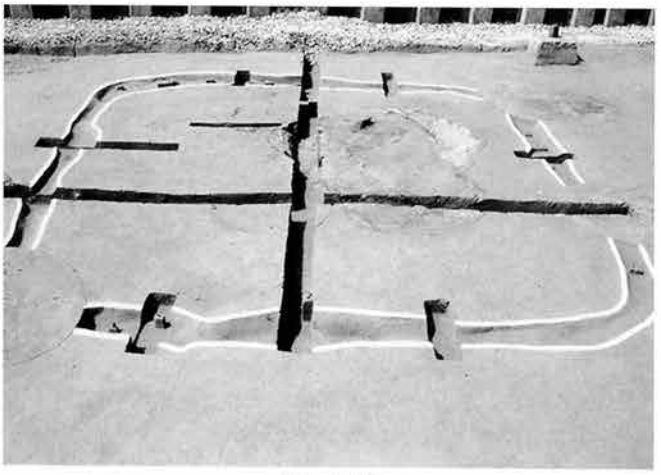
火山灰検出状況

6B・C遺物出土状況

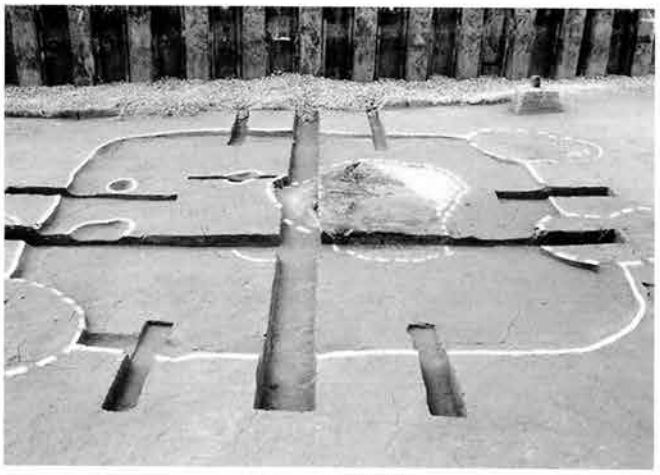
5B・C遺物出土状況



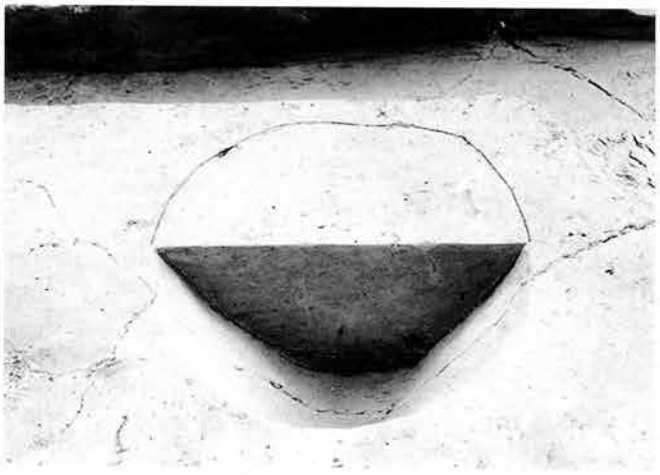
SI1検出状況



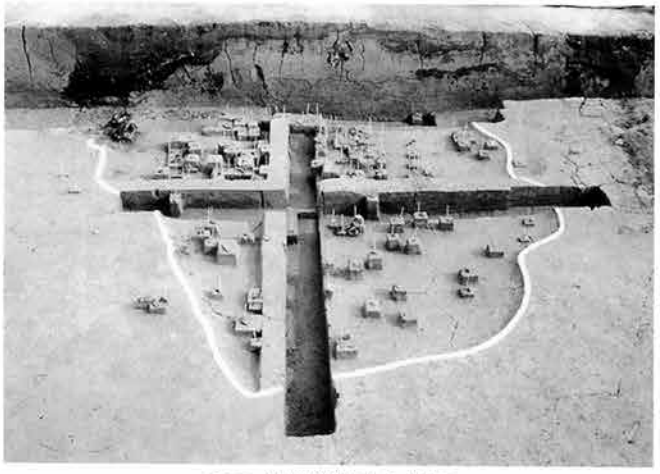
SI1周溝



SI1完掘状況



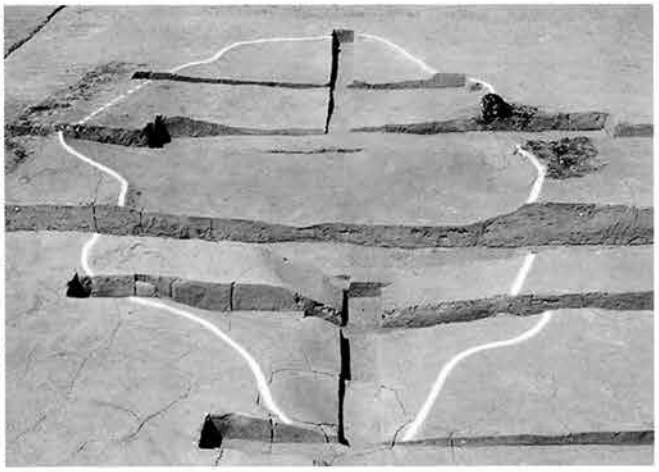
SI1ピット（P4）セクション



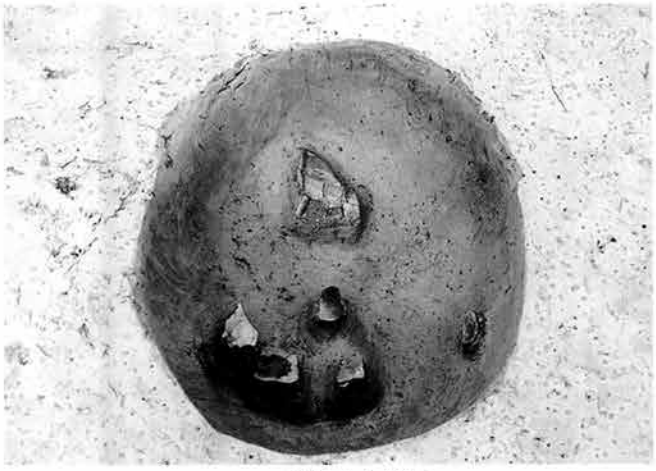
SK2北側遺物出土状況

SK2メインベルト内遺物出土状況

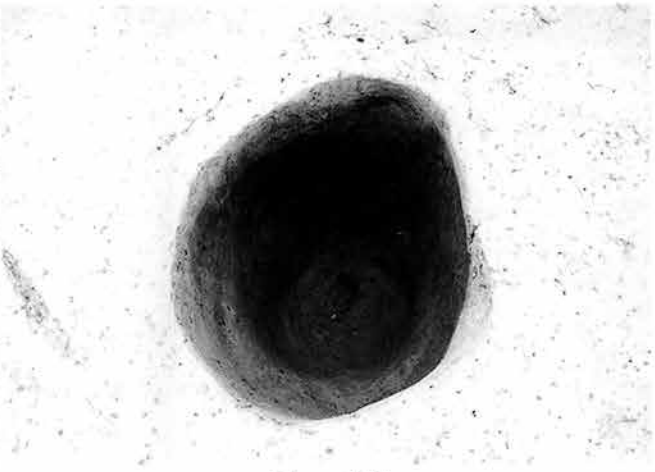
SK2 中央部遺物出土状況（近接）



SK2 完掘

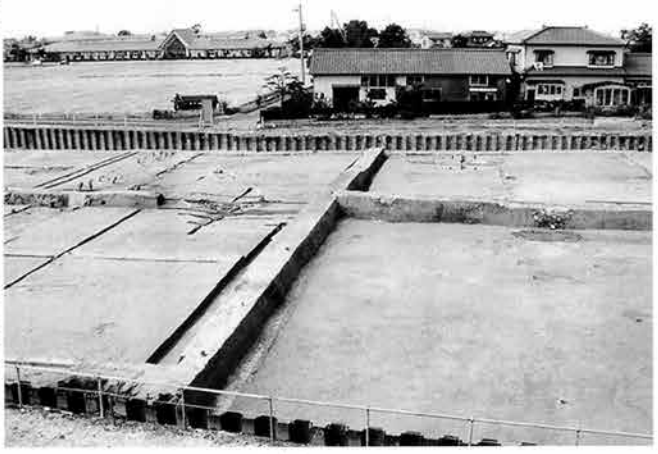


SK3 遺物出土状況

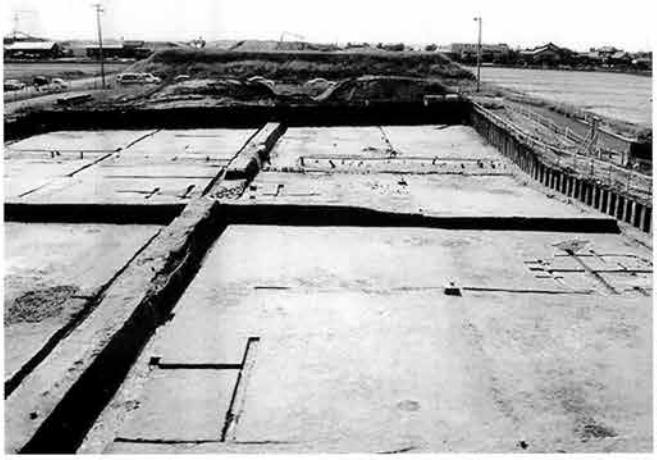


Pit4 完掘

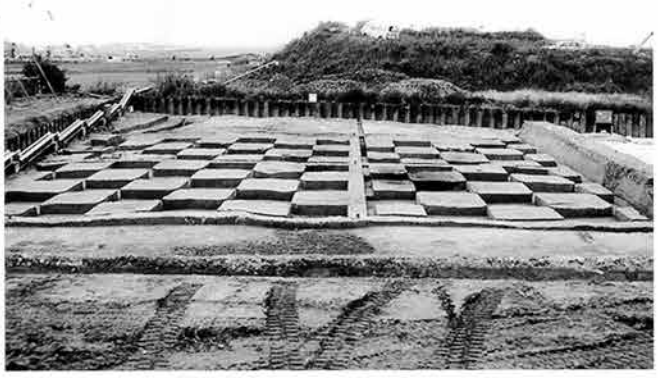
SK5（江戸時代）完掘



西区完掘（南西から）



西区完掘（東から）



東区完掘（西から）

1

4

6

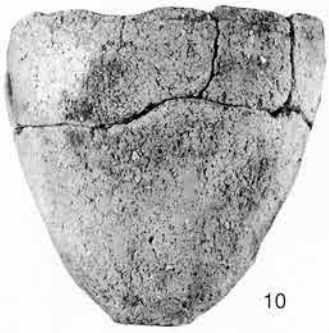
2

7

3

5

8


10

11

9

12

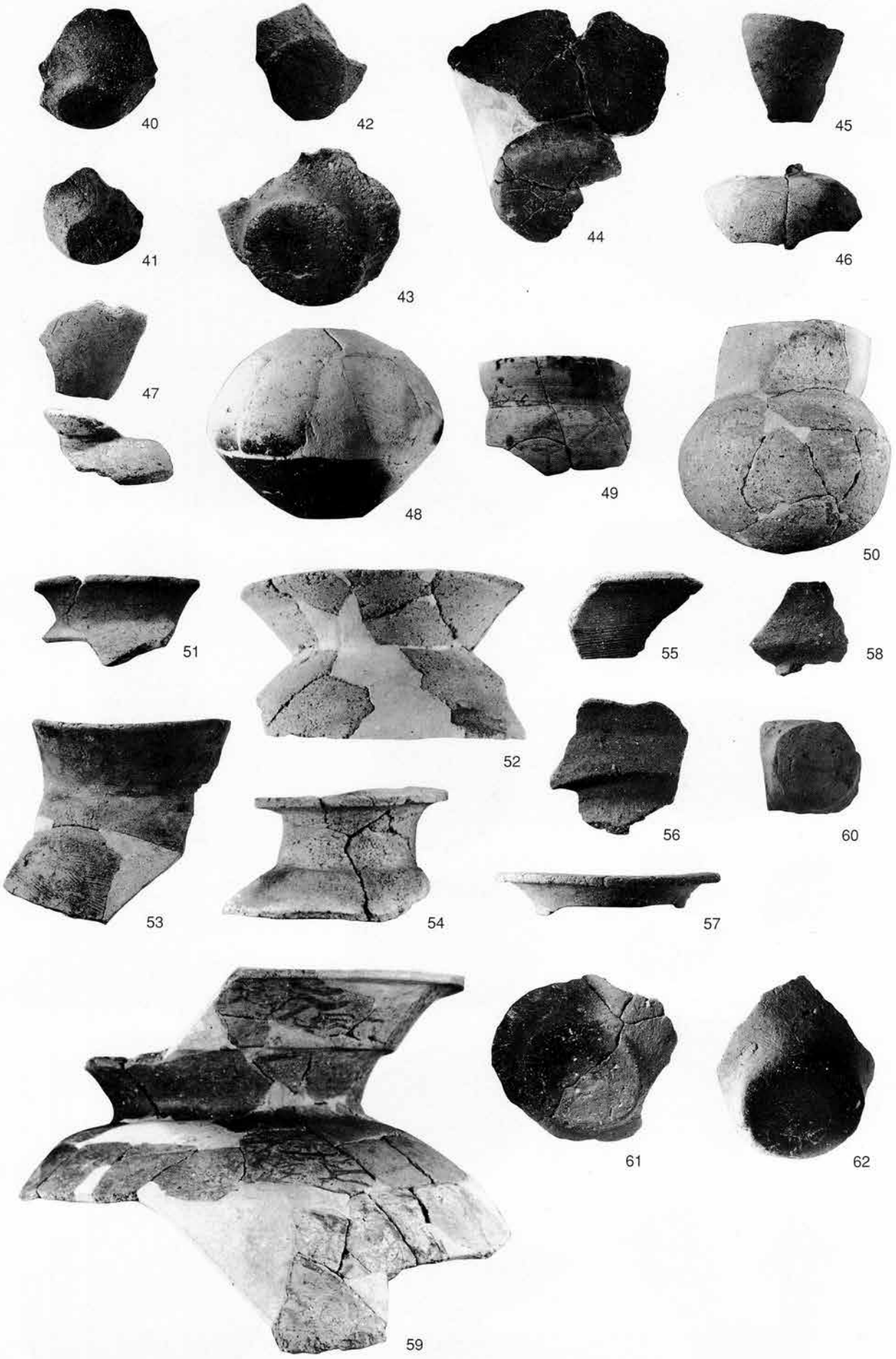
13

14

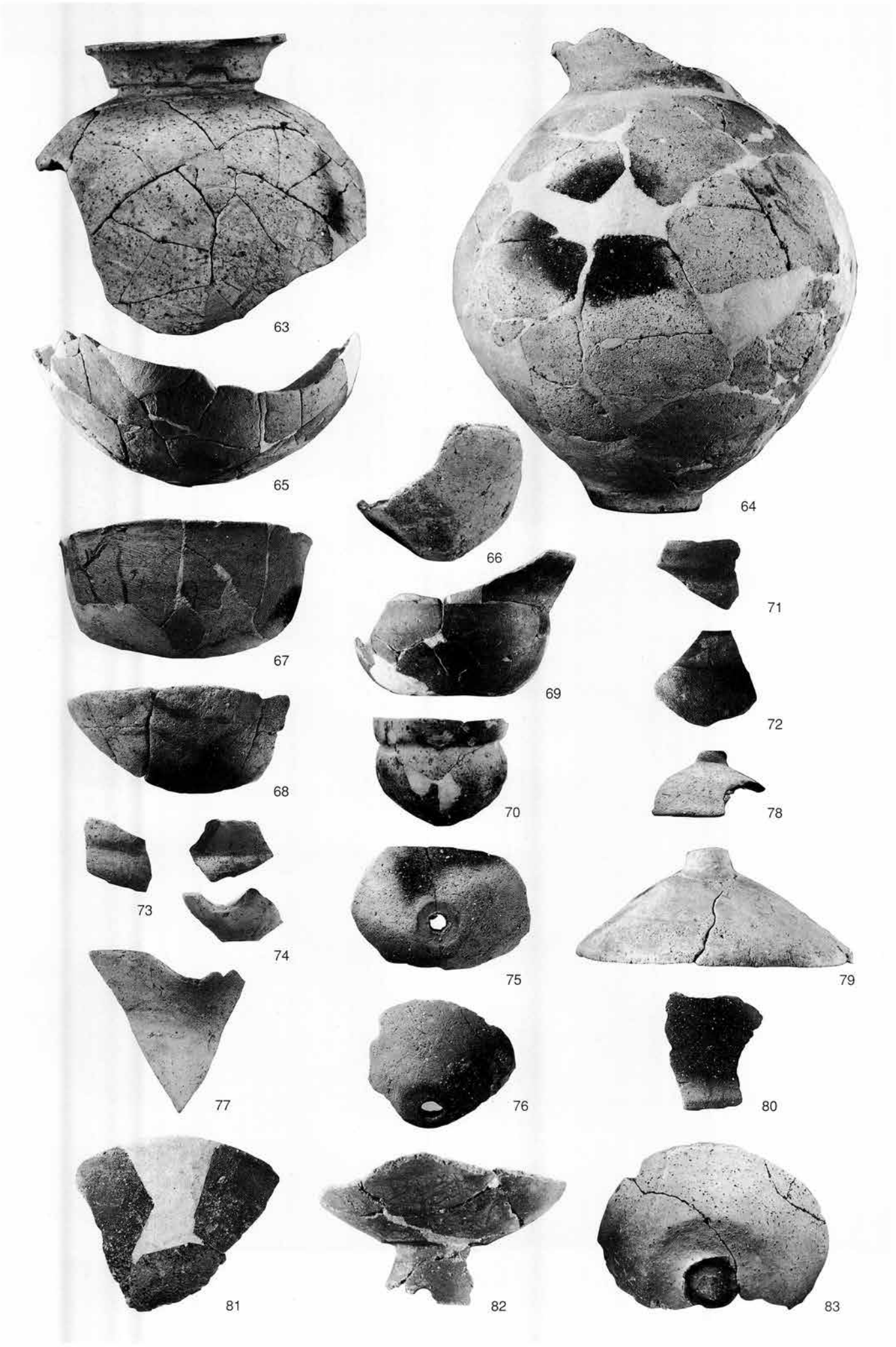
15

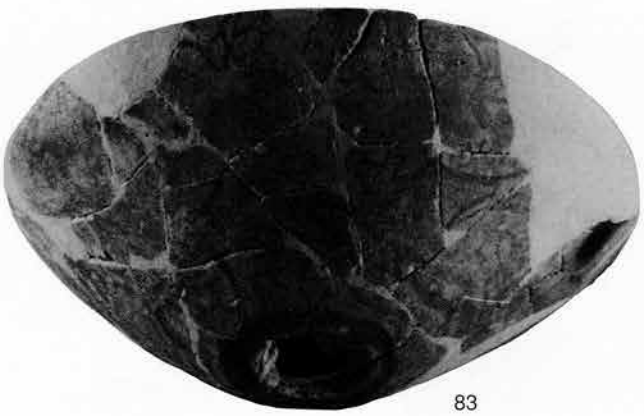
（1：3）

16
18
20
21
17
19
24
25
26
22
23
27
28
30
31
32
29
34
33
37
35
36
38
39



（1：3）


63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83


83

87

88

86

89

84

90

91

92

93

95

97

99

94

96

98

100

128

130

129

131

132

134

138

139

136

137

133

102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127

140
142
143
144
141
145
146
147
149
151
148
152
154
153
155
156
158
157
159
160
161

報告書抄録

ふりがな	しょうじゃくいせき
書名	正尺A遺跡
副書名	日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書
巻次	Ⅱ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第107集
編著者名	尾崎高宏・相羽重徳・栗林宣明
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒956－0845　新潟県新津市大字金津93番地1　TEL 0250－25－3981
発行年月日	平成13年6月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
正尺A遺跡（しょうしゃくえーいせき）	新潟県豊栄市葛塚字子辰高入3059番地ほか	71	148	37度55分40秒	139度13分10秒	一次調査 1999. 6.14 1999. 6.17 二次調査 2000. 5.22 2000.10.20	3,800	日本海沿岸東北自動車道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
正尺A遺跡	集落跡	古墳時代前期	竪穴住居	土師器・須恵器	
		江戸時代	土坑	陶磁器・木製品	

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第107集
日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書 Ⅱ
正尺A遺跡

平成13年6月29日　印刷
平成13年6月30日　発行

発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市新光町4番地1
電話　025（285）5511

編集　㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新潟県新津市大字金津93番地1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　㈲平電子印刷所
〒970-8024　福島県いわき市平北白土字西ノ内13
電話　0246（23）9051

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第107集『正尺Ａ遺跡』　追加事項

頁	追　加
６ｐ　第４図　新潟平野の地形	（[田中ほか1996]を一部改変）
３７ｐ　引用文献	田中久夫・長谷川正・木村澄枝・岡本郁栄・坂井陽一 1996「新潟砂丘の形成史」『第四紀研究』35巻3号 日本第四紀学会）

新潟県埋蔵文化財調査報告書第107集
日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅱ　正尺A遺跡
正　誤　表

頁	行・表	誤	正
例言	上から19行目	第Ⅲ章１～3　４Ａ～Ｃ・５　尾崎、４Ｄ　相羽	第Ⅲ章１～３　４Ａ・Ｂ　尾崎、４Ｃ　相羽
1	第１図		縮尺１：50,000
3	１行目	補助ベルトフ脇に	補助ベルトを脇に
7	３行目	上黒山～葛塚ラインの。	上黒山～葛塚ラインの、
7	４行目	縄文時代前半後期	縄文時代前期後葉
7	10行目	城山ラインの。	城山ラインの、
8	第５図遺跡名26	紙土地亀	上土地亀
11	下から13・15行	上層（２層）・・・下層（３層）	上層（３層）・・・下層（４層）
13	２行目	近隣の砂・砂礫の	砂・砂礫の
14	22行目	55は～段状するもの	55は～段状を呈するもの
15	12行目	大橋・期	大橋Ⅴ期
15	4行目	Ⅲ層及びⅣ層	Ⅱ層からⅣ層
18	10行目	蓮歯下駄	連歯下駄
32	３行目	①（中略）見らない	①（中略）見られない
34	24行目	駿二	ると
35	２行目	会津本郷産	会津本郷系
42	木製品観察表	蓮歯下駄	連歯下駄
図版15	航空写真		出典：昭和２３年米軍撮影　国土地理院